九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジャン・パウルの『ゼリーナ』翻訳

恒吉, 法海
Faculty of Languages and Cultures,Kyushu University:Professor Emeritus:German Literature

https://hdl.handle.net/2324/24684

出版情報：ジャン・パウル　研究書・翻訳書, pp.1-95, 2012-08-30
バージョン：
権利関係：

ゼリーナ　あるいは魂の不死について
（1827 年　死後出版）

ジャン・パウル著
恒吉法海訳

恒吉法海・九州大学リポジトリ翻訳研究　6
2012 年 8 月 30 日

目次

Ⅰ水星　面積［面内容］ ----------4
昔のカンパンの谷への旅仲間の内輪話　ー　壊滅的信仰の全容　ー　雷雨の一行

第一の細分割 ----------4
騎兵大尉カールゾンの過去と現在　ー　著者へのカールゾンの招待
第二の細分割 ----------6
カールゾンの手紙
第三の細分割 ----------9
壊滅的信仰
第四の細分割 ----------12
雷雨の一行

Ⅱヴィーナスあるいは明けの明星、宵の明星　面積 ----------18
ヴィアナへの道程　ー　ヘンリオンの肖像　ー　ゼリーナの愛と生活　ー　宇宙の輝き　ー　最新の情報

第一の細分割 ----------18
ヴィアナへの道　ー　ゼリーナの出現　ー　ヴィルヘルミとの再会　ー　ゼリーナの生活と愛
第二の細分割 ----------23
宇宙の輝き　ー　ロイドのコーヒー店

Ⅲ地球　面積 ----------28
魂の輪廻について　ー　ゼリーナの出来事

第一の細分割 ----------28
予備会話　ー　魂の輪廻
［第二の細分割］ ----------34
［ゼリーナの出来事］

Ⅳ火星　［面積］ ----------36
［公使館参事官　ー　ヴェッターホルンへの散策　ー　不死への懐疑としての眠り、夢、高齢そして死　ー　不死と和解した眠り、夢、高齢　ー　精神と肉体の関係］

第一の細分割 ----------36
［公使館参事官　ー　ヴェッターホルンへの散策］
第二の細分割 ----------38
眠り　ー　夢　ー　不死への懐疑としての高齢と死去
第三の細分割 ----------42

不死と和解した眠りと夢、高齢
第四の細分割 ----------44
肉体と精神の間の関係

Ⅴヴェスタ［小惑星］［面積］ ----------57
［美しい週、夕方のシャルマイ　ー　まだ悲報はない　ー　神の存在からの結論］

Ⅵユーノー　［面積］ ----------61
［報酬と処罰　ー　過激な悪に対して］

Ⅶケレス　［面積］ ----------63
［幸福であることの権利　ー　現世の苦痛からの結論　ー　痛風女性の棺　ー　憧憬とより高い素因からの結論］

Ⅷパラス　［面積］ ----------69
［母親の死についてのゼリーナの寡黙な痛み　ー　興奮し、自己磁気睡眠療法　ー　胸の傷の夢　ー　その傷についての公の情報　ー　磁気睡眠療法の決意と準備］

Ⅸ木星　［面積］ ----------73
［最初の磁気睡眠療法　ー　ヘンリオンの精神の語り　ー　肉体の［死の］悲しみに反論するカールゾン　ー　死体への関与の説明　ー　再会に反論する悪魔の弁護士　ー　知識、幸福、価値の突然の完成への反論　ー　他の民族の夢　ー　再会のための記憶の欠如　ー　記憶の証明］

第一の細分割 ----------73
［最初の磁気睡眠療法　ー　ヘンリオンの精神の語り　ー　肉体の［死の］悲しみに反論するカールゾン　ー　死体への関与の説明］
［第二の］細分割 ----------77
［再会に反論する悪魔の弁護士　ー　知識、幸福、価値の突然の完成への反論　ー　他の民族の夢　ー　再会のための記憶の欠如］
［第三の］細分割 ----------82
［記憶の証明］

訳注 ----------85

解説 ----------89

あとがき ----------95

I

水星

面積[面内容]

昔のカンパンの谷への旅仲間の内輪話　ー　壊滅的信仰の全容　ー　雷雨の一行

第一の細分割

騎兵大尉カールゾンの過去と現在　ー　著者へのカールゾンの招待

私が三十年前(1)、多くの徒での旅の或る折、　ー　青春は旅に出たがるもので、夜中でさえ旅したがるもので、一方年取ると日中でさえ、いつも泊まりたがるものであるが　ー　申し上げるように最も素敵な一行とともに最も素敵な旅をカンパンの谷(2)を通ってしたとき、それは幸せな時代であった　ー　心の中ではほとんどなお青春時代であったからである　ー　つまり私の周りには単に親しい者のみがいて、私どもの周りにはただ幸せな者達のみが穏やかな緑なす山並みの上部にまでいて、そこでは若い牧人達が山腹で働く労働の男達や、下界の牧人の老人達、すでに静かな幸せの中にいて、青春から大地の中ではないが、大地の上に休んでいる老人達に、歌を届けていたのであった[*1]。

私どもの旅の会話は、読者がそれについての小本から承知しているように、大方魂の不死に関係していた。魅惑的谷や魅惑的洞窟に対する眺望に第二世界への眺望が並ぶこと花盛りの地球が星空の天に続くようなものである。ただ騎兵大尉のカールゾンだけは墓地を芽生えのない永遠の休閑地と見なしていた。それ故彼は、友人ヴィルヘルミの許嫁、自分は片思いに留まっていた許嫁が誤報で亡くなったと知らされたとき、「慰めのない嘆き」[*2]を詩作したのであった。

男爵ウィルヘルミは彼女と一緒にスペイン(5)の魅惑的宮殿に留まっていた、カンパンへの日中の旅の折で、そこへは結婚のために着いたのであった。しかし騎兵大尉のカールゾンは悲しい片思いの心と詩人の精神のためにさながら四つの翼に乗って、別の国々、ミューズの新しい高い山々に、憧れの新しいテンペの谷(6)に去っていた。『カンパンの谷』のまことの読者であれば、悲しい思いはしても容易に彼の恋がジョーネのためにまとった[尼僧の]ヴェール越しに見通せたことだろう。隠された恋ほど感動的なものはなく、この恋は自ら断念のために僧院の壁を築くものである。しかしただジョーネの死という誤報を通じて、傷を通して見るように、深く彼の胸の中を覗くことができた。というのは彼の立派な顔つきでは、そもそも顔つきの表面のメランコリックな影のために、とりわけ口元の若干の苦悶の表情のために、彼の苦しみの来歴は定めがたく、現在の苦しみというよりは昔の苦しみと容易に思われてしまったからである。さて男性の方が自分の感情を僧院に隠してしまうと、当然乙女の方がその感情と共に住むのは見えない教会ということになってしまう。仮に時折溜め息や熱い眼差しが高貴なカールゾンに現れたとしても、ジョーネはそれらを単に不死についての会話のより高級な話題のせいにしてしまって、自分の心は自分に対してさえも黙してしまうことになった。

ただ彼女の陽気な妹ナディーネだけが、彼女は単に排水溝だけを飛び越え、花壇の溝は真面目に徒で歩く女性であり、そして泣くときは心の中で泣いて、表面の頬には涙を見せない女性であるが、カンパンの谷の一行の中からなお彼女の許に留まっていた、さながら

ジョーネの真面目さとヴィルヘルミの屈託のなさの半陰影、中間色であった。

カールゾンは遂に自分の翼を折りたたんで、ドイツの騎士領ファルケンブルクに落ち着いた。さて自分の好きな双子座の光線、つまり詩文と哲学を享受するために、彼は自分の純な、しかし波打つ心を幾久しく珍しい女性に捧げて、すべての自分の波を静めることにした。それはヨゼーファ・フォン・＊＊＊伯爵令嬢で、彼女はその若さにもかかわらずアルバーノ、イドイーネ[7]といった侯爵夫妻によってある皇女の教育係典侍に任命されていた。しかし皇女は今生に約束したことをただ来世に守ることができただけであった。

さて更にフランスの戦争と国王[8]のせいでカールゾンにとって嬉しいことに男爵ヴィルヘルミはスペインから彼の近くに逐われることになった。男爵は魅力的領地を騎兵大尉の領地から程良く離れた地に買い求めて、それで両者は一つの大きな公園のただ多彩な両翼を形成しているように見えた。勿論両家族は都市でのように単なる声高な幅広い石畳の幹線道路で距てられるわけではなく、樫の木や菩提樹の森、村々、色とりどりの橋、葡萄畑や花々の野を通らずには優に一イギリス・マイル半の道のりを経た互いの許に達しないのであった。しかしながら後には二人の友人の子供達がこの緑の自然の道路を商路として、キャラバンのように砂漠を通るのではない商路として、毎日一回以上友人達の品物を交換のために通行したのであった。

時々両友人が私を彼らのドイツ的カンパンの谷へ招待してくれた。しかしその旅は再三延期された。それに新たな理由が加わった。というのは散文的に凍ったドイツさえもが押しに押されて燃え上がったとき、カールゾンの心はもはや自制できなかったからであり、プロイセンの民衆が葬儀の松明をかかげて自由を求めた偉大な年[1813 年]、海のように揺れて、長いこと敵の星座を頭上に我慢した後、遂に轟く高潮となって、逃げ足の敵で一杯の浜辺に押し寄せて、浜辺を越えて迫ったとき、彼は潮と共に流れて、殲滅の加勢をしたからである。戦争は行動の詩的な散文である、それ故青年達は戦争を求めるのである。アポロンとパラス[女神アテネ]は武器を帯びる。熱狂したカールゾンが武器を置いたままにしておくであろうか。

しかし彼が希望を、自他の希望を実現させて帰ってきた直後に、運命に遭遇することになった。運命は民衆の歓呼するときに個々人に溜め息を添えたがるもので、一方逆にしばしば民衆が雲に覆われているときには個々人に陽光を与えるものである。　ー　そんなわけで守られていた忠実な女友達のジョーネが、彼のところから　ー　この世から去った。彼女は幸い長く生きて、彼と彼女の夫に自分の心の完全な木霊、自分の姿の純然たる似姿を衷心から愛が続くように残していた、彼女の娘ゼリーナである。

そんなわけで、私の訪問の延期について話を戻すと、素晴らしい再会の時を失ってしまったのであった。人間は再会の時を、大事な青春の地や少年期の土地を再見する時であってさえ、延期すべきではない。火災[9]がその地を永遠に吹き払いかねないし、あるいは洪水に襲われるかもしれない。すると君の大事な過去が今一度失われることになる。少なくとも脆い親友[10]との抱擁は引き延ばすべきではない、君がまさに親友を訪ねようとしている時に、ひょっとしたらすでにこの世から去っているかもしれないのである。

今や再会の時を失して、私は更になおためらっていた。しかしそもそも高齢ということを考慮に入れて欲しい。高齢の時には、自らそのものさえも変えたくないものである。高齢は日月を立ち止まらせようとするヨシュア[11]のようなもので、それはもっと長く敵に襲

いかかるためではなく、自らもっと長く座して横たわっているためである。その上必需品という敵軍に対する防御の重装備が加わる。一方若者であれば自分の体と精神一つを武器にして戦争に赴くものである。それ故現著者は、以前夏服で、外套のポケットだけをバッグにして、　ー　下に置く黒い馬車用革製品といえばリボン付き靴だけで　ー　ライプツィヒ[12]からハルバーシュタットの友人グライムの所か、ヴァイマルのヘルダーの所に再度飛んで行くのを心ある読者方に目撃されたものであるが、今望まないのは、心ある読者方に現著者が、今いかように馬車に座しているか、厚紙箱や本、瓶、靴、帽子の荷物に囲まれて、奥の鎖につながれたトランクは別にしても、脚を伸ばせずにいる様を往事の現著者と比べられることで（それを望まないと申し上げている）。

しかし一八二二年私を素敵なドレスデンから帰還させた馬車から私が降りたとき、私はすぐにまた馬車に乗り込むことになった。ファルケンブルクへ来るようにという三通の招待状を受け取ったからである、二通は短いもので、一通は長いものであった。一つは老いたカンパンの谷の友人、ウィルヘルミ男爵からのもので、自分の娘ゼリーナの初めての依頼を叶えて欲しいというものであった。娘は彼同様に熱心に私の本を読むし、いやもっと勤勉に真剣に読んでいるからというのであった。もっと短い招待文ではこのゼリーナが衷心から、よくカンパンの谷での会話を思い出していた彼女の母親の昔からの友人と、もっと本からよりも身近に知り合いになりたいと願っていた。自分は母親が春が来るたびに喜びを見いだしていた楽しいヴィアナ[*3]であらゆる木陰道や丘を私に紹介したいというのであった。　ー　カールゾンのもっと長い手紙は次に少しだけ削除して披露することにする。

*1　ジャンリス夫人、『フェリシエ・Ｌの思い出[3]』。
*2　『カンパンの谷』124頁[4]。
*3　ジークマリンゲンにも古代ヴィアナがあった。バルトの『ドイツ人達の太古史』参照。

第二の細分割
カールゾンの手紙

ーー　貴方にはとうとう私とヴィルヘルミの子供っぽい幸せを共に味わっていただかなくてはなりません。殊に陽光の最も長い青空の日々、豊かな風光明媚な庭園でそうして頂きたく、そこでは穀物畑や花畑、谷や村々がファルケンブルクやヴィアナと共に見られるのです。貴方は私どもの中ではそもそも私と男爵しか御存じありません。　ー　私どものほとんどを御承知ではありません。私どもは外見が変わっただけではないのです。　ー　でも他の者は皆貴方を存じ上げています。私どものゼリーナはジョーネの昔からのカンパンの友の貴方をびっくりさせ喜ばせることでしょう。これは女性ですが、織り続ける空想と掘り続ける哲学とを尋常ならず融合させていて、この女性について鋭く確実に描写することはかないません。彼女は私の許によく訪れて、私と友に至高の星々について語ったり読んだりするのですが、人間の知識や勤勉の流星について話すことはなくて、かくて時折

彼女はその神々しい母親の所から送り届けられた存在で、なお母親の微光を顔に宿しているかのように思われるときがあります。彼女の魂全体が開けっ広げで、ダイヤモンドのように透明です。それでいて宝石のように堅固で密なものです。しかし彼女には真の女友達が欠かせず、彼女にとって大切な存在となっています。私の娘のナンティルデがその女友達です。

私の望むせめて半分ほども滞在して下されば、ひょっとしたら私の息子ヘンリオンに会えるかもしれません。息子は今まだナポリ・ディ・ロマーニア城塞を前にしています。大学では彼は、元来戦争に従事していたけれども、熱く犠牲的に哲学やギリシア史、ローマ史、特に文芸に没頭していて、あたかも軍馬の代わりにただ講義壇にしか登る気はないかのようでした。

しかし今や血を流しつつ解放されたギリシア人達[1]が戦場に現れ、彼の心が燃え、彼は自分の本を閉じてしまいました。私は彼のことを非難し、警告することはできなかったのです。高貴なことを愛していましたし、彼の正当化のために与えることになった私自身の例があったせいでもありました。私は家長でありながらも十字架にかけられた自由の聖なる墓地への騎行に参加しており、この自由の墓石を倒せるのは地震と天使しか考えられなかったのです、しかし私の周りのほとんど皆がそれに反対で、私の友人ヴィルヘルミもそうで（ただゼリーナは別でした）、そして心の中では私の妻も反対でした。妻の言うには、自分は神を信じてすべてを喜んで受け入れるということでしたが。しかし最も強硬に反対したのはナンティルデとアレクサンダーでした。いや娘はあるときかくも善良な若者が大胆に野蛮人達の忌まわしい動物的戦いに参入することにいつになく熱く反対したので、自由に考えるアレクサンダーさえもが彼女と一緒になってこう言ったのです。「私もやむを得ないとなれば槍を取ります。しかしトルコ人達の奴隷的農耕鋤へのひどい馬具並扱い、人間の家畜小屋への駆り立て、卑屈に歪んだむき出しの背中、その顔を見ればアポロンの顔をしているかもしれないけれども、その顔は鞭を受けて深い痕を残している　ーー　いやはやその前に死んだ方がました、この死をおまえも私に約束しなければならない」。
ー

「しかし」とヘンリオンは言いました、「この黒い奴隷的運命を結局はどこかの戦士が引き受けなければならないのであれば、別の誰かの代わりに私が引き受けてもいい。戦役を求めている若者にとってギリシア戦役ほどにより良く、世界市民的な戦役があろうか。大抵の他の戦役は何ほどのものであろう。これらはギリシア戦役ほどには自分達だけで犠牲を払い、払わされた民族に自らの崇高化で報いることは決してないのだ」。　ー　「他の戦争は」と公使館参事官[*1]は言いました、「王座のクッションをより高くする　ー　あるいは王座の支柱を抜いて、更に打ち立てるということでもいいじゃないか。あるいはそれらの戦争は一人の愛人に対する侮辱への騎兵の一撃、大砲の一発による民族決闘という仕返しであるということでいいじゃないか　ー　あるいは歴史には、宗教戦争は言うまでもなく、立派な継承戦争が見られるということでいいじゃないか」。

「いや」とヘンリオンは答えた、「ギリシア戦争は継承戦争とも言える、つまり王座に就くのは教養かそれともまた野蛮かということになるから、それに宗教戦争とも言える、しかしそれは意見の相違の戦争ではなく、正義か不正義かの戦争だ」。

幸いヘンリオンは、決定的な一撃ですべての希望が確固たるものになったら、ペロポネ

ソス半島の再救出(2)ではすぐに帰ってくると私に約束しなければならなくなっていました。しかし共同戦線の境界石が色々とずれた後にようやく重要な城塞ナポリ・ディ・ロマーニア[ナフプリオ]の占拠を帰還の時と定めていて、今やノルマン将軍(3)の下その城塞を目の前にしていて、城塞の陥落は間近なのです。　ー　それでこの若者は恐らく私の許で貴方に御挨拶できることでしょう。

両兄弟の間には勿論戦争についての争いとは別の争いもありました。そこで貴方が一度公使館参事官のアレックスに会って、改心させてくだされば、殊にある事について改心させてくだされば嬉しく思います。つまりヘンリオンは現今の私同様熱く魂の不死を信じています。　ー　しかしアレックスは論難してこう言います。少なくとも真の命題の間違った証明には自分は耐えられない、と。行動の自由、意志の自由、感受の自由は神と人間によって束縛されているので、地上に残る唯一の自由、つまり思考の自由は残してきたと思いたいし、すべての体系やドグマは悪魔にくれてやるとこう言うのです。

御承知のように人間はしばしば薄い死んだ言葉に言葉を対置して、その言葉をただ感情へと煮詰めて霊を吹き込みさえすれば、言葉を別様に扱うことになりますので、それで私はアレクサンダーのために一工夫して、彼の目と心の間近に壊滅的信仰を近づけて、天国や地獄のない、いや空間のない暗闇の中に垂直に立つように仕向けてみたのです。貴方にこの試みを送ります。しかしお恥ずかしいことに私自身若い頃このような助けを必要としたのでした。ジョーネが亡くなったと思ったとき、『慰めのない嘆き』をすべての絶望の反抗の中で書いたときのことです。しかし青春というものはどんなに感情が生き生きとしていても普通感情を否定したり馬鹿にしたりする傾向があります。どんなに温かい宗教心があっても不信仰の傾向があったり、どんなに陽気であってもメランコリーの傾向や、陰鬱な夜の想い、悲劇への偏愛があったりするようなものです。というのは青春の自由への衝動は、すべての旧弊なものや強制的なものを越えて、それが自分の内部にあってさえ飛び越えていこうとするからです。私にとっては以前からすべての高尚な信仰が普通の人生の欲求でした、破壊は聖なるエルサレムの破壊に等しかったようなものです。かくて究極の原因についての現今の普通の否認(4)はいたく私には応えて、神性のイシス神のヴェールをただ二重に覆ってしまうのですが、他方洞察力のあるヘルバルト[*2]による究極の原因の新たな認定は私には本当に喜ばしいものでした。いや白状してよければ、生命が息吹きのない物体の粥から漏れ出るかのような滴虫類の説明は私には苦痛です、あるいは精神的なものが頭蓋骨になるのではなく、頭蓋骨が精神的なものを造り、規則化するような頭蓋学の形成とか　ー　あるいはフランス人による数学的な存在の宇宙形成とか天体工場、宇宙製造所あるいは愛する創造者の王座に冷たい紡績機械や鉄製の織機を置くような全く化学的なモザイクには苦痛を感じます。すでに最も早い時期から私が最も憎んでいたのは百科全書派で、これは利己心を行動の原理に、つまり不道徳を道徳の原理に押し上げ、かくて心の芽吹く核を黒い虫糞に砕いてしまうものです。そして時に単なる倫理上の理論のせいで知人と仲違いしたものです。誰もが何の役にも立たず、諸民族は何にもならないということ　ー　人々を啓発と高揚とで幸せにするすべての学問は単に経済と商業の発展のための温室覆いとして組み込まれるべきであること　ー　各人は神々と人間に犠牲としてただ祭壇の犠牲の骨だけをもたらし、脂肪部分は自ら食らうこと　ー　そしてどの女性も乙女のようには考えず、乙女にとどまらないこと、といった新たな証明のたびに、私の隣の

幾人かの者がはなはだ喜ぶのを目にすると、私は深く悲しんで、そのような証明の本を手放し、そう証明する教師や弟子達が論駁されるまで耳を傾けることさえしないものです、もとより高貴な人間は、卑俗な理論に屈したら、ただ学問的精神による新たな補強に喜んで取りかからなければならないと承知してはおります。　ーー

しかし何故かくも長々と自分の家族のことや冗長に自分のことを話しているのでしょう。　ー　是非急いで出立して、貴方が愛しているように私どもを愛してください。

カールゾン

汝、高貴な人間よ。君の側にいると私の心はさわやかになる、二度目のカンパンの谷紀行をすることにしよう。

次に壊滅的信仰の全容を紹介する。

*1　アレクサンダー

*2　彼の天才的な哲学への導きを参照のこと。第二版、220 頁。「我々は地球しか知らない。[そして我々がここで目にするのは、ニュートン的な引力の法則が消してしまうことはないであろう驚嘆の対象である。唯一の問い、つまり高等動物の体は外部は、美しさ故にシンメトリックに構成されているのに、内部は、美の痕跡なしに、右側と左側の構成の平等という痕跡なしに、すべてが利益を目指しているにはどうしてなのか、　ー　この問いは楕円軌道の天体の運行に対する問いよりも、無限にはるかに込み入ったものである]」。[友人オットーによる補完]。

第三の細分割
壊滅的信仰

かなりの錯誤が、月のように、遠方で穏やかな形姿と薄明かりの中で出現する。しかしそれらの間近に来てみると、それらは月のように天体観察者に対してその深い谷や火山を見せる。君達も魂の死滅の信仰の間近に来て、その洞穴や噴火口を見るがいい。

我々は皆、グラスを震わせて一つの音色を形成する単なる撒き砂による音型にすぎず、その後は音もなく風でグラスから虚空に吹き飛ばされてしまう音型にすぎないとまざまざと思い描いてみれば、諸民族や諸世紀が今存在し、昔存在したという人生の労苦や消耗は何の甲斐もないということになる。諸民族は形成され埋葬される、より高く形成されてはまた下敷きにされる。しかし苦労して大事に雑草の後、薬草が、葉の後、花が育っても何の役に立とうか。鋤いて埋められた諸民族の上にあるのは墓地である。過去にとって現在は何の役にも立たず、現在にとって未来は何の役にも立たない。永遠に学問は上昇するが、永遠に頭脳は自分達が存在した所で落下し、万物によって下で窪んでしまう。遂にどこかの民族に最高の学問、芸術、徳操を貸与して、それらで偉大な後世の諸民族がすべての先の諸民族を凌駕するようにするがいい、そして数千年間その精神的収穫と富とを多彩な人間の音型にしまっておくようにさせるがいい、しかし五十年すると音型と宝物は飛散してしまって、遺物しかもはや存在しなくなる。　ー　創造と精神の栄光は消えてしまう。と

いうのはもはや進歩はなくなるからである。ただ歩みだけがある。残っているのはぼんやりした劣等な生物だけで　ー　せいぜい過去の生物が灰を混ぜ合わせるだけで、　ー　かくてすべてのより高いものは新たに合成されなければならない。神は絶えざる終末の背後に永遠にただ絶えざる端緒のみを見るだけである。その太陽は永遠の灰色の枯れた黄昏を、決して沈まない黄昏を、死体が次々に続く見通しがたい墓地に投げかける。神は孤独である。神はただ死に行く者達の間にのみ生きている。

ここで不死性を我々の上の本性に移し、押しつけるようなことをしてはならない。というのは地上の精神、人間の精神が存在に耐えられないならば、太陽の精神も同様にできないからである。段階の差異、精神的有機的諸力のより高い階梯は、様式の差異、つまり存在と非在の差異といったものを生み出せないからで、ちょうど子供や白痴は死すべき定めであるが、男性やソクラテスは不滅であるという具合にはいかないようなものである。ー　かくて大天使といえども結局神々しい王座の足許に翼を休めて、消えて行かなければならない。それでこうした一般的精神の死滅に際してすべての惑星は単に諸民族の霊柩車として諸太陽の周りを回るにすぎないとすれば、人生のすべての目的とその謎の解明はすべて途方もない宇宙の大鎌によって刈り取られ、切断されてしまい、一つの混沌が精霊の宇宙よりもはるかに理に適ったものになる。というのは混沌の中では成果や調停による決まった省略や切断なしに諸力によるある戦いが少なくとも見られるからである。少なくとも敵対が自らの目標として維持されよう。しかし精霊壊滅の万有の中では、再中止のための絶えざる中止と発端のこの万有の中では、どのような規則性も昔ながらの混沌へと移行しよう、この混沌と比べれば、互いに墜落する諸惑星は単に化学過程を形成するだけであろう。

我々の人生がその長さという外見をかろうじてまとっているのは、我々が過去を現在に組み込んでいるという事情によるものにすぎない。しかし幅広い奔流となって我々に流れ込む果てしない未来の横に人生を置くと、人生は先鋭な瞬間へと縮んでしまう、その奔流のうち我々と接する滴はしかしどれも干上がっていくものである。互いに拡大もしないし、縮小もしないぶつかる両永遠の海に挟まれた人生というわけである。

我々は六十歳になるかわりに単に六十秒生きると考えてみるがいい　ー　実際我々は果てしない永遠の眼前では年取ることがなく、年を重ねることすらないのであり　ー　このような一分間生命がその苗床や収穫を別の一分間生命に遺伝し伝搬するために三十秒間考え、欲し、目標とするものに何の価値があろうか。一秒間民族の、つまり、人生の炎によって吹き付けられるかぎり、稲光し輝く[バイオリンの]松脂の粉末集合の啓蒙や明かりに意味があろうか。　ー　そして飛び過ぎながら燃えていく魔女の粉[ひかげのかずら類の胞子]の中で保たれ、照り返す図書館や芸術作品の死んだ副次的不死性というものが、永遠の消滅に　ー　それもしばしば自らの体験し後にしてきた数秒以前にすでに　ー　直面しているある人生[生命]を勇気づけ、鼓吹することができようか。花咲く世代が枯れ行く世代に絶えず混入して、進入していっても、その世代があたかも学問の電気導体であるかのように、枯れた世代に構成と存続の確固たる外観を与えることがなく、すべての世代がいつも若い世代と混じり合うことなく蜻蛉の群れとして死滅して、夕陽の中から水の中へ沈んで行くのであれば、我々にとって諸民族のすべての照明や光輝は、小さな弧を夜の間地上に描く蛍どもの消えゆく光と映ずることになるであろう。　ー　かくて個々人は皆自

他の向上のために助走し飛翔している最中に、何らかの傷つける一陣の風が突然すべての努力に対して落とし格子として墓石を落としてしまうと考えてくたびれてしまうに違いない。

そして死滅して行く諸民族の中から死滅して行く個々人に話しを戻せば、一瞬間でも逝く者達と逝く者達の間の愛というものを思い描くだけでも心が痛む。長い虚無の中から二,三の人間が瀕死の床から目覚めて、互いに親密な愛を込めて見つめ合い、それからまたすぐに数分後には永遠の虚無へと目を閉ざす。　ー　これは人間の間の、つまり両親や、子供達や、夫婦や、友人間の変わらざる愛である。不死性というものがなければ、誰も自分は愛したとは言えない。ただ溜め息をついてこう言えるだけである、自分は愛しようと思った、と。心は孤独に地上にあって、やがて遂には地下のサハラ砂漠で孤独ではなくなるが、それは自ら無になることである。心は悼み、泣くことすらできない。一瞬間温かく色づいて立っていた心の側の影は、涼しく、暗くなったわけではなく、広大な目に見えない夜の中で目に見えなくなったからである。汝が汝の愛する心と呼ぶちょっとした温かさ、赤みも、ひょっとしたらその心が悼んでいる瞬間にもまた目に見えない無感覚の夜になるかもしれない。その心は夜の一部ではなく（夜は部分を有しないので）一つの夜そのものである。

悼む者は、死者の巻き毛を取ったり、記念物を取ったりせず、また死者のために記念碑を建てないことだ。それは一つの虚無の記念碑となることだろうし、どんな遺品であれ、死者よりも生き生きしたものになろうし、死者は自らもはや遺品にすらならないのである。

ー　愛は生命を要求する。しかし精霊が滅するとなると、伝わった生命を否定すると同時に芽生えの生命さえ否定する、すると愛に呼応する心はなくなり　ー　至る所、世界と万有を通じて単に木製の楽器の伴奏があるだけで、生気のある歌声はなくなり、すべての生と心は見せかけ、機械となり、すでに地上に立っていながら棺の中に入ることになる。

しかし地球とは、生命のない万有とは何か。生命のあらゆる反照の詰まった微光を放つアンティパロスの洞窟[1]である。洞窟の底には透明な結晶の高い幹の小森があって、小道が結晶の藪を通って蛇行している。　ー　そして上からは立派な花綵装飾が冷たく硬く垂れ下がっていて、洞窟のどの丘も結晶で覆われている。この形成物をまとめる結晶水は瞬間の涙である。この涙が干涸らびてしまうと、形成物は砕け散る。

いや急いでこの微光を放つ硬直の洞窟から抜け出して、緑の世界の生き生きとした広がりにまた目を向けて、より新鮮に息をするがいい。　ー

不死性を信じないことの空しさが十分痛々しいほどに感じられていないように、不死性を信ずることの豊かさも十分には測定されていない。先の場合人間は開いた深淵や墓地を見下ろしていないとすれば、後の場合十分に深く開いた天国を覗き込んでいない。地上の日常の平面、人生の最中では視線は揺れている。あたかも人間は、まさにはつらつと自分を不滅のものと考える勇気が少しもないかのようである。そうでなければ、今までとは別の天国を味わえるであろう。つまり真の天国を　ー　永遠に自分の心に留まり成長する純な恋人達の抱擁を　ー　神々の場合のように死者なく癒える地上の傷のより容易な忍耐を味わえるであろうし、高齢化や死を、次の曙光の黄昏、月光としてより快活に眺めることができるであろう。神性が永遠を通じて汝の前に留まり続けるであろう、汝の目は朽ちることはないのだから　ー　煌めく星空はもはや汝の精神の上にかかる刺繍された柩衣[棺

掛け]ではない、精神は埋葬されることはなく、永遠に果てしない星々の間を通って行くのだから　ー　学問は、精神がより遠くその天に進むにつれ、諸恒星のように増えるのである　ー　すべての人生の労苦はエトナ火山を登るときの労苦のようなもので、その噴火口の周りには海やイタリアが広がっている。　ー　そして年老いた、地上の反芻されたニュースに飽いた人間は新しい傷に向かって行き、そして死ぬ。　ー　私が他人の方々に植え付けるすべての善なるもの、貴重なるものは、その後々の実りの風土を得て、そして私も他人の方々による実りを得る。　ー

確かにこうした不死性に対する信仰のすべての効果の生ぬるい反照は通常感知され、告白されている。しかしこれは永続の生き生きした観照の炎と比べれば物の数ではない。ー　この天上的な炎を半ば窒息させるもの、これを仔細に調べる気はない。これをなすのは主に人生の二つの惨めな点である。そのうちの一つの惨めさは、埋葬された肉体が空想をはなはだ低めて押さえつけるので、空想は精神を再びまた生き生きと棺から救出できず、下に閉じ込めてしまうということである。二つ目の惨めさは神学的見解、展望による従来の千年続く狭隘さである。この狭隘さのせいで我々の憧れの生き生きと定まったものが、ユダヤ教的キリスト教的狭小な不確かなものに変わる。哲学的体系は思ってもみたくない、その体系の息吹の前ではすでに現今の目に見える人生が縮んでしまうのであり、ましてや将来の目に見えない人生は縮まずにはいない。

かつての私とは違って、つまりかつて私はまだ遠くの精霊界を蜃気楼の逆しまの見せかけの中に見ていて、生き生きとしたさわやかな水の世界を砂漠と見なしていたのであるが、　ー　現在の私のように自分の世界を第二世界と有機的につなげて、浸透させている人は幸せである。人生の砂漠はその人に昼の暑い砂漠を越えて、毎夜、涼しい星々をより大きく、より煌めいて指し示している。

第四の細分割
雷雨の一行

私は我がアルバーノの好意的侯国にいて、カールゾンのファルケンブルクまで半日の旅をするだけになっていた。すでに朝方西の地平線上に見られる靄が雷雨を告げていた、単に靄が暑さのせいでまだ雲を形成するに至っていなかったからである。本来いつもは朝方空が霧に包まれると、それだけ一層容易に霧は午前中の陽気のせいで涼しい木陰となって太陽の方に昇り、そこに稲光の萌す気配はない。これに対して、正午に生ずる白い氷の山々は夕方には黒い火山に生長する。風も風向きを変えることがなく、同じ羅針儀の角から吹き続けていた。第二の十分な嵐の予兆である。　ーー　この詳しさは許されたい。私としては単に二，三人の天気の素人、雷嫌いな方々に若干の学問的パンくずや大麦パンを投げ与えることだけを意図していて、そのためのパン籠は相変わらず十分に残っているのである。

途中私にとって雷雨は　ー　ただ私と御者とが雷に当たることがないのでありさえすれば　ー　全く望ましいことで、しばしば昇天祭であって、このとき馬車は低いタボルの山[1]、天文台の役割を果たし、私はこの祭りを大して時間を労せずに祝うことができるのである。

一方書斎にいるときには雷雨になりそうな月日に、最も大事な時間を窓辺に絶えず走り寄ったり、雲を点検したりして過ごすのである。

まだカールゾンの荘園まで四分の一マイルのとき、強い雷雲が　ー　それは北から来ていて　ー　大地攻撃のための戦闘体制、打撃体制を整えて、空の半ばを覆っていた。地平線から上に水平の黒い海が横たわっていて、その海の中へ峨々たる雲が暑い銀の光を放って散って、空には一つの夜を背にして炎の冥府が懸かっていた。それを眺めながら私はいつのまにか珍しく素敵な一帯に来ていた。そこは無数の木の群れ、並木道、長く曲折した水面、広い通路が見通しがたい穀物畑を通って遠くの山々まで広がっていた。一杯の緑の最中に一個の岩が天から落ちてきた魔法の宮殿のようにそびえ立っていた。岩の上には葡萄の樹で編まれた東屋があるいはむしろ園亭塔が無数の窓と共にあった。野外の高みには、雷雨で暗くなっていて、塔の上に二つの黄金の星が浮かんで見えた。半ば私にそっぽを向いている側では幾つかの小庭が広い花咲く階段のように連なっていて、無邪気な喜びが詩人をその造形美術の頂へ導くかのようであった。　ーー

今や稲妻の炎が孤立した木に走った。落雷のとき梢の上に球が明るく光った。東屋の上の黄金の星が明るく燃え、ただその稲光の下で二つの金色の先端につながる避雷柱が見えた。

突然上の方から馴染みの声で私の名前が呼びかけられ告げられた、ヴェッターホルンに登ってきてください、と。　ー　直に外の登山の段を登って行くと、それぞれの庭がその段というわけで、その庭は稲光と闇の交替する中、巨大に広がっていた。そのとき一人の痩せた背の高い男が、頭をいくらか前にかがめて、眉毛をびくともさせず、稲光を受けて不思議に浮き彫りされた力強い顔つきと体格とを伴って近寄ってきた。それは昔からの友カールゾンだった。彼は兵士特有の鋭い眼差しと記憶とで私が彼を思い出すよりも先に私と分かったのであった。私の方はむしろ声を記憶に留めていた。

彼は急いで彼の所謂ヴェッターホルンを紹介してくれた。彼は鉄柱による見張りの背後で、雲々の高い巨人戦をより自由に楽しみながら見物できるようそれを整えたのであった。すでに午前中にその戦いの勃発を若干期待して、家族と一緒にヴェッターホルンに来たのであった。　ー　そもそも何故人間は、地上の崇高なものが雷雨や海や星空となって自分達に向かって来るとき、もはやそれを求めず、注視せずに、むしろ公園やオペラハウスにミニアチュアの崇高なものを建てたり、自然の偉大なものを家庭のミニアチュアの絵に写したりするのだろうか。

私は話をして雷鳴の楽しみを邪魔することのないようにした。殊にちょうど高い樅の木にいわば返しの雷鳴が轟いて、その木の上でまた球が輝いたからである。つまり騎兵大尉は戸外の木の上にウィルソン式避雷球[2]を付けさせて、この球を頂上から遠からぬ地に設置してそれで跳ねる稲光を一撃にまとめて木の方に導くようにしたのであった。すべてはますます豊かに荒々しくなっていった。無数の稲光が結実の婚礼松明や転倒した葬儀松明と共に世界の上を飛び、下の水中に鉱山安全燈や銀鉱脈として生じ、雲の上を野火として走って行った。あるときは長い森の列が、あるときは無数の山の頂が地上の城壁の巨人として稲光の飛び交う中、人間を見つめていた。素晴らしく雷鳴がぎざぎざの雲塊上の雨の闇を引き裂いて、雲の白い雪の頂と黒い火山とが先端を絡ませて覆い、天が地上に向きを変えたエトナ火山として懸かっていた。かくて静かな青空は、その青空の平和と涼しさに

対して人間はしばしば大地の地獄の中から慰めのために見上げるのであるが、炎の戦場と化した。

遂に空は和平を結んだ、それは通常の人間達の和平よりも素敵な和平であった。というのは自然の時の中で雷雨の後の最初の明るい時ほどに好もしいものはないからである、さながら和解の後の愛である。　ー　遠方の穏やかな余韻の雷鳴で、大砲の通常の結末の音を伴わずに、そして地平線の静かな雨の海には、先の稲光の三叉の戟の静かな余韻の光が見える。　ー　濡れた花々に涼しい黙した稲光が反映し、人々にその新鮮な香りの息吹がかかる　ー　高い山々に穏やかな半泣きの太陽が沈みながら覗き込んでおり、太陽は夜の気位の高い山々を残すが、しかし遠くの丘や谷には夕焼けの黄金の揺り籠の毛布を掛けていた。　ー　何と自然は人間よりも豊かに素早く償いをすることだろう。

新旧の時について喜びながら私と私の再会した友は家族のいる彼の宮殿ファルケンブルクへ向かった。家族のお蔭で自分の晩年は人生の春に変わったと途中彼は私に言った。その時草原で彼の息子アレクサンダーに出会った。彼はそれまで雷雨をヴェッターホルンではなく、広い野原を歩き回りながら楽しもうとしていた。彼の言うには、自分は何でも貯蔵瓶の中からよりも生きた自然の枝から楽しみたいということであった。それは花と咲く、健全そのものの、受容力のある頭脳の若者で、両耳の上には半ばカールした自然の巻き毛が対のメルキリウスの翼のように懸かっていた。青年の場合実際すべてに、歩行や話し方、考え方に翼があるようなものである　ー　ところで、まず生長した息子を見ると、父親の年齢が分かり、それと同時に自分の年齢も納得させられることになった。というのは昔からの馴染みは互いに年相応の類似性を有するからである。子供達は逆にその年で他人の年を示してくれる。

家族は彼のことを縮めてアレックスと呼んでいたが、すぐにカールゾンが雷雨の派手さについて若干述べると、いつでも熱く語る人々に話しの対象の北側を見せるという自分の性分、習慣を見せた。彼は　ー　ひょっとしたら父親の賛嘆のパトスをそらすために　ー　こう述べた。雷雨の下で震えると、雷雨は崇高なものに見えるかもしれないが、アルプスにいて雲上にいると、そして稲光が下に差し込むのを見、下界で雷が鳴るのを聞くと、その派手さは消えてしまう。つまり雷雨はその偉大さの一部を人間のいる位置から得ているのである、と。

「多く失うわけではない」（と私は応えた）「偉大さの隣にはより偉大なものだけを見ることになります、まず山々が連なっていて、それを前にすると広大な平野や果てしない河川さえも這っている状態に見えます。それに雲の上に空が高く太陽と共に君臨しています。勿論天上的なものに比すれば地上的なものは沈みます」。

「それでも私どもは」　ー　とアレックスは答えた　ー　「そのことを別様に考えようと思います。私はしばしば逆の、つまり縮小する天文学を考えました。いや望遠鏡を逆にすれば、覗くことさえできましょう。すべての星座や霧状斑点、その間の果てしない空間は無限大の凹面鏡によって無限に鋭く考案された目の前で東屋の天井画にまで縮むことでしょう　ー　最も大きな凹面鏡と最も鋭い視線を前提とすると縮小化はその程度に収まるでしょうから。すると上述の東屋の天井に収まって回転する天体というものは、これまでほどには感動させない、昂揚させないということになります」。

「しかしだからと言って」　ー　と私は言った　ー　「偉大なものは消えはしないでし

ょう、そうではなく二度残ることになりましょうし、更に一つの無限に一層偉大なものが残りましょう。というのはかつて[一度]我々の思念は一つの偉大な思念であったのであり、外的現実はその内的現実を否定したり、縮小化できないことでしょう。より高い精霊にする我々の拡大化は、その精霊がその拡大化に間違った仮の応用を見いだすとしても、一つの拡大化として映ずることになりましょう。第二に地上では拡大化はないのであり、単に縮小化があるにすぎません。蚤は実際はどんな拡大鏡で見るときよりも、もっと大きいのです[*1]。我々は最も強い、つまり最も近い近さというものをまだ知らないし、有しないからです。どの距離も縮小化し、惑わします。かくて小さな蚤も距離によって巨大な太陽世界同様に縮小されるのです」。

「貴方は私の耳に蚤を入れました。[そのことばかり考えることになります]。すると蚤はそこで騒ぎ、その象の大きさを見せるかもしれません。小さな巨人は実際そうできるからです。すべての崇高な雷鳴も　ー　賛嘆された雷雨に話しをもどしますと一　鼓膜での一匹の蚤の跳躍を模倣します。ここではどこに聴覚の崇高なものがありましょうか」。

「まさに」と私は答えた、「視覚の崇高なものがまだ存するところ、第一にかつて[一度]崇高に感じた精神の中にあるのであり、第二に外部世界です。外部世界ではどの物音も、我々がその都度その距離に従って聞き取るよりももっと強力に響いているのです。我々はどの音も至近距離で聞いているわけではないからです。近くの鐘から鳴る音のハリケーンは想像でありましょうか」　ー　「創造ではありません、想像となるのは、その音が単に弱々しい時刻の鐘として塔から聞こえてこない時であろう」と騎兵大尉は人間的昂揚の真実らしさが救われたことに内心喜んで答えた。「おっしゃる通りです」　ーー　と公使館参事官は私の手を握って言った　ー　「ある種の人をその方の価値に従って拝聴したり拝見したいときには、いつも間近に接するのが最善です」。

すでに村では我々を騎兵大尉夫人のヨゼーファが一方ならず豊かな晩全体のことを大いに喜んで我々を出迎えてくれた。生来と修練とによる真の椰子の姿の女性で、将来年のせいで真っ直ぐな姿勢を失うことはありえないであろう。勿論騎兵大尉はそのフランス戦役の際に、このように穏やかで愛情深い、それでいて鋭い眼差しの妻に二人の息子を安んじて任せることができた。息子というものは普通母親が育てるのは父親の場合よりも難しいのであるが。彼女が私の作品や、自分の夫に対する私の関係について漏らしたわずかな言葉にはただ品位だけが感じられ　ー　それは庶民には気位に映るもので　ー　そして庶民は冷淡さと見るような　ー　穏やかな温かさが感じられ、普通女達や世慣れた人々の間で予期されるあちこち飛ぶ話題は見られなかった。かくて摂理は、カールゾンの軽々と詩的に舞う性格に対して、夫婦生活の長期の幸せのためにはひょっとしたら余りに類似していたかもしれないジョーネの代わりに、より冷静な、もっと慎重な人物を手配した、ように見えた。そしてこの人物が別な諸力で彼の人生の天国を築き、担ったのであった。

さて全く別な人物がドアから飛び込んできた。彼の娘のナンティルデで、歩いて遅くになってヴィアナ、つまりゼリーナの許から戻ってきたのであった。彼女は私の名前を聞いたので、まさに私の首に三秒間　ー　多分私を更に十年もっと老けていると思っていたに違いなくて　ー　抱きついてこう言った。「まあ嬉しい　ー　ゼリーナに今日のうちにも知らせなくちゃ」　ー　彼女は実際今晩のうちに騎士領に行き、自分の女友達を連れて来ようとした。両家は自分達の館の間を自分の部屋の如くに行き来していたのである。しか

し伯爵夫人はこう言った、こんなに遅くでは、男爵が家に残ろうと、一緒に来られようと、かえってご迷惑をおかけすることになりましょう。代わりに明日皆で参りましょう、と。「あの娘はいつもせっかちだから」とカールゾンは言った。伯爵夫人は私に言った、「私どもの娘がどんなにあの娘の女友達を愛しているかお分かりになったことでしょう」、そしてこう述べて同時に先の抱擁に正しい説明をしたいかのように見えた。

私は周囲の愛でさわやかな気分になった。すっかり息の合った夫婦、ふざけながら愛し合っている兄妹を目にしたからで、若々しい視線で明日の出立を思い描いた。二人目の昔のカンパンの谷の知人と、高貴なジョーネの多くの人に愛されている一人娘に出会えるわけである。かくて少なくとも遠くからまた青春時代のカンパンの谷が思い出されることになる。

愛情豊かな家族圏の中からただ一人輝かしい部分が抜け出していて、虹の隙間に一片の雲がかかっていた。つまりカールゾンの次男、ヘンリオンが戦場にいた。皆がこの若者に温かい愛情を抱いているように見えた。父親は皆の心を思って、これほど不確かな戦争にあっては帰還するという確かな目標を設定するよう説いていたヘンリオンが、これらの境界石が幾つかずれた後に、とうとうペロポネソス半島の再救出では彼の将軍ノルマンが目の前にしている重要な城塞ナポリ・ディ・ロマーニア[ナフプリオ]が陥落したらすぐに戻ってくると約束している旨の古い慰めを繰り返した。「そうしたらまた戻ってくるわね」と有頂天になってナンティルデが叫んだ。「明日はジャン・パウルに彼の肖像を見て頂いて、どう思うか聞きましょう」　ー　騎兵大尉夫人が付け加えた、その絵は友人のヴィルヘルミの許に掛かっている、と。「元気でいて欲しい」とアレックスが叫んだ。「元気に戦って欲しい」とカールゾンが叫んだ。　ー　今やある種の荘厳な教会の静けさが一同を包んだ。どの人の心の中にも愛する若者が立っているように見えたが、しかし彼の傍らの敵も見えた。私はどうしてそれ自体は関連のない言葉を発したのか分からなかった。「周知の苦しみよりももっと未知の苦しみがあります。人々は側に寝てそれぞれの夢を見ます。しかし一方が重い夢を見ているとき、片方はそれに気づきません。そうでなければ起こすところでしょう」。陽気なナンティルデがその後全く静かになった。　ー　後になってようやく私はその理由のすべてを知った。

公使館参事官はやがて真面目な考察を陽気な考察に転換させた。「まことに」と彼は始めた、「正直な若者で、何か有益なこと、少なくとも自由のために血や生命が賭けられる立派な理性的戦争を望んでいる若者ならば、我らの世紀ほどに当を得た時代はないことでしょう。この世紀は私よりはるかに若いわけではなく、二十二歳[1822]ですが、それでもすでにかなりの最良の自由のための戦争[(4)]を行ってきました。スペインで二回　ー　そのうちの一つはまだ続いています、ドイツで何回か、フランスで二，三回、イタリアで一回、新世界では無数です。今日高邁な人間にとってはどの自由のために戦ったらいいかの選択が残されています。アメリカの自由のためか、スペインの自由のためか、ギリシアの自由のためかです。一方昔の時代には単にルイ王とかの惨めな継承戦争のためにのみ戦って、他の者達は人民と共に血を流すだけだったのです」。

「外交団にとって」と私は口を挟んだ、「真の称賛です。外交団は本来いつもすべての軍団の最初の会戦であり、戦争の父親ではなくても、助産師、あるいは少なくとも予言的な天気予報人形です」。　ー　若干の熱を込めて彼は自分の身分に敵対することを述べた。

この身分を自分は直に放棄するつもりであり、公使が代弁して働く大きな宮廷の利害は明敏な者には気にいらないし、従属する宮廷の利害は自分には更に一層上手くいきそうにないからというものであった。　ー　私は彼の地位を、それはヒルトブルクハウゼン[5]の公使館参事官として私の身分でもあったので、全力で擁護し、私は肩書上の、あるいは見せかけの公使館参事官であったので、そそくさと挙げられる限りの見せかけの理由でこの職を弁護した。　ー　「多分」とアレックスは答えた、「貴方は幸せです。貴方はその参事官職で一つの国の害にもなっていないのですから。しかし経済に話題を変えましょう。私は経済学で若干の寄与ができます。どの国にも今金がありません　ー　ただ金だけが、モンテスキュー[6]が述べたように名誉ではなく、金だけが君主制の原理です。　ー　しかし現状は、化学者が毎年新たな金属を発見するにつれ、国家にとって古い金属は一層惨めなものになっていくかのようです。神学者にとって将来の設計のために、墓地はその手仕事の黄金の土壌です、あるいは希望のパンドラの箱です　ー　医師にとってはいずれにせよ黄金の土壌です、患者の命脈が尽きれば医師の回診料が支払われるのですから　ー　将校にとっても同様です、自分の同僚が埋葬されるのであれ、自分のせいで敵が埋葬されるのであれ、自分は出世するのですから　ー　しかしまさに最も多い人間のクラス、百姓にとっては、今ただ氷の田畑を耕しており、土地、土壌は血の畑です。…　忌々しいことです。しかし私は少なくとも国会に一つの提案をすることで始めたいと思っています、つまり私は忌々しい半クロイツァーや三ペニヒ、一ヘラーといったものを、これらは分厚い徴税表によって計算者や書記の嘆きの種となって絶えずころがり込んでいる金ですが、税負担者の軽減のためにまさに削除することにしたいのです。殊にそれらは融合されても大きな額から結局労苦やインクに値するものは何も生み出さないからです　ー　申しますように私は削除し、税負担者に免除し、これらのクロイツァー、ペニヒ、ヘラー貨幣を、これらを表にしているすべての俸給生活者から差し引き、徴税することにして、かくてこの両操作によって遂には数年後、貧しい虐げられた百姓達のための貯蓄金庫について話題が出るようにしたいのです」。

このように友好的に明るく皆にとってその晩は更にもっと豊かな翌朝のさきがけとして過ぎていった。

*1　この文のより長い証明が見いだされるのは・・・・[3]である。

章題の惑星、水星についての伸展詩

この天体は、明るく輝き、軽やかに飛びながら、惑星の順位を太陽の間近で始めている。このことを最初の章も真似ることにする。しかしそれが彗星のようで気に入らないのであれば、冒頭のメルクリウスは神々の使者と名付けられるといい。カンパンの楽園で神々であった者達について最新の知らせをもたらしているのだから、いやそれどころか、それはかの翼のあるメルクリウス同様にこの世から一人の魂、ジョーネを導いている。

Ⅱ

ヴィーナスあるいは明けの明星、宵の明星

面積

ヴィアナへの道程　ー　ヘンリオンの肖像　ー　ゼリーナの愛と生活　ー　宇宙の輝き　ー　最新の情報

第一の細分割

ヴィアナへの道　ー　ゼリーナの出現　ー　ヴィルヘルミとの再会　ー　ゼリーナの生活と愛

朝は何と澄んで雲一つなかったことか　ー　どの人の心もそうであった。ナンティルデはどの部屋でも言葉と表情に拍車をかけて素早く出発するよう急き立てていた。それももっともなことで、彼女はすでに前日に私が到着すること、一行が到着することをゼリーナに前もって知らせていたのであった。丘でナンティルデはすでにその女友達が畑の穂先の中を急ぎ、自分に向かって飛んでくるのを目にした。彼女が私の前にその大きな透明な、いわば神々しい目をして、　ー　母親のジョーネのように青色の、青空の下一層明るい服を着て輝くように高貴な様で、ただ母親よりも若干高く、純粋な美の輝きで若者に適切にかつ距離を置いて接して、　それでより高貴な若者も敢えてうるさく愛することはしない風であり　ー　両頬は花のように白く、ただ急いで来たためにそこにはほのかに花の赤みが引かれていて、そんな風に立っているのを見たとき、私は奇妙な感動を覚えた。

さて彼女が私の手を握ってこう言ったとき、「Ｊ．Ｐ．さん、私どもは皆今日のことを喜んでいます」、そして全く母親と同じ声の調子を私が耳にしたとき、暗く花咲く昔が古い島のように深みから上がってくるように思われ、それでいて更に何か深く沈んでいたものを思い出さなければならないかのような気がした。しかしそれを思い出したのは後にナンティルデがこう語ったからで、つまりゼリーナは母親好みの色、青色を、その限りでは母親のすべての服をいつもひいきにして、身に着けている、というもので、そこで私は了解したのだった。ジョーネはカンパンの谷での日中の旅のときには青い服を着ていた。

我々皆が何と幸せな気持ちで逍遙したことか。ヴィアナの館[宮殿]はその葉形装飾のバルコニーと共にすでに目の前に開かれた村の中にむき出しになっていて、騎士の館というよりは東屋で、白というよりは緑であった。至る所に小川や小道、並木が色とりどりの村々に走っていて、遠くには教会の塔や五月柱が見えた　ー　ヴィアナの小暗い頂の背後では移りゆく白い帆が動いていて、遠くの山々が明るく濃い藍色の中に並んでいた。　ー

風の吹く空がその青色の海で我々に押し寄せてきて、その波が我々を運び、持ち上げるように思われた。我々はしばしば互いに黙して、至福の思いで見つめ合った。…　突然私の昔からの友ヴィルヘルミが抱きついてきた、好意と平静さに同時に満ちていた。

長い年月の後、遅れて再会することになっても観相学的に有利なのは単に倫理的に成長する人間にとってのみである。少女の花と咲く顔には単に隠顕インクで欠点がさりげなく記されていて、これが後に情熱や年月の温かさで黄色く、黒く浮き上がってくることになる。男性の顔に若い緑の果実として刻まれている小さな真珠文字は後年育ったカボチャのように多くの者にとって最も大きな亀の甲文字として、不格好な刀傷として現れる。緊張

した不毛を通じて晩年女性の顔は容色を失い、垂れ下がる充実を通じて男性の顔は容色を失う。

ヴィルヘルミの豊かな顔は青春の時の美しい風貌を一つも失っていなかった、ー　彼はちょうどバルコニーでの朝食から我々の許に急いで来たばかりで　ー　美味しい食事を晩年にも善き人々同様に愛好していた。好意と自足が彼の目から見てとれた。彼は自分の村ばかりでなく、騎兵大尉の村のすべての経済的風景的改善を引き受けていて　ー　我がカールゾンは本を覗いていたらよく、拙者が仕上げたときに、せいぜいその造林や庭園に出かけたらいいと彼は言っていた。　ー　そしてカールゾンはファルケンブルクでさえ彼に改善、美化を任せていた。多くの国家では幾つかの村々がたった一日の間に、万霊節のように済ませてしまわなければならない教会堂開基祭について、彼はその間隔を空けて余裕を保つようにした。そして結局五月柱に更に夏柱、秋柱、冬柱を継ぎ足した。

ゼリーナは自分の深奥の魂で味わい覆っているよりも、別種のより雄弁な、より刹那的な至福を絶えず演技することによって、他人を喜ばせようという彼の気持ちに甘美に取り入った。　ー　私は以前彼女のことをジョーネのように真面目な女性と考えていた、それから後にナンティルデと調和していてその逆であると考えたが、最後に父親と和していると思った。彼女は彼と二人っきりで食卓にいるとき、食欲旺盛な様を見せて彼の気にいった。彼女は彼の食事の用意をするばかりでなく、味わいもしなければならなかったからである。

しかし彼女は周りの人々にどんなに愛されていたことか。カールゾンは二人目の温かい父親として彼女の目を覗いた、彼はしょっちゅうただ聞いてもらうために、学問のすべての偉大なこと、神々しいことについて聞いてもらうために、自分の館に何度来てもらっても十分ではなかった。決然としていて、どの言葉も意識的なヨゼーファも彼女のことを自分の娘ゼリーナとだけ呼んでいた。大胆なアレックスさえも彼女の前では朝方、飛躍した議論を行う基の論理的な箍をしまって､いくらかより落ち着いて仕事に取りかかっていた。彼女が現れると彼に赤みが差して、あたかも昇る陽が次の雲を照らす按配であったので、私は彼が彼女を愛していると推量した。しかし沈む陽も雲を赤くするのであり、私の洞察は次の部屋で反駁された。そこは男爵が私を案内するようにと命じたゼリーナの部屋で、私は皆に望まれていたヘンリオンの絵を目にすることになった。絵の色彩は愛のこのささやかな温かい世界の上に遠くの触れられない虹のように懸かっていた。

私の目は部屋の中でまず裁縫台を覆っていたギリシアの広い地図を見た後、壁の立派な若者に留まった。「高貴で、大胆な、そして高邁な父親にふさわしい息子というものはこのような外見に違いない」と誰もがこの絵を見ると思った。青い、しかし反抗的な、いや稲妻のような騎士の目　ー　いや稲光は黒い雲の中からばかりでなく、時には明るい青空からも発せられるように　ー　しばしば古代ドイツの森では青い目からローマ人に発せられた稲光であり　ー　アーチ状の詩人の額、前にせり出した鷲鼻、そしてこうした一切の戦闘体制の人生の真剣さにもかかわらず､柔らかで華奢な青春の花に満ちた顔をしており、こぼれる愛に満ちた豊饒な口をしている。　ー　全体にその兄の丸い、動きやすい頭よりは、その父親の頭の方に似ている。この厳格な男らしさを忠実に再現し、描き出したのは誰かと私が尋ねたとき、しばらく沈黙してから小声でゼリーナが答えた。「私の父の希望で私が描きました」。しかしどのようにして何の追従も加工もしないで女性の手がこのよ

うに力強く真剣な顔を模写できるものか、このことは後にようやくゼリーナの本性を知って私は理解できた。彼女は美も善と同様に扱っていて、美の場合も善の場合と同様にどのような見せかけも、歓心も蔑んでいた。それはちょうど父親に対してさえ唯一の喜捨を拒まざるを得なかったようなもので、つまり歌うときの流行の顫音の飾りという習慣的な雷銀、金箔のことで、その胸の声あるいは心の声があれば魂を強力に憂愁と憧憬へと沈めてしまうであろうものである。彼女は弱く、純粋に、誠実に、飾り気なく歌った、そして人々はほめることをせずに泣いた。　ー

私はどんなに彼女の生活と愛情の話に憧れたことか。　ー　幸いナンティルデも同様に強く私にその話をしようと憧れた　ー　それでその日の午前中にもその話を得た。彼女は一行に、自分は館で最も若い、最も素早い者として　ー　というのは病人や客人に熱心に料理するゼリーナはすでに父親のために台所用エプロンを女性用フリーメーソン用前掛けとしていて、それは雄弁同志の沈黙の印よりももっと蜜の多い薔薇で蔽われていたけれども　ー　私と一緒に両騎士領と騎士公園の魅力的施設、付属品をすべてざっと見て回り、善良なハンス・パウルに百姓達のすべての可愛い片隅、若者どもを見せて、そしてまた時間通りに食事に戻ってくるつもりであると宣言したのであった。

しかしまことに、台所で献身的に働いている珍しいこの女性についての話を聞いていると、小さな庭園で一杯の、小森や村々で一杯の広い庭園についてとか、絵画的美に満ちた一杯のクリスマスの食卓全体についてとかは、ほとんど気づかないのであった。ジョーネはゼリーナがちょうど十五歳のときに亡くなった、そのとき乙女の心全体は夢であって、外界は単に夢の錫箔にすぎないのであった。思慮深く、蔽われて自らの心の中に暮らしながら、彼女は母親と一緒にほとんどただ騎兵大尉とその哲学的談話のみを求めていて、父親の陽気な軽い談話よりもひいきにしていた。ジョーネが身罷ったときの最後の地上の時を知っているのはゼリーナ一人だけであった。別離、最後の声と視線、重たい地上の空気の最後の吐息は娘の秘密に留まった。

しかし母親と共に娘は、地上的な具合においてではあったが、神々しいものとなった。人々がラファエロの棺の横に最後の作品、変容[1]を置いたように、彼女を生んだ人の亡骸の横でゼリーナは輝かしく立つことになった。彼女は、いつもはヴェールに覆われて、黙しがちであったが、突然陽気になり、活発に、打ち解けた者になり、ナンティルデに対してさえも普段よりそう振る舞うようになった。彼女の夢想はただ行動となった、そして彼女の父親の台所から始めて、毎日苦しんでいる者達の病室を通り、貧者の仕事部屋を通って行き、自分の裁縫台でも他人のために労することを許されない侯爵令嬢達と比べて幸せであると思った。しかし彼女の強い空想や力、まことに多くの素早い幸福の贈り物の欲求、要するにまさに彼女の性格がいつでも美しいけれども、しかし消耗性の性急さを付与することになって、彼女にとっては誰もがのんびりすぎると思われ、自分すらもそう思われた。熱い努力は激しい実行よりも諸力を奪うものである、努力は精神的に絶え間なく働き続けるからである。気高いこの乙女はそれ故こう嫌疑を受けた、つまり彼女は瀕死の母から彼岸の女性達の許にまもなく後を追って飛翔することになるという希望を受けて、それ故身罷る者のように、臨終の者のように、後に残る者達へ絶えず贈り物を分け与えているのではないか、と。これに対する最良の反駁は彼女が毎年毎年咲き続け、犠牲をし続けることであった。しかしこの嫌疑は一つの真理に接していた。臨終の母親は彼女にこう約束して

いたのであった、自分は時に彼女の夢の中に現れる、彼女が自分の生活に本当に満足している時にはいつでも現れる、と。　ー　ジョーネは本当にしょっちゅう現れた。　ーーそれ故この乙女はとても喜んで活動的に暮らしていて、両腕を善き心のために開けて、手を困窮した心に開けた。

炎のような、稲妻のような公使館参事官のアレクサンダーは公使職から帰還したとき、自分の父親の部屋に全く新しい魔法の女性のような彼女を見いだした　ー　以前の真面目な女性はその恒星の軌道を彼の衛星の軌道からは遠く高く離れた所で描いていた　ー　そして変貌したゼリーナ一人が女達に対する昔からのこの不信者を純な愛という至福の教会へ連れ戻した。しかし彼はこの魔法の女性の前で自分の宗旨変更の告白を公然としたことはなかった。　ー　というのは他の使節とは違って、ひじ鉄をくらう恐れがあったからで、女性のひじ鉄は彼の名誉心にとって沈黙の口輪となっていたからである、男性のひじ鉄は攻撃への堡籃となるのであるが。彼の視線、女性への視線は彼女の許では騎兵大尉の息子の単なる最も熱い　ー　女友達を見いだしていたにすぎなかった。そして彼女の乙女らしい本性の全体が彼にとってはとても高く、純粋に輝いて留まっていたので、彼はあるとき母親のヨゼーファに向かって言った、「ある種の乙女達には皇女達に踊りを申し込めないように愛を呈示できないものです、彼女達は自ら要求しなければなりません」。　ー　一方彼はゼリーナには永遠の愛を保っていた、これは聞き入れられなかった愛というよりは聞こえなかった愛であった。

さて学びの学校、高等学校から至高の学校、行為の学校への途次、アレクサンダーの弟ヘンリオンが父の家へ帰ってきた。誰もがその完成された開花に驚き　ー　父親自身よりも更に背高く、気位高く育ち　ー　英雄的情熱に満ち　ー　健康と力、勇気、戦闘者の怒りで燃え上がり　ー　飾りの小枝のない簡素な高い椰子であるが、防御の棘は一杯あり、頂には椰子酒と果実とがあり、本人にとっては館[宮殿]のような温室は狭すぎて、ただ[古代フランク人の]三月議会と戦場、あるいは一つの山のみが十分に広かった。

ゼリーナは精神的養父にとても良く似たこの若者に対しては恭順に至るまでの尊敬の念を抱いていた。この若者はかつてジョーネの胸元や口元でゼリーナを見かけたのであるが、この若者にとってゼリーナは身罷った精霊が自らに捧げた聖なるもの、ただ敬虔な手のみが触れることのできる聖なるものであった。かくて二人は互いにほとんど信頼し合って暮らした。互いに高貴な意図を知らせるとき、ただ高貴な心を開示するのみで、差し出すことはなかった。ナンティルデは両者を近づけようとしたが、これはしばしばすでに一緒の者にとって、遠ざけることを意味した。そして世故に長けたアレクサンダーはすでに彼らの心の交換を前提にしていて、妹に向かって言った。両者は互いに相手の両親を崇拝している、と。

ヘンリオンがギリシアに旅立つ前にゼリーナの父親は彼の絵を所望した。しかしこの若者はモデルとして画家の前に座ろうとしなかった。それに近くに画家もいなかった。しかし女性画家ならいた、ゼリーナである。娘はおずおずとやっと父親の願いを受け入れた。ヘンリオンは彼女の娘らしい服従に従った。ただ彼は正面の顔の代わりに横顔だけを描くよう申し入れた。それは多くの若者には思いがけない理由からであった。描く女性は見つめていいが、しかし描かれる対象は暇にまかせて絶えず見ていてはならないだろう、ゼリーナのような女性に対しては会話という目的もないのに見つめて楽しんでいたら大胆すぎ

る、というものであった。ひょっとしたら片方の目をこのように半ば隠すことで本人が不在のように思えて、そこで描く女性には描く際のより大きな自由とより温かな空想が恵まれたのかもしれない。

しかしいずれにせよ二人の若い心にとって描くこととモデルとして座ることは常に危険なことであって、絵筆は一つのアモールの矢に変わるものである。心が一杯になったゼリーナは若者の側にあって若者の中を透明な深い海の中を眺め込むように長く覗くことになって、遂には飛び込みたくなる按配であった。そしてヘンリオンは、彼の前には彼を見つめ続ける、間近でいて離れた人物が、彼に対する愛と犠牲の心で一杯になりながらただ精神として留まっていたのであるが、日中に心が崇拝したくなるような目に見えない星々の青空を側に有することになった。　ー　ゼリーナが自分の父親に完成した絵を渡した日の朝、ヘンリオンのギリシアへの旅立ちの直前に、両者はただ蝶々や雲雀に伴われて、田舎では珍しい礼節三昧の警察条例は無視して　ー　ただ二人っきりで一緒に声高な田畑を通って、最後には暑さのせいで静かな小森を散策した。突然ある小森にいるとき一層暗くなってきたが、小枝の上の青空は暗くないままであった。急に東の方で黒い、炎を吐く不気味な雷雨が目覚めて、昼間の敷居の所で、静かな青ざめた太陽を尻目に荒々しい炎を吐き出した。二人にとって嬉しいことにヴェッターホルンはその小森から遠からぬ地にあった。ヘンリオンはうっとりとした目で炎のような朝の嵐、燃え上がる雲々の戦いを見つめた。雲々の炎の間では太陽が指揮官として前方に輝いていた。「向こうの東に」と彼は感動して叫んだ、「ギリシア人の武器の稲光が見え、圧制者に対するギリシア人の大砲の雷が鳴り響き、落下するのが聞こえる」。　ー　一つの嵐が広大な黒々した雷雨の軍勢から一つの長い雲を間近に押し出して、それが絶えず放電と充電を繰り返しながら、避雷柱の稲妻を誘う球の上に止まった。「もはや自由のために戦うことができなくなるほど、自由のためにいつか死ぬことが出来さえすればいい。ゼリーナよ、死が白い閃光の死の天使として天からやって来るならば、何と死は美しいことだろう」。そのとき炎の蛇が二回跳ねて星雲から間近の黄金の球に飛び込んで、天が流れ込み、すべての雷雲が存分に雷鳴を残した。　ー　「まあヘンリオン」とゼリーナはびっくりして叫んだ　。彼が振り向くと、彼女の顔は涙に覆われて、全く青ざめていた。「ゼリーナよ、私を愛しているから泣いているのかい」と彼は言った、彼女はゆっくりとそうだと言うかのように頭を傾けた。悲哀と羞恥が同時に混ざっていて、涙を拭きながら顔を隠した。「神々しい方だ」と彼は叫んだ、「私を受け入れてくれるのかい。だったら私は死のうと生きようと君の許に留まろう、倒れようとも、また生還しようとも」。　ー　「喜んで自分の道を進んでください」と彼女は答えた、「ヘンリオン様、神様は私ども二人を見守ってくださるでしょう」。　ー　太陽が現れ、雷雲は雨となりながら西の方へ去り、虹が山脈の麓にかかった。　ー　「御覧、ギリシアへの門が開いた」とヘンリオンは言った、というのはギリシアへの彼の西への道はフランスを経由していたからである。

かくて両者の契りが互いに結ばれた。私がナンティルデと一緒に天上的花々や果実で一杯の庭園から戻ってきたとき、何と違った思いでゼリーナを見つめたことか。彼女の聖なる楽園を今や開けられた心の中に覗くことができたのであった。　ー　ナンティルデが、何も秘密にしておくことのできない、一つの秘密を秘密のままにしておくことのできない彼女が、このようなカップルの両父親にまさしく、自分は途中ですべてを語ったと述べた

とき、私は両父親に祝意の握手をしないではおれなかった。　ー　「それでは貴方にもゼリーナに」とヴィルヘルミは言った、「ヘンリオンの最近の立派な手紙を読んでもらいましょう。現存在についての彼の明快な見解にはいつも心から感銘を受けます」。　ー　「私には」と騎兵大尉は言った、「不死についての彼の信仰と証明が最も好ましく思えます。私のアレクサンダーも改宗できればいいのですが」。

その後すぐにゼリーナは手にその手紙を持ってやってきた。彼女の顔には、その手紙を読むという同意よりはむしろ、良き人がもっと彼女の友人の心を知ることになるであろうという喜びが浮かんでいた。私は手紙を持って戸外のバルコニーに出た。ゼリーナは私に従い、私の椅子の背後に立った。彼女が言うには今一度私と一緒にゆっくりと、しかし静かにその手紙を再読するためであった。

第二の細分割
宇宙の輝き　ー　ロイドのコーヒー店[1]

ここにその手紙をそのまま写す。

「間もなく、ゼリーナよ、城塞を手にし、私は君達の許に、君達は私の許にいることになる。そう約束したのだから。ここでは私は歓喜と行為を棄てている。しかし愛しい人、貴女の許でそれらをまた見いだすことだろう。やさしい人、貴女は死や不死についてどんなにしばしば考えても、それは構わない。しかし瀕死の者達のいる陣営でほど死について考えることがまれな所はない。人間はここでは炎であるが、しかし灰ではない。走路のたなびく軍旗は目にするが、走路を邪魔する溝や墓は目にしない。痙攣する死は、自らの死でさえも、単に敵に対する最後の動きとしか思わない。ただ正義と強さのみが感情を膨らませて、室内での不安が感情を抑えつけることはない。理念と行為の最中にいるとき、この二つの戦争のときほど間近に接していることはないが、外的な現存在は容易に犠牲にできるものである。ただ一人のギリシア人の子供、あるいは震える老人が、君の手に救いを求めていさえすれば、君は獅子となって野蛮人の軍勢に向かっていくものである。そして火薬の輝きが人生の閃光のように見えるものである。まことに無垢の者達を瞬時に決定的に守ってやることは、神々しい国を前もって味わうようなもので、そこでは無垢の者は復讐者を隣に有し、どの力も次の味方の力を有するのである。

ゼリーナよ、戦場と戦争の谷の濃い霧が私の哲学する純な明かりを、つまりちょうど静かに私の胸の中で燃えていて、戦争のすべてを崩す夜の猛鳥でも消せず、ただ煽るだけの純な明かりを暗くするのではないかと案ずるには及ばない。私は殺害のこの雷鳴を通じて、聾の音楽家が音楽を聞くように　ー　人生についての貴女と私の父親との話を耳にしており、人生について詩人達がギリシア人のミューズの山の上で歌っているのを聞いている。私にとって本来人生のすべてのものが、星々の天体から世界の海に至るまで崇高なものである。そして小さく見えるもの、かなたの小雲とか、下の波のようなものは、偉大なものに囲まれていたり、あるいは単にある偉大なものの突出した一部分であったりする。砂粒が砂漠を形成し、珊瑚の虫が船舶の薪の山を形成し、島々を空中に押し上げる。アルプスの雪片は谷では雷鳴となり、その白い雷雲は森林や村々を砕く。私にはどの四季も崇高で

ある。飾り気のない青と白を伴う冬でさえ、五月の太陽の前で花咲ながら飛ぶように起き上がる眠れる広大な覆われた世界と共に崇高である。　ー　かくて歴史は、罪ある歴史でさえ、その諸時代の柱廊を移って行き、古代の諸帝国の巨人達は半ば沈んだ星座として地平線上にあり、偉大な立法者達、民衆軍の指導者達、時代の侯爵達が、モーゼのような人、名もない高貴者、リュクルゴスのような人、ソロンのような人が彼らの法律という磁針を持って重い国家の船舶を時代の奔流の上手に有無を言わせず動かして行く。しかしここで私は偉大なものを、連合した、しかし卑小な個々人の多さの中に見ず、また立法者の精神的力、勿論その長い梃子でその世界を容易に動かすその力にも見ない。私は偉大なものを、数百万の諸精神を一つの絆へと計算して結び合わせる力の中に見る。

このきらびやかな一切は、それを思うすべての精神の中で二度目に創造されたものであり、諸精神世界の鏡の部屋で天や諸世界は無数に反復される。それでいてダランベールは恩知らずの言葉を発し得た。存在の不幸、と。

しかし私は存在する幸運を祝福する、それ以上に、存在し続ける幸運を祝す。ゼリーナよ、私にとって何と日々、人生はさながら一層生き生きとしたものになることだろう。生命の存続への信仰は戦場のはるか下に根を張っている。　ー　どこに消滅があるか示すがいい。どの足音もどの視線も生命と発生を示している。途中で力が死ぬことはない。力の静止は単に力の抵抗の存続にすぎない。生命のないものさえ殺されることはなく、ただポリープのように分断によって倍増する。ダイヤモンドは凹面鏡の下で千ものより小さなものに変じて飛散する。

何と大地はそのすべての没落、墓場にもかかわらず、かくも生き生きとしていることか。誰もこう嘆いて欲しくない、つまり喜びを伴う生命は水面に間近のすぐに燃え上がる花火にすぎず、思い出という同様に須臾の反映を伴っているにすぎないとか、何と多くの支柱や彫像、建物が足場の造作のために使われていることか、と。しかしそのための火薬は十分にあり、唯一の生きた火花があれば火災の世界を引き起こす。自然は没落に吝嗇であることがあろうか、景気よく上昇や創造を行っているというのに、ただ人間の手の中でのみ照明弾は小さな照明弾に砕け散る、しかし逆に自然の中では小世界は諸世界に、小さなものは大きなものに変じ、エトナ火山は山々を噴き出して一層高くなる。

星空の天は、圧倒的に迫ってきて、私の心を昂揚させる、天はかくも真剣に不気味に見下ろしている。我々の頭上の数百万の恒星[2]の中の数千の恒星を必要なだけ地球に近付けて、その輝く面で我らの青空全体を覆うがいい、そして見上げて、それから自分の中、自分の祈る心を覗くがいい。しかしこの数は例の数に比べれば何ほどのものであろう、つまりヘルシェルのような天文学者が単に我々の天の、即ち半分の天の星々を数えるために要する五百年のことである。　ー　ここでは天は単にその最大の縮小鏡、距離でもって一千三百四十二等級の、あるいは本来小級の星々が数えられているのであり、ある小級の蟻、つまり人間は諸恒星にもはや名を付けることはできず、単に蟻文字を付けるだけである。

ー　そして人間は諸恒星の途方もない青い国々、帝国の間にただ蜘蛛の糸からなる短い境界線を引くだけである[*1]。測りがたいものは以上のようなものである。しかしながらこれらを越えて、すべてを自らの中で測る人間の精神にとって多すぎるものではない。

しかし天は単に宇宙の測りがたさを覆っており、地球は逆に宇宙の生命の無尽蔵さを明らかにする。諸惑星球の雨粒の下には小水球や小水滴があって、生き生きとうごめいてい

る。極微の海は生命の水であって、死せる海ではない。かくて死んだ動物の筋は単に二,三滴の水がありさえすれば、そこに比較的大きかったり小さかったりする諸小動物の諍う群れが再生すると了解するとき　一　いや乾いた干し草の小茎が単なる樹皮、単なる木炭が水の中では動き回り、生み続ける動物に溶けることを目撃し、結局単なる雨粒の中だけで五種類もの動物の世界が生まれるのであれば[*2]、我々の周りの地上を覆っている生命の無数の泉の氾濫の最中でどこに生命の干上がりを考えることができるかお尋ねしたい。至る所で生命のこの衝動が働いているのを目にしていて、どの葉もゲーテ(4)によれば、その葉を仲間が押さえていなければ[*3]、一本の木に伸びて行くであろうというのであれば　一　そして炎から諸惑星に至るまで、死んだもののできないこと、つまり動くことをしているのであれば、私は生命、広大な幅広い絶えざる生命を喜びとしたいし、そのことによって私の生命も喜びとしたい。そしてすべての小さな滴虫類が冷たい痩せた薄い水滴の中でその体と生命を築き得ることができるのであれば、強力な成熟した精神にとって、諸力の豊かさの中で彼岸への飛行体への新たな翼を身に付けることは将来何千倍も容易となるのではないかと尋ねたい。

まことに自然は人間より全く別様に、もっと実りをもたらすように覆うもので、墓は新生児の洗礼堂で[*4]、死者達は多数の生命の神殿で覆うものである。そうであればどうして生きた人間精神が、温かく輝く海の中を泳ぎながら、冷えて消えてしまうことを案じることがあろう、その精神の周りでは存在を喜びながら蚊の世界が日向ぼっこしているというのに。　一　我々の周りの無数の生命を通じて初めて、私にとって星々は何か意味を持つものになり、頭上の諸恒星の途方もない山々の連なりは緑に茂り始める。そして天の見通せないはるか彼方に建てられた町へ住民達が移って行く。

大切なゼリーナよ。世界考察のこのような精霊の時に、私は最も温かい気持ちで貴女の側にいたいと願う、貴女の理解力に私は感動し、自分は正しいと思えるのだから。御覧、それ故私は貴女に周りの情報の代わりにむしろ自分の内面の平和な便りを送っているのだ。貴女の魂の中にはまたただ一つの魂が入って欲しく、体の荷は入って欲しくない。しかしいずれにせよ、今や間もなく偉大な時が告げられるのである、その時には最も高い城塞[*5]が敵の稲光の避雷柱として我々の手に移るのであり、その時の後では私はドイツで愛しいギリシアのことを喜んでいいのである。そうなったら私はより容易に祖国の平和に耐えられよう、私の方に避雷柱はその先端と球と共に輝いてくれるであろうし、人間精神の古代の豊かな楽園の上にかかるのを目にしていた粗い霰雲がその避雷柱のもとでは避けてしまうに違いないのである。私の父には私が帰還した際にギリシア戦役の偉大な過去について実際若干の気位高いレッスンの時を持って頂こう。父上は私の話を聞けば、時にあたかも自身が数年前に武器を持って自由の女神の横に、女神に敵あるいは自らを犠牲に捧げるために、敵の大地に立っていた時が蘇るかのように思われることだろう。

これからは何とはるかに落ち着いて古代ギリシア人達がその作品の中で教えて歌うのを耳にすることになるだろう。古代ギリシア人の孫達が拷問を受けているのにそれを怠惰に眺めていることに対する熱い痛みがもはや私の中で刺して脈打つことはなくなるであろうから。そもそも若者の心の中では学ぶことと行動すること、学問に没頭することと明るい人生へ身を投ずることの二重の願望と諸力の間で消耗戦が生ずるものである。　一　勿論私の兄は、学ぶことは行動することでもあると言うだろう。しかし行動だって学ぶことで

もある。その両者とも全面的に熱く、すべての炎のような犠牲と共になされなければならない。私は父に対して、父が私を自分の似姿へと教育しようとして、全く学問のために、殊に詩文のために生きるようにさせて、貴族や兵士としての立身という狭小貪欲な厳命に固執していないことを感謝している。　ー　しかしゼリーナよ、私もまた勇敢に努力して、パルナッソスの最も重要な壁をも城塞のようによじ登るよう試みてみよう。というのは私は、殊に貴女のような華奢な月にとって、余りに血の気の多い頬を戦場から有していて、学問によって幾らか青ざめる必要があるからである。私のミューズ女神達の一人である貴女にとって、私はなお何ほどのものになろうか。言って欲しい。ゼリーナよ、私どもが城塞の中に攻め入って、周りの大切な兵士仲間が素晴らしい歓呼に心を合わせて叫ぶとき、何と心溢れて私はギリシアの守護の町の女墻[胸壁]の上に立って、港の先の、貴女のいう岸辺に打ち寄せる果てしない海を眺めながら、こう自分に言うことだろうか。いや向こうに、あそこに汝の天が、汝の将来の人生が、精神が住んでいる、その精神を前に汝の精神はもっと高みを目指して、成長することだろう。そしてその精神は汝が受けた傷よりももっと大きな報酬を与えるであろうもので、汝を気位の高い港から案内するのは平板なカロンの小舟ではなく、高い勝利の軍船なのだ、と。愛しい人よ、このように神の意志の行われんことを。

ヘンリオン」

このように私の友人の息子、私の女友達の想い人、ゼリーナのことを私の女友達と呼んでいいのであれば、その想い人はこう話した。ゼリーナのような人、犠牲心に満ちて、すべての善人、すべての善きことに対して愛情一杯である人が、別の人に対して、いつまでも愛され幸せでいられるように今や心を全く開いているとき、いかほどばかりその青年の内面の美しさに私は感銘を受けざるを得なかったことか。静かなこの女性は神に対するようにこの若者に心を捧げ委ねていたのであって、この若者は一人でこのような乙女の報酬と花冠を両手に有していたのであった。　ー　私は彼女にただこう言った。「彼はあなたにふさわしい」。

昼食のときヴィルヘルミの表情にある喜びの色が浮かんでいたが、それは過去のことに由来するというよりは将来のことに由来しているように見えた。しかし騎兵大尉は私に対して主にヘンリオンの不死に対する信仰のことを喜んでいて、特に彼が滴虫類を　ー　これはいつもは物質主義者にとって我々の希望の棺の虫、船食い虫なのであるが　ー　生命を共に担うもの、あるいは浄福の島の高く築く珊瑚虫に応用していることを喜んでいた。ただ公使館参事官のアレクサンダーだけはこう言った。自分は一般的生命からの幾多の結論について若干の見解を数時間分保留しておく、と。彼は本来ゼリーナのいるところでは、ゼリーナに対していつでも他の誰よりも優しく対処しているように見えて、鋭く彼女の想い人のことを論駁したくなかったのである。

ようやくヴィルヘルミの予言的陽気さの原因が明らかになった。彼がこう言ったからである。「夕方はロイドのコーヒー店で過ごすことにしよう」。この言葉ですべての人々の目が神々しくなった。ナンティルデは目をきらきらさせて、私に説明した。男爵は近くの高台の大好きな東屋のことをこう呼んでいて、この東屋でいつも自分の楽しい郵便物や手紙の内容を知らせるのだが、ただ残念ながら手紙のことを熱く期待しながら、何マイルも

歩かなければならない、と。　ー　コーヒー店でようやく　ー　ナンティルデはふざけて最後に遅れてやって来た　ー　男爵はマルセイユにいる昔からの文通相手、ギリシア史の速達記述者の手紙からの知らせを語った。つまりナポリ・ディ・ロマーニアの城塞は五月三十日ギリシア人に降伏[5]することになった。そして共通の友ヘンリオンはすでに帰還のためにこの文通相手の近くの宿舎にほんのしばらくの予約を入れて貰ったというものであった。「帰ってくるのよ、帰ってくるのよ」と彼の妹が叫んだ。ゼリーナはゆっくりと両手を組み合わせた。静かな両目には濡れてほのかに光るものがあったが、それは涙になることはなかった。

東屋は楽しい展望のために素敵な位置にあって、そこから多くの窓から至る所に小道や街道が、さながら世界中の路地のように見えた。殊に騎兵大尉は人間の営みの集合する運河や橋のこのような中心点を愛好していて、これらの上では別世界のどの目も自分の希望や期待を世界の海にまで注ぐのである。この夕べには遠くの木々の梢に幾つかの帆船が棚引いていて、一人以上の心にとって、想い人の兵士をロイドのコーヒー店に連れてくるために、その帆船があたかも奔流から海へ向かっているかのように想われた。　ー　男爵の喜びには翼が付いていた。余所者の私でさえ皆の喜びを募らせることになった。最後には青空さえもそのすべての星々と共に、最小の星々さえも隠さずに、心に迫ってきた。　ー

より高い公開された夢から夜の世界に覆われた夢の中で憩うために、我々皆が別れたとき、ナンティルデだけがヴィアナのゼリーナの許に残って、夜彼女に昼間のことすべてを繰り返し話して、昼間の残光を夜、ボローニャ石[重晶石]のように輝くようにした。両者は朝遅れずにファルケンブルクに着くと約束した。

章の惑星ヴィーナス[金星]への伸展詩

この章を輝く金星で自慢するがいい。ここではゼリーナと彼女の初恋が登場していないか。　ー　彼女の人生は、愛のかの星に似て、幾多の先の鋭い巨大な山々で覆われていないか、それらは登攀が難しく、ただ最後の時に飛び越えられるのである。しかしまた、穏やかなゼリーナよ、汝は人生の夕方の空にヘスペルスとして微光を発し、汝の母親の静かな輝きを放っている。宵の明星が後を追う沈んだ太陽の輝きを放つようなものである。太陽の後をただ余りに早く追いかけないで欲しい。

*1　［フォンターナは望遠鏡に銀糸の代わりに蜘蛛の糸を張っている[3]］。

*2　Jablot は（ツィンマーマンの『人類の地理学的歴史』第三巻参照）干し草の汁に六種類の滴虫類を、新しい干し草には古い干し草とは違う滴虫類を、同様の数の滴虫類を牡蠣の液に見いだした。樫の木の皮の汁には二十種の滴虫類を見いだした（生きた樫の木もすべての木々の中で最も多くの昆虫を飼っている）　ー　いや Gruithuisen 博士によると（1808 年 10 月『上部ドイツ文芸新聞』）蒸留した冷たい水に腐敗なしで一日したら滴虫類が生ずるそうである。しかし（オーケンに反して）肉や植物の素材は新たな生命に分離しないで、そのかなりの部分は生命の養分のための粘液として残るそうである。　ー　すでにミュラーとファブリティウスが三九〇種の滴虫類を記述している。さながら地上における同様の数の生命の多い星雲である。

*3　ゲーテの見解はダーウィン（その『ズーノミア』第二巻 440 頁参照）の見解、つまりすべての動物の肢体は一つの測りがたい成長に従っているが、しかしとりまとめる成長に合わせなければならないという見解で拡張される。例えば皮膚を取り去ると肉体は新たな肉体あるいは粗野な肉体を造り出す、脚の皮膚を取り去ると骨が厚くなる。スワメルダムは彼の自然の聖書の中でこう言っている、蟻の端緒は象の端緒と全く同じようなものである。ただ心臓の力がより弱いために蟻は同じような大きさに至らない、と。　ー　私が付言すると、同じように海の動物は　ー　ひょっとしたら温度や養分や親切な要素の均衡の良さに恵まれて　ー　巨大なものに生長するが、まさにそのために地上の動物は小人に縮まる。
*4　最初のキリスト教徒達はその洗礼盤あるいは洗礼堂を墓の上に造った。
*5　［ナポリ・ディ・ロマーニア］

Ⅲ
地球
面積
魂の輪廻について　ー　ゼリーナの出来事

第一の細分割
予備会話　ー　魂の輪廻

朝公使館参事官が私の部屋へやって来て、十五分後に騎兵大尉もやって来た。アレクサンダーが言った、「私はただ昨日は、女性達のせいで、殊にゼリーナのせいで、こうは言いたくなかったのです、つまり一般的生命は、これを私の弟はどこでも、そして最も豊かに最大の要素、即ち水の中に、大陸［地球］の三分の二強を占める水の中に見いだしていますが」　ーー「空気はその両者を囲んでいるので、大気圏はもっと大きいというのを別にすればですね」と私は口を挟んだ　ーー　「つまりこうは言いたくなかったのです、彼の広大な生命は人間の不死に導くよりは一つの世界霊に導くもので、これが途方もない肉体、すべての動物界、植物界からできている肉体に宿り、活気付けている、と。一つの霊が動物どもを肢体として自らに有する、あるいはまた分泌して、我々がそれぞれの神経小枝の中に生きているように、それぞれの象や樫の木の中に生きている、と」。

「私は私の魂の傍らに」と私は言った、「上手く更に一つの魂を宿らせることはできません。あるいは私が世界霊そのものであった、ある肉体ではある別の自我、別の意識と限定して、同様に別の肉体では更に別の自我と限定しているのでしょうか。それでしたら世界霊は同時にいくつかの自我の一つの集合となりましょう。あるいは更に世界霊は意図的に自分の一片を前もって甲虫の自我へと縮めて、同時にその外皮の製造者となるのでしょうか。それとも前もって外皮を造っておいて、それから縮んだ自分の一片と共にその中に這い込むのでしょうか。　ー　このスピノザ的な有限な女神、諸魂や諸自我で一杯の途方もない世界霊を避けるために、生命と精神とを区別して、貴方はむしろ、世界霊は、花や滴虫類、筋繊維に魂を吹き込むのではなく、単に活気を吹き込んでいるのだと仰有りたい

のでしょうか　ー　そうなったら、また躓きの古い石をもたらすことになります。というのは世界霊の世界活気化といっても、それは一つの関連的なもの全体的なものと見なされなければならないので、同じときにある動物では冷たくなり、別な動物では温かくなるわけにはいかず、自らに対して数百万倍に分離し、多重化し、砕けるわけにいかないのです。結局一般的生命[活気化]が個別の有機体を自ら宿るために造るということになれば、どこから有機体の測りがたい技巧性、それにまた同じ生命のそれぞれの技巧性の高い段階や低い段階が生じているのでしょう。同じ生命が魚は漁師小屋として、豚は豚小屋として、蜘蛛は紡績工場として、牡蠣は金網の鳥かごとして、象は城として、人間は太陽の神殿として造り、住んでいます。この差異は製造物質の遠さや近さからは説明できません。同じ土壌、空気、温かさ、水の同じ温室の中で同時に並んで薔薇や撫子、球根植物、草が生じているのです。　ー　あるいはそれとも逆にすでに出来上がった有機体が生命を掴んでいて、より先の製造者を前提としているのでしょうか」。　ー

「親愛なるパウル」とアレックスは答えた、「私はそんな極端なことは言っていないし、深く考えてもいない。多分もっと何でも言えるだろうけど、しかし別の抜け道があります。だから、　ー　いずれにせよ娘達がすぐにやって来るから　ー　一般的生命は温かい物質どころか、単に冷たい物質に似ていさえすれば良くて、それが部屋の暖かい発汗で冷たいガラスの上に椰子の森を造り出すといったことは詳述しません。しかし世界霊の代わりに世界諸霊を仮定してみましょう、つまり魂の輪廻です。すると一般的生命が説明できますし、誰も通常の不死は信じていないけれども、一種の不死が確保されます。破滅と無常の会葬という嘆きは黙すことになります。私の魂はあちこちさまよい、ある世紀は居酒屋に、別の世紀は宮殿に宿ります、つまりミソサザイの中であったり、鷲の中であったりです」。

「続けてください」と私は言った、「私はその後であなたの御意見を支援しましょう、少なくとも十五分以上支援しましょう」。

彼は続けた。「女性達のせいで私は昨日そのことについて言及したくなかったのです。女性達は魂の輪廻には、少なくとも動物への輪廻には思いが至らないことでしょう、動物どもには化粧とか衣装箪笥は必要ないでしょうから」。　ー　「しかし花々への輪廻はどうだ」と騎兵大尉は言った、「花々はナイトテーブルがなくても魅力的だ」　ー　「単に愛する方に手折られて」、と私は付け加えた、「その方の胸に付けられるためだけでもいいでしょう。だって女性達は愛し続けようと思っていますから、人生の時間や空間を越えてでも。いや現世でもどんなに聾唖のような孤独の中でも、人間達の許で生きるのは、そしてシャクンタラ[(1)]ー のように子羊や小夜啼鳥、花々を愛する魂の大切な形骸と見なすことは、愛にとっては好ましいことでしょう」。

「では本当に」とアレクサンダーは言った、「御意見を合わせてくださるという約束の十五分間をお願いします。この仮説はますます私の気に入ったものになります。この仮説で無常という愚かな考えから解放されるからでは決してなく、実際世界の半ばが、いや全世界が担っている運命に結局、特にそれぞれの終末に結局満足することになるでしょうから」。

そこで私は要求された十五分を彼に許した。この十五分は魂の輪廻についての論文で成り立っていて、それを彼に私が二人の女性を出迎える間に読んで貰うのであった。それは数年前騎兵大尉のために、彼がカンパンの谷での不死への信仰に納得が行かなかったとき、

若干彼にこの信仰への道筋をつけるというか、近付けるために書かれたのであった。
ここに読者のためにも記載することにする。

魂の輪廻について

有機的に働く諸力の世界を支配している力は、その従者が消滅したとき　ー　つまり人間が死と呼んでいるものが生じたとき、没することはないので、再稼働、新支配のためにはいつも緊急時には魂の輪廻が、いや本来は体の輪廻というものが用意されている。我々はこの輪廻を、魂を称えるため、罰するためにあちらこちら行かせるインド人や、エジプト人、タルムード学者達の狭い意味で仮定したくない。例えば馬鹿なカバラ学者達は　ー　彼らはユダヤ人としてすべての偉大なことに関して卑小であって、彼らの巨大な神の肉体的人相書を見れば分かることだが　ー　邪悪な男性の魂を[刑務所の]エンゲルスブルクとかラ・プティ・フォルスあるいはウィーンの喧噪ハウスたる女性の肉体へ移動させて、代わりに敬虔な女性の魂は別荘、新しいエルサレムたる男性の肉体へ　ー　気位の高い魂は蜂に　ー　密通の女性は兎に　ー　他の多数はそれどころか植物や岩石、河川[*1]に移動させる。グロテスクで空想的なエジプト人によれば魂は死体の中に、それが完全に留まるならば、つまりミイラであるならば、三千年間寡婦の住まいとして満足して留まり、それから新鮮な肉体に移る。そうでない場合魂は動物的宿舎、地階[一階]に甘んじなければならない、私としてはミイラの剥製のような革製の強張った袋の中よりはさっと動く魚や鳥の中に暮らして生きたいとおもうけれども。　ー　ヒンズー人が何という報酬の動物の肉体、処罰の動物の肉体を身罷った魂のために用意しているかは、よく知られている。しかし、これらの肉体は交互に幸せにしたり不幸せにしたりし得て、例えば地獄の罰を女性の体で受けることになるハイカラ野郎の魂はまさにナイトテーブルの許、女性の体で至福の思いに至ろうとヒンズー人、エジプト人、カバラ学者達は考えないのであろうか。一帯どこへ、どんな適切な人間の肉体に最初の両親達の魂、最初の子供達の魂は赴くことになったのかと輪廻説の民に尋ねたいところであろう。　ー　新生児の魂はどれほどの無料宿舎を昔死んだ魂に認めることができたか[新規の魂と輪廻の魂の割合]。

しかしこの古代の仮定はさしあたり壊すよりもっと仮定する可能性がある。本来誰もがすでに死去以前に自らの体を通じて一つの魂の輪廻を行っている、体は三年ごとに別の体に変わるのである。子供時代の肉体から高齢時の肉体への隔たりは、この両関係から或る動物の体への隔たりとひょっとしたら同等かもしれない。いや誕生前に母胎内の幼い自我はすべての動物界を経ていて、虫、昆虫、両生類、鳥と次々に経過している。目覚めた体から睡眠中の体への日々の移行[輪廻]を更に考慮すると、すでに生前に上昇や下降の魂の輪廻を体験していることになる。

この生前の輪廻もすでに出来上がっていて魂のない空の体への侵入ではなく、その都度精神を棟梁としてよりは施主として全く新しい体を造ったものである。ただ建物が狐穴となるか、蝸牛の殻かとなるか、太陽の神殿となるか、つまりその中に狐が肉体的に生ずるか、蝸牛か、人間か、それについては無数の、我々には分からない条件による。この条件の下で精神的力と外皮とはお互いに一つの有機物を目指して一致し、対になるのである。しかしこの条件は必然的に同時に二つの側面から発せられる、棟梁と工具の側からで、蜂は巣のためには花粉を、ビーバーは樹木を必要とするようなものである。

仮説は三種類設定され得る。しかし最も正しいと思われるのは最初のもので、つまり魂は有機的植物から上昇して、生命、活気を通じて、さながら形成を通じて形成される、それで一つの遊牧のモナドとして動物界を巡る大旅行により次第に高く発展し、かくて自ずと、生命によって上昇された力はより高い肉体を選んで、精神的火花の発する距離はその大きさと比例して増大することになるというものである。いやライプニッツによれば素材そのものがその本性上単に眠れるモナドの一つの国家結合体[フェルカーシャフト]であって、この結合体の上に私見によれば精霊界がより目覚めて支配しているのであれば、これらの遊牧のモナドはこの精神的民族的移動の途次、個々のモナドをいつも一塊にしてより高次の諸力へと浄化して、それで結局一人の天使が諸魂からなる一つの肉体をまとうことにならないだろうか。無限の時間の長さ、それに測りがたい世界空間、この二つはこの霊化と蒸留のために存在してきたし、存在しているのではなかろうか。　ー

仮説が動物への諸魂の後退を仮定するのであれば、さながら動物界への移送、追放を仮定するのであれば、例えば蟹へのあとずさり[逆行]は、だからといって精神的喪失とかむだ足[肉化]というものではなくて、単に万有の影響に対する別の態度であると言えよう。そもそも人間の魂は人間的な、つまり多面的な感受性の把握のために、動物的一面的な感受性の前もっての訓練が必要であったのではなかろうか。殊に人間の魂は生きている地上の被造物の抽出物、エキスなのであるから。人間の魂は確かに動物の器官を発展の途次棄てている。しかし精神として、一人に慣れ、一人で強化できる精神として、動物の器官の余韻を残している。ただこの余韻に倫理的傷痕を探してはならない。というのは動物はいつでも正しくて、最も残酷な動物でさえ正しいからである。すでに人間においても情熱は単に間違って応用された倫理性にすぎず、例えば怒りは、性急さと弱さとによって刺すような焦点として光線を本来のものとは全く別な対象に凝縮して向けているとすれば、無思慮な動物は自分の観念のただ電気的な蓄電器から合成されているのである。禿鷹は大空に怒って小動物界の上に生きた屠殺刀として漂っているが、しかし彼の熱い怒りは強い空腹であり、その嘴は我々のナイフよりも罪なく屠殺している。それでいて禿鷹の心には愛と犠牲心も住んでいる。というのは禿鷹として自分の満たされぬ胃を犠牲にして自分の猟をその雛達と分かつからである。猛禽の中に人間の魂が閉じ込められていて、赤色や黄色の窓の付いた公園の亭からのように世界を眺めているのであれば、より自由な人生に取り出してくるのは訓練された視力だけであろう。

最後に幾多の民族が人間の魂を再生者とか幽霊としてではなく、新生児として再生させている。ヘルダー[(2)]は（魂の輪廻についての彼の会話の中で）現世の人間の営み、子供となり、背が伸び、年を取る奮闘努力にうんざりして鬱々と語っている。実際私自身二度と、いわんや十回もは、またアルファベットの読み方や注、ラテン語の例外、ヘブライ語の動詞を学びたくない。こんな目に遭いたくない　ー　と私は今六十歳であるが申し上げる。

ー　しかしこの年齢に再生の幼年時代からは達しないかもしれず、すべては初めから最初のときと同様に新鮮に進行するかもしれない。むしろこのような再来の彗星として人間はその人生を同時に二重化し、多彩に仮装することだろう　ー　人間はその素敵な青春時代をそのすべての最初の歓喜と共にまた手にできることだろう　ー　他の公開された人生の地位を専有し、管理する多様性は大きいのであるけれども、結局必ずしも先の肉体や役割を引き受けることにはならないかもしれない。例えば勤勉な百姓は痛みもなく休みの多

い宮廷人として、詩人は皇子として、兵士は快適な学者として、その他等々で再来することだろう。いやそれどころか歴史の教授は二度目も歴史の教授として登場を願うかもしれない、それが三度目、四度目、五度目となって、第一幕のときは退席しなければならなかった世界史、民族史の芝居を二幕、三幕、四幕、五幕まで耳を傾けることになって、結局中国、アフリカ、ドイツが時代と共にどうなったか知ることになろう。

ただ二点のことがこの魂の輪廻に対して反論することが難しい、第一はこれらの旅の忘却のことで、旅する者達にとって自らの旅行中は諸対象が素早く変転するためこれらの対象の印象がより平板になるようなものである。というのは自らの肉体の中でさえ、肉体というシャツを替えなくても、記憶にとっては前と違う状況は消えてしまうからで、例えば野生で育った子供達にとって教化の後では野生のすべての記憶が消えるようなもの　ー　神経を病んでいた者にとって病気の記憶が、素面の者にとって深い酩酊の後酩酊の結果が消えるようなもの　ー　そして透視家の女性にとって目覚めた後、輝かしい世界全体の通過が消えるようなものであるからで、この輝かしい世界の多くの炎のような痕跡は一艘の船が輝く海を進むように残らないのである。　ー　どうして現世において、全く様々な肉体や更には様々な状況からの記憶が物体的に可能ということが有り得ようか。

ここではまた輪廻の間の時の損失という反論も妨げとはならないだろう。レッシングがすでにこう問うて却下したからである。「何という時を私が失うことになろう。永遠はすべて私のものではないか」と。　ー　いやはや、精神はそもそも幼年時代や高齢、睡眠を通じて時間を失わざるを得ないのではないか。それに存在する限り、時間が失われるということがあろうか。どの瞬間も、どの時の雫も作用し、空ろにしたり、生み出したりするのではないか。すべての時間的なものが再来するということで、私はどんな長い過去も何の喪失もなく失うことができた、更に長い未来が私に余りあるほどにまた時間を贈ってくれるであろうからである。そしてどのような諸発展の遅れとなろうとも、自分が永遠からのものでない限り、ある発展全体の分だけ遅れなかったものはいない。しかし人間は　ー　自分の自我に慣れていて　ー　二つの測りがたい時空の中から自分の人生の小空間を取りだして、それを高い小島として無限の時間の海の中へ置き、その島から無限を測る。誰もが、自分と一緒に万有も走り出し、走り続け、到着するに違いないと思う。そして自分は、ただ中心を囲んでいるだけのある無限のサークルの中の中心点であると思う。

プラトンとかピタゴラスといった人が、それに民族や時代の全体が蔑ろにしなかった現存在への見解に少なくとも全き照明を当てることである。人間の魂の世界を、諸有機物を経ての、より低いものから至高のものに至る精神的諸力の一帝国として考えるがいい。精神的力は植物や動物の上昇する諸肉体の蒸留器、昇華器によってより繊細に浄化され、精神はより高度な意味で精製される。精神的力は植物の体を脱ぎ捨て、より高次の力のために動物の体を身にまとう。より小さな間隙の中で上昇浄化の同じ変化が自らの肉体で反復されるようなものである。　ー　本能は、これは肉体のプレス器でさながら一点へと追いやられた一面的悟性であるが、より高次化された本性のより自由な大気の中、化身の中では　ー　青虫の仕舞い込まれた羽が羽化の後で突然飛行中に広い翼へと広がるようなもので　ー　広い思慮へと展開して、練習するようになる。多くの技巧的な昆虫の中に清澄で慎重な象が将来のための生徒として住んでいる。いや、余りに大胆すぎるというのでなければ、地上の緑を目にする前に掻爬された胎児達の魂を、これらのまだ動物までにすら達

しなかった魂を、神々しい人間の天才達の高貴な群れに編入している神学者達よりもまだ適切に、比較的高度な動物どもの宿舎に編入できよう。

しかしむしろ諸魂を人類の家族圏の中に保ち、その中で輪廻させることにしよう。これは一つの魔法の圏で、その内部では人生のすべての宝が明らかになるけれども、その外部では不気味なもの、不確かなものが待っていて脅しているのである。　ー　魂は望む限り再来させるがいい、地上は十分に豊かで、魂にいつも新たな贈り物をし、新しい諸世紀や新しい過去、新しい未来を贈り　ー　新しい諸国や諸精神、諸発見、諸希望を贈る。精神は豊かで、帰還するたびに地上の人生が新鮮な富で出迎えることがないほどに立ち去ったことはなかった。

ただこのような考察の際には､人生の端緒を越えてしまうような質問をしないで欲しい。ここでは最初の人体化された魂とかその数等々のことである。どの答えも世界についての答えとなって、もう一つ別の答えを要求することになろう。現在の代わりに過去を、あるいはむしろ時代の代わりに永遠を探求するのは止すがいい。

何故まことに大胆に、まことに熱く、信心深く人間達の地上を眼前に広げて描こうとしないのだろう。一瞬間でもこのような人間達の地上があれば、つまり君の隣のどの魂もすでに一度、いや何度も苦しんだことがあって　ー　一人の子供のつるつるした美しい色合いの顔は、すでに人生の暗い深淵、鉱山で働いたことがあって、今や子供の園の太陽の前に休むために上に登ってきた一人の精神を隠しているかもしれないのであり　ー　我々は前世の諸精神の下に、いや同時に後世の諸精神の下に暮らしているのであり　ー　ひょっとしたらある魂に対して過ぎた人生の古い重荷の代わりに新たな人生での若干の喜びを与えられるかもしれず　ー　すべての民族や時代の諸魂が混じり合って生きて、しばしば愛しており、遂にはいつか別世界がすべての地上のヴェールの衣装、覆いが一緒に取れてしまって、地上の夜の間、一緒に語らっていた皆が、曙光の前で正体を確認し、時も所もかけ離れていた者達が一緒に集うことになる。そうなれば同胞の人間共同体は地上の修道士の家、修道女の家に一緒に住みながら、遂には皆に、数千年後には避けがたいその家の倒壊の後、果てしない天に新たな地球と住居が明らかにされることだろう。そこへはただ無限なる腕のみが人類を連れて行けるのである。というのは一つの神性がなければ人間にとって目的もなく、目標もなく、希望もなくなるからで、単に震える未来、すべての暗黒に対する永遠の不安のみが、そして至る所に偶然のすべての人工庭園の下での敵意ある混乱のみが生ずることになるからである。しかし神性があれば、すべては好意的に秩序付けられ、至る所に、そしてすべての深淵に英知が見られることになる。かくて神性は、最初の人体化[具体化]、居住化を単なる偶然にまかせて全地上の諸魂に分配させたわけではなかったように、同様に第二の人体化、それに続く人体化も偶然に任せたのではなかったであろう。かくて遂に第三に数千年続く人類のすべての塊は、第二の天体、宇宙の新しい講義室、自然の第二の神殿を見いだす可能性がはなはだ高いだろう。このように我々を輪廻させて、希望を抱かせて欲しい。

*1　　彼らによれば水の中では魂は大いに、特に水車では耐えなければならないそうであるが、鋭く考える者ならば、水の体は一体どれほどの幅と長さがあるのか、魂は百もの水

車を有する諸国の長さの川に移るのか、それとも小川か、泉か、露の雫かどの川の体へ移るのか決めたいと思ったことだろう。更に彼らは魂を魚に追いやり　ー　それ故安息日にはさばかれる、最後には葉っぱに追いやり、それ故秋には痛々しく落下する、　ー　いやそれどころか悪魔に追いやる、これは全く不可解なことである、というのは魂は魂に移れないし、悪魔的肉体はすでに前もって占拠されているからである。
フリュッゲ、『不死についての信仰の歴史』第一巻。

［第二の細分割］
［ゼリーナの出来事］

私がこの考察を公使館参事官に渡して、　ー　より高次の段階でのより高次の不死への信仰に彼を近寄らせようとした後で　ー　憧れと喜びの期待で一杯になって、二人の女性の友を出来るだけ早く、花や穂先の下に見いだし、その声を聞きたいと思って朝の野原に出かけたことを皆様には思い出して頂けよう。昨日のことについて、ヘンリオンの心と運命について、コーヒー店でのあれこれについて語ることがまだ沢山残っていた。馴染みの展望の丘に立っていると、また前回と同様にナンティルデが一人で、しかし尋常でない急ぎ足でやって来るのが見えた。自分はちょっと女友達よりは早めにやって来た、少しばかり私と二人っきりで話したいと彼女は言った。つまりゼリーナは毎朝老いた牧師未亡人を訪ねていた。未亡人は十年以上前から痛風という拷問部屋に閉じ込められていて、そこで多くの敬虔な日々をただ罪人のような夜で終えていた。それ故誰も病気のことを罪のように話すべきではない。まさにより禁欲的な女性は長い神経の病やお産の苦しみの後、結局男性よりも頻繁に、かの痛風の苦痛に、裁判の苦しみよりも厳しく長く、親指や指先のねじ込みに、スペイン靴[足枷]に、串線法に、鉗子に、そして曲がった緊縛に至る刑を受けるのである。特に老いた牧師未亡人にとってその苦痛の中でも心苦しく思ったのは、曲がって寝ている状態では祈るとき、以前のようには跪くことができないことであった。　ー
この曲がった状態も跪く姿ではあったが、ただ水平な跪きであった。それでも少なくとも節くれ立った両手を、他人の手の助けを借りて、辛い思いの下、祈りのためにはなはだ不完全ながら組み合わせて貫っていた。ただゼリーナだけが彼女の腫れた指を何の苦痛もなく組み合わせることができた。いやこの病人は祈りながら自分の痛みが和らげられ、溜め息が聞き届けられるのを感じた。ゼリーナは彼女の祈りが終わるまで待っていて、それから指を大事に一つ一つ離していった。
しかしこの良き二人は与えているものと受けているものの解釈の点で間違っていた。というのはゼリーナがここで成功しているのは単に磁気療法の力のせいであったからで、その力でもって彼女は共に祈るからと思われていた意志のせいであるかのごとく痛風という猛獣をなだめて、かくて触れることで治していたのである。勿論二人は治療をより高いもののせいにしていた。
昨日の夕方の後　ー　その夕焼けは多くの祭日の色合いを準備しているように見えたが　ー　私は陽気なナンティルデをはるかにより陽気に待っていた。しかし今や彼女が語ったのは、ゼリーナは自分の未来のこのような煌めく星の明かりの後では暗い夢で圧迫され

るはずはなかったのに、楽しい眠りには就けなかったということであった。彼女は夢の中で叫んだ。「ヘンリオンよ、ヘンリオン、あなたの傷は深すぎる。こちらに戻れないかもしれない。そんな大きな傷を受けてあなたの忠実な胸はどんなに苦しんでいることでしょう」。そのようにしばしば彼女は夢の中で叫んで、ナポリ・ディ・ロマーニアの明け渡しの二日前に彼の肺に弾が当たったときの傷と場所を正確に述べたのであった。すでに数週間前から、とナンティルデは付け加えた、自分の女友達[ゼリーナ]は寝ているとき激しく泣き、溜め息をつくことがあった。そして不安になってゼリーナは月光の中自分のベッドへ寄ってきたが、しかし彼女の顔は全く神々しいものの、青ざめて見えた。今回の薔薇の頬に多くの涙が見えた。幸い目を開くと、涙はすぐに乾いて、目は澄んでいた。この朝ゼリーナは、静かな希望で強化されたかのように、とても快活に目覚めていたので、自分はゼリーナの明るい一日をその夢の影絵で暗いものにしたくなかった由である。「もっとも自分は」とナンティルデは付け加えた、「そうしたいと思った、だって夢はまさにその反対を意味していて、悲しい夢は幸運を意味するのだから」。

私は世間の人すべてに対して、まずはゼリーナに対して、そのことを黙っているよう切にナンティルデに頼んだ。というのは全く新たな星の夜が明らかになったからである。つまり募っていく自己磁気療法の星の夜のことである。ゼリーナはすべての徴候からしてこの状態にあって　ー　それ故未亡人の許で指による磁気治癒力も有しており、このときには破られた胸の歪んだ恐怖の像が生ずるのであるが、しかし未来から読み取れるのは残念ながら透視の女性達が真実を読み取っているのと同じ時間に限られており、彼女の磁気療法はただ夢の殻からようやく未熟な具合に生じていたのであった。哀れな女性よ、私はあなたの友ナンティルデに、この友には私の不安と依頼の理由を言うことすら許されなかったのであるが、沈黙の誓いを十分厳かに課すことができたであろうか。あなたが、傷つく夜に対する若干の治癒力のある輝かしい日々を保てるようにそうできたであろうか。

すべて華奢であるにもかかわらず或る種の性急さを有して、すべての動きの中に、没落を告げる素早い熱を帯びた鼓動の、そうした女性がいるものである。そのようにすべての愛するものに対するゼリーナの熱意は遂には彼女の魂の肉体上の、薄すぎる紗のドレスに裂け目を入れるに違いなかった。そのようにエーテル的なものはいつもエーテルを求め、華奢なものは何も我々の許に留まろうとしない。

とうとうゼリーナが穂先の中を飛んできた。しかし遅れたことを父の目覚めが遅かったからと詫びた。まず父親に会いたいと思い、その父親はコーヒー店での立派な手紙を今一度彼女に読み上げなければならなかったのである。彼女の目はヘンリオンの幸運と帰還を信頼しきっていて、輝いていた。そして時々尋ねた、この輝く雲の子羊を浮かべた青空の朝は一年中で最も素敵な朝ではないか、と。彼女は私どもと一緒にファルケンブルクの友人達の許に急いだ。館の前で、不死についてのすべての調査の際に是非立ち会わせて欲しいと私に頼んだ。ナンティルデもまたいつものように快活になって、自分の女友達が楽しげなので夜のすべての脅威の像を忘れていた。

章の惑星地球についての伸展詩

諸民族は、丸い地球よ、汝の上で諸魂を長く、身罷った諸霊のように散策させる、常に新たな肉体という服を着せて。汝の表面は短い散歩のためには十分な緑と花があろう。し

かし汝の東と汝の西とが永遠に交代する汝の周りを永遠に周航するようには人間の心はできていない。いつか汝の上に、最も遠い星々へと突き出る天の梯子がなければならないだろう。しかし我々に天を隠してしまう汝の大地崩壊の方が、天を見せてくれる汝の丘よりも度々現れる。然るに汝は時々、無垢なゼリーナの歩む花咲く小道では晴れわたる。

Ⅳ
火星
［面積］

［公使館参事官　ー　ヴェッターホルンへの散策　ー　不死への懐疑としての眠り、夢、高齢そして死　ー　不死と和解した眠り、夢、高齢　ー　精神と肉体の関係］

第一の細分割
［公使館参事官　ー　ヴェッターホルンへの散策］

我々が着いたとき、我々は公使館参事官が魂の輪廻について全く喜んでいて、ほとんど陽気であるのを知った。彼は女性達の信仰にとってはほとんど大胆すぎる思いつきを述べ、例えばこう言った。魂の輪廻の方がアブラハムの膝に［安楽に］永遠に退屈して座っていることよりも楽しい。時間という退屈の後に更に永遠という退屈までが続くのであれば、ひどすぎるであろう。　ー　ひょっとしたら輪廻の桂馬飛びで将来の諸国家を過ぎて、いつか数世紀後に負債もない立派に出来た国家に行きつくことになるかもしれない。これまでは一年中単に散らかって汚い、瓦礫や壁の足場、塗装屋の桶で一杯の無秩序な部屋に踏み込む塗装屋の親方に似ていたのだから、と。

ナンティルデは言った。「そんな風に彼はいつも語って、人々の信じている最も素敵なものを攻撃するの。でも今日は、私どもが避雷の小屋に行って、ずっと一緒にいるとき、パウルさん、あなたの相手をするわけです。兄には不死についての懐疑のすべてを吐きだして、それからまとめて欲しいわ」。

「心から喜んでそうする」とアレクサンダーは答えた、「私は自分の間違いを、それが欲しい人には皆に喜んで与える。一人の神学者が、地球全体が諸民族から諸民族にかけて、諸世紀から諸世紀にかけて、脳球から脳球にかけて、ただ間違いの命題で埋め尽くされていて、結局その神学者は実にすべての真の命題にただ自分の許だけで行き当たり、自分は自分の価値をまことに恥じる次第であるとき、そもそも個々人の数ダースの間違いや、あるいは千もの間違いは何ほどのものであろう。それにそもそも私が間違いを保持するのは何年ほどであろうか。二，三十年後にはきっと死が私を間違いから救済することになる。いや死後不死があるのであれば、死は間違いの代わりに極めて素晴らしい諸真理を与えてくれるのだ」。

「アレックスよ、おまえは今日はいつもより大胆だね」と騎兵大尉は言った。「世を越えることについての調査や疑問は」とアレックスは答えた、「すべて大胆です。信仰は懐疑よりも更に大胆です」。　ー　「間違いも」とカールゾンは言った、「行為へと育つことがあろう。だからどうでもいいということには余りならない。東インドでの若い未亡人

達のための火刑用薪、ヨーロッパの老婆達のための火刑用薪、すべての大陸での異教徒のための火刑用薪は、最初はただ罪のない無意味な諸意見が基になっている。私が作家であれば、大胆な命題を述べるたびに、自分が詐取できるであろう全権に対して恐れを抱くことだろう。　ーー　しかしなるがままにまかせて、大胆に行うかもしれない。　ー　大胆さのない人生に意味があろうか」。　ー　「実際」とアレクサンダーが口を挿んだ、「人々はいわば氷河の谷に住んでいて、周りは一切雪片で一杯の高い、至高の王座に囲まれていて、それらは一声高く叫ぶと、あるいはラバ飼いの鐘が鳴ると丸まって雪崩となるのです。　ー　一番いいのは自分のピストルを発射して、雷を鳴り止ませて、それから旅を続けることです」。

とうとう皆が陽気になって、皆でヴェッターホルンあるいは避雷小屋へ向かって、その優美な、さながらカンパンの谷風な散歩の途次、もっと長く不死について話そうと取り決められた。　ー　「素敵と思うわ」とナンティルデが言った、「だって通り過ぎて行く村々のすべてに、教会の側に大きな菩提樹が教会の椅子さながらのベンチと共にあって、ベンチに座って議論できるのだから。公使館参事官も一緒よ、そしたらこの人教会の近くで改宗することになると思うの」。

騎兵大尉夫人のヨゼーファは、いつもは自分の喜びを表すよりも隠すのであったが、自分の快活さをどの表情にも漂わせていた。宗教的会話は、いや単に学問的会話でさえも以前から最も強く彼女の心を捉えていたからである。それ故今日は自分の息子が、この息子はどの人をも、その人がどの年齢を願おうと、若返らせるのであるが、他人を若返らせるその活発な技法を大目に見た。　ー　ただ、受容するだけで創作することのない、播種するよりは収穫する方のこの陽気なレッスンにヴィルヘルミ男爵は幾分不調で、余り関与しなかった。朝食の後遅く着いたからで、早朝の散歩は半日分疲れるとのことだった。しかし彼の好意的友好的な外見にとって、善意の目が浮かぶことになれば、ナイフとフォークで年月の大鎌に抵抗し、胸甲としてのボタンで留められたナプキンで死に対処するかの老人達との比較的大きな類似性さえも大目に見られていたことだろう。　ー　ただ、晴天の前の小さな雲が普段そうであるように、小さくなろうとしない小雲だけが、彼の表情の中で動くことがなかった。

午後に我々は我々の牧歌の日の後半部に踏み込んだ　ー　というのはこの雲に覆われた地上では単に牧歌の午前と午後、それに夕方と真夜中のみがあり、それも単に少人数の仲間の間にのみあって、鈍く怠惰な牛飼いの民や好戦的な南洋の島民[友情島人]にとって牧歌の年月や牧歌の国々はないのだから　ー　午後に、と申し上げるが、我々は避雷小屋への移動をまことに快適にゆっくりと始めた。というのはファルケンブルクから半マイルの所で、つまりその山城に属する小村の下、教会の扉の横の大きな菩提樹の下のベンチに腰を下ろすことになったからである。ここで私は公使館参事官に不死の件に関して悪魔の弁護士[殊更けちをつける人]役を頼んで、彼が絶えず、「その役を果たして」、話すようにした。　ー　「喜んで」　ー　と彼は答えた　ー　「悪魔の弁護士は、いつでも不正に目をとめていて、それでいて不正ではない、ローマと世界で唯一の者です。どの人もその神聖さによって聖人に列せられることはありません、神聖さそのものによることなんてありません」。

第二の細分割

眠り　ー　夢　ー　不死への懐疑としての高齢と死去

「不死を攻撃する三ないし四の反論を」とアレクサンダーは始めた、「ある夜一度に眼前に具体的に目撃しました。フラクセンフィンゲン侯爵[1]の夜の葬儀警備の時のことです。若い元気な青年貴族が退屈の余り眠り込みました。　ー　第一の反論です。年取った式部官は、その目覚めそのものが一つの眠りではないにしても　ー　深い眠りに陥るのに逆らっていて　ー　かがんで座って見張っていましたが、寄る年波で術もなく、古い乞食許可状のようにぼろぼろで、何の記憶もなく、大方の感官も欠け、　ー　いや意味もない状態でした。　ー　第二の反論です。そして冷たく横たわっている王冠を被った死骸はいずれにせよ第三の反論で、最良の反論です」。

「だったら」と兄を必ずしも全て理解しているわけではなかったが、ナンティルデが口を挿んだ、「三人の死亡者ということになったことでしょう。でも同じように三人の睡眠者とか三人の高齢者とならないかしら」　ー　「よろしい」とアレクサンダーは答えた、「されば式部官はその眠りで最初の論的となりましょう。私どもが毎日生ずる睡眠に慣れているのでなければ、殊に朝寝坊の女性達のように慣れているのでなければ、睡眠をアレクサンダー大王[2]のように我々の脆い人間性に関する最も強固な証拠の一つに見なすばかりでなく、ミルトンの楽園のアダムのように最初の眠りを一つの死と見なすことでしょう。ラビ達は単にパーセントで考え、眠りを単に六〇分の一の死と考えます。全体皆が、日没後、ある世界部分、世界帯から、別な部分、帯にかけて眠るので、いつも沈む夕陽を追って、ただ大の字になった、サトゥルヌスの大鎌で刈り取られて横になっている人間達の地球を目にすることでしょう　ー　最も長い墓地の一つを　ー　人間達の真の死の姿を　ー　皆が力を失い、感覚を失い、意識を失って　ー　最も機知豊かな者でさえ、最も単純な者に似て、最も力に満ちた者でさえ、最も弱い者に似ているのを目にすることでしょう　ー　この件で私にとって不思議なのは我々の種族全体の嗜眠ではなく、哲学者達の寝ぼけです。哲学者達は新鮮な力強い傷のない肉体の中で、魂が日々繰り返し死亡し、埋葬されるのを目撃しながら、それでいてケース全体が壊れ、砕けた後、まことに感受しつつ、思考しつつある、いや高められた精神を目にすることになるのです」。

「私はすでに寝ずの番から」とゼリーナが口を挿んだ、「もっと慰めの多いことを推量してきました。時々眠れない夜、自分の前に数千もの不幸な者達を思い浮かべたものです。その人達は病床にあって、中には健康な臥人でさえも獄舎で幾夜も痛々しく、ゆっくりと時をやり過ごし、眠れぬ思いのまま目を開けたり閉じたりして、さわやかさとはほど遠く、それでも切に朝を迎えたいと溜め息を付いているのです　ー　もっと不幸なのは夜のランプの前に病んだ胸のまま起きて座っている人達で、横になって休むことさえ失われている人達です。傷ついた人生の香油であるもの[眠り]が、人生の解体的な毒を予兆することがあっていいでしょうか」。

「ゼリーナよ、それでただもっと明らかになるのは」とアレクサンダーが答えた、「見せかけの死が人生にどれほど必要であるか、それにどれほど早く我々は駆け走り、滴り落ちて、そして船の時計のように十二時間ごとにまた動くために置き換えられなければならないかということです。しかしその際決定的なことは、少なくとも悪魔の弁護士にとって

決定的なことは、最も強力な明るい精神でさえ、最も強力な温かい意志同様に、毎日ただ肉体によってある没落へと　ー　というのは作用の真の静止と没落とは単に時の長さが違うだけだから　ー　無情にも判決を下されているということです」。

「私が思うに」とナンティルデが反論した、「そんな死のような眠りの中でも夢を見たら、目覚めていては出来なかったことを幾つも、例えば飛んだり、劇的なことをしたり、予言したりすることが出来ると思うの」。　ー　「おまえの夢に関する最初のこと、あるいは最も重要なことに関して言えば、夢の中でどんなに高く飛んでいても、結局目覚めた後、大地の中に寝ているのではないとただ明らかになるだけだ。というのは私には眠りの丘、ベッドの丘で完全に埋葬すること、厚く大地で覆うことの方が　ー　本来頑健な肉体の場合よく見られるように、いや機知縦横のレッシングでもそうであるように　ー　夢見ることよりももっと好ましいとさえ言えるからだ。というのは無意識という不透明な掛け布団の下、哲学者なら精神的諸力の楽園全土を野営させることができるからで、哲学者のこの言葉は信じていいだろう。しかし夢というものはそれだけに一層よく承知しているように不合理に満ちたもので、眠りそのものよりもはるかに放恣に肉体への支配力を行使するものだ」　ー　「この点で」とカールゾンは言った、「アレクサンダーは正しい。私は自分の若い時からどんなに自分が夢の中で暴れて、荒し、殺害し、ベッドを演ずる暴君達の舞台としたことかよく覚えている」。　ー　「私は就眠前に何度」とアレクサンダーは続けた、「自分に言ったことでしょう。さて汝は早速、自分が前もって何も知らないし、何も遂行しない或る国へ行くのだ。汝の外交官としての性格すべてもってしても、最も若い秘書官の意志を、ましてや汝の閉ざされた目の前に現れるその秘書官の侯爵の意志を支配できないし、いや汝自身すら支配できない国に行くのだ。汝はベッドの中で、どんなより良い意図にも反して、絞首刑相当の事を犯すことになり得るのだから。私はそれ故多くの優しい者達が可哀想でならない。この者達は良心の立派な支配の下、きれいに過ごした一日の後、不安げに束縛のない放恣な夢の世界へ入ることになり、そこでは境界の所ですべての倫理的自由意志を置き去りにしなければならないのだ」。

ここで女性達は、そうではないと言わんばかりに頭を振った。「全体に」　ー　と私は頭を振られたことを正当化するために口を挿んだ、「女性の夢は男性の夢よりもはるかに倫理的です。実際パラゴニーアの素面のイタリア皇子[3]の世界のように歪んでずれた世界はまれにしか女性の夢には現れません。　ーー　しかし私は、公使館参事官殿、いわば逐一反論し、貴方の意見を変えさせようと思っていません。まず全体を述べてください。するとまたそれに対する一つの全体を対置させましょう。まさにそれ故交互の論戦は決着がほとんどつきません。小文に対しては小文が、一部分に対しては一部分が攻撃し、せいぜい転倒させるだけだからです。しかし信仰というものは個別の証明の上に、支柱や脚の上に立つように安んずるものではありません。その支柱を壊しさえすれば信仰が倒れるというものではなくて、信仰は千もの目に見えぬ根毛と共に感情という広い土壌に根をおろしています。それ故誰かが沈黙するまで論破できるけれども、しかしその人を納得させないことがあります。感情は洞察よりも生きのびるもので、痛みが慰めの理由を越えて残るようなものです。

「それ故」とアレックスは口を挿んだ、「作家が登場人物にばらばらの会話の代わりに単に長い話を交互に置いても、対話が不器用だと不平を言うべきではないでしょう」。

ー　しかし私はここで現実、自らその必要に迫られていることが読者には容易に見てとれよう。

「さて悪魔の弁護士が」　ー　とアレックスは続けた　ー　「眠りと夢から、肉体の精神的生き残りの不可を結論づけていることに関して言えば、これはもっと強く高齢から結論づけることができます。というのは眠りは本来日々の高齢化に他ならないからです。単に脱力化した感覚、鈍化、忘却、冷淡、陰鬱を伴っています。ただこの高齢化は青年時から日々続いて、結局最後にはこの夜だけの老人が日中の老人にもなって目覚めることになります。ちなみに悪魔の弁護士にとって高齢化、あるいは侯爵の葬儀番の背の曲がった式部長官というものは考えられるすべての病気、傷、飲食への依存といったものを意味し、包含していまして、かくて肉体が精神をその農奴として鎖につなぎ、引きずることになります。というのは熱や、いや狂気、失神というものがあっても、これらは皆時と共に育ってくるものではなく、揮発するもので、これらに対しては修理が可能ですが、より高い高齢化にはいかんともしがたいものがあるからです。これは絶えざる大地への沈下、病気であり、墓地の中への体の部分から部分の踊りというかの童話に似ています。実際、高齢の背の曲がった賢人を見ますと、ニュートンやカント、リンネといった人が、自らの弟子の一人に落ちてしまって、精神的肉体的に干涸らびたミイラとして、消え去った諸力の生気のない自己聖遺物として分別もなくどもりながら、私の話を聞き、私の話を理解しないでいるのを見ますと、私は彼らの死を目にするときよりもはるかに打ちのめされます。といいますのは単なる死体を見ても、体と共に背の曲がる精神、もっと自由な関係を偲ばれる精神のことを思い出さないからです。亡くなった老人も亡くなった若者も同等です」。

「しかしまた」　ー　とカールゾンは言った　ー　「プファルツのレヒゲンの百を越した老人のように晩年になってまた若返り、新しい歯と髪の毛を得た老人達のことも考えておくれ」　ーー

「しかしそれ以上ではありません」と息子は答えた、「精神力が強化されたわけではありません。　ー　大地の下に眠っていてさえも歯は伸び、髪の毛は生えます」　ーー

「それに」と父は続けた、「高齢になるまで弱体化しない思考力、保持力を有していて、高齢と見てとれるけれども、聞きとることは出来なかった人間達のことを考慮しなくていいのだろうか。通常高齢というのは肉体という容器の軟骨化、骨化、化石化と考えられていて、あたかも人間は死ぬ前に自らの墓石、自らの彫像とならなければならない按配であるけれども、しかし精神は後になってようやくこの硬化を感ずるのではないか。硬直する要素の中にあってもまだ自由に動くのではないか。　ー　精神の屈服は肉体の沈下や平伏同様に大きく深いのだろうか。肉体は、明るい、夕闇を破る陽光を魂として有するのだろうか、魂はそのときには他人や自らの前世の焼け落ちた歓喜の炎で温かい思いがするのであろう」。

「私は」とヨゼーファが付け加えた、「何人かの人々が、いや男性でさえ、まさに後年になって、死去した人すべてにより深い感動を、いや単に悲しみの場合ばかりでなく、芸術の喜びの場合も、より深い感動を示すと知りました」。　ー　「まさにその通り」と騎兵大尉は付け加えた、「しばしば外部に対する冷淡さと見えるものは、より高い契機によるより高い要請にすぎないことがある。　ー　かくて一体にいつも高齢によって万事その人間の表面が氷となる。しかしアルコール飲料と同じように厚い氷の皮が、それだけに一

層熱い、心を保つ中心部を包んでいる」。

「しかしまた話を体のことに戻しましょう」とアレックスが言った、「子供の袖長の少女服から高齢の拘束着となってしまう体のことです。まさにこの老人達が、まだ上手に話せるかぎり、私の代弁者となります。というのは高齢の体となっても精神が丈夫な大方は百姓とか僧侶であって、それにまさに青春の体のときに精神を格別昂揚させなかった者達で、殊に私の好きな僧侶達や隠者達です。ちょうど乞食や水夫、兵士達、要するに余り考えない人々が普通の寿命を越えてきたようなものです。悪魔の弁護士としては二重の没落の同時性というメランコリックな結論をまさに次の事情から導きます。つまりより大きな富や支柱を創り上げたように見える精神は、それだけ一層容易に肉体と共に沈み、破れるという事情です。高齢から死という話になると一体どう言い、結論づけたらいいでしょう。すでにすべては明白です。ただ付言できるのは、小説とか、最も頻繁には悲劇の中で、若い人間がその感情と共に途方もないことを呼吸して飲み込み、潮吹く鯨として吹き出しながら、その鼻で浮かぶ島々を倒す勢いで、その潮吹く鼻穴で諸太陽に降り注ぎ、万有に対する真の反抗を感じ、それを隠すこともしないでいながら、この潮吹く鯨の火山がこめかみに一本の編み物針を差し込まれると、あるいは茶さじ一杯の青酸を盛られると、突然波の中で静まり、沈んでしまうとき、自分はそのたびに笑い、あるいは馬鹿にしてきたということです。殊に紙上、あるいは紙上外の恋する男達はこのような雷神どもです。しかしもっと上手に、格別鯨の大言や噴射を用いずともこう言えます。どんなに温かい心であれ、どんなに敬虔な心であれ、どんなに強い精神であれ、もっとも哀れな一人の人間よりも肉体の傷を受けたら絶命が遅くなることはない、と。所謂肉体と精神の分離はレッシングの場合も鈍な悪口屋の場合と同様簡単です。花と咲く英雄の場合も、老衰した罪人の女の場合と同様簡単です」。

「だから」　ー　とヨゼーファは付け加えた　ー　「すぐに反抗しやすい人間の心にとって自分の脆さを眠りによって日々思い出すことはとても御利益のあることだわ」。

「そこで悪魔の弁護士にとって、すべてに鑑みて、結論を出す、つまり比喩で語ることは結構なことに思われます。君達がヴェルサイユの王宮に行って、周知のモランの仕掛け時計を覗き込み、協同してかみ合う歯車すべてを観察して、一つの歯でもそこから取り出したら全体の時計の進行が壊れる按配であり、そしてこれらの重力によって動かされている歯車がまた、進行全体の成果として棒で時刻を告げ、鳴らす一人の人形を突き出す様を御覧になり、　ー　更に若干の人工的副次的歯車が組鐘[カリヨン]まで奏し、この背後で飛び出てくるルイ十四世を、ちょうどヴィクトール広場に見られる具合に供するのであれば、君達はきっと、かの人形あるいはこのルイ王が進行仕掛け、指針仕掛け、打鐘仕掛けを支配しているとか、それどころか生き残るであろうとは思わないことでしょう。その人形とか国王は歯車が一つ止まってしまえば即刻停止してしまうのです。　ー　さて我々の工芸豊かな肉体はまさにモランの時計仕掛けであり、我々の現前している精神は飛び出てくるルイ大王で、ちょうどヴィクトール広場に見られる具合であります。そして不死への信仰というのはルイ大王が時計の歯車が止まった後も生き残ることを信ずることであります。これは我々すべての比喩時計に妥当して、そのうち何人かの者は詩人達のように真の玩具の時計であり、他の者は神学者達のようにカッコー時計、あるいはうるさい目覚まし時計であります」。　ーー　以上さし当たり悪魔の弁護士の言。

第三の細分割
不死と和解した眠りと夢、高齢

すべての諍う教会は今や立ち上がって、所謂小村でアレクサンダーに対する凱旋の教会に耳を傾けようとした。そのようにヨゼーファの静かな過去と未来に満ちた思い出のささやかな場所は呼ばれていた。ここで彼女の夫の意志に基づいて、彼女のすべての子供、ヘンリオン、アレクサンダー、ナンティルデ、それに亡くなった一人の子供が洗礼と聖餐式を受けていたからである。ヨゼーファは短い塔の付いた狭く低いその教会を感動なしには見られなかった。高齢と死についての会話のその日の午後、彼女は黙したそのやり方で何度か夫の手を握った。

私どもが小教会の横の休憩ベンチの上に座ったとき、私はこう切り出した。「私どもの至高の見解に対して暗く立ちはだかる睡眠、高齢、死のこの三つの難点は、肉体に対する魂の関係について調査するよう迫り、導くものです。これらは本来月による太陽の三つの食のように分類されます。眠りは部分日食、あるいは魂の食です。殊に夢によってまだ明るい部分を残すからそう言えます。高齢は金環日食で、その時月は中央にありながらただ円環の微光のみを残します。死あるいはしばらくの皆既日食は太陽全体を覆います。

私はまず眠りと夢について若干述べたいと思います。この二つとも肉体と私どもの希望に対する精神的関係のもっと明るい面を示しています。眠りそのものは死や没落の本来の像とはとても言えません。眠りは単に古代の民族や未開の民族にとって精神的生命の神殿の幕にすぎなかったのです。救いの神々や故人達が眠りの暗がりの中、人間どもからより多く離れた魂を訪ねたのです。いや北アメリカの未開人はそれどころか、魂は鈍重な連れは連れずに遠方へ旅すると信じています。眠りはどこでも生命の産婆で、播種機です。最も長く、最も深く、最も豊かな眠りを人間は誕生前に有します。(高齢ではますます短い、病弱な眠りを持つようなもので、高齢時は大地にとってもはや生命は少なくていいのです)、そしてまさに人間の九ヵ月の夏の眠りのときに、動物の六ヵ月、あるいはそれ以上の月の眠り同様に、存在の春を目指していて、すべての器官の中で最も精神的な器官、つまり脳は　ー　有機体の地球のこの天球儀は　ー　最も大きくなっていて、後の脳に比べて八対一の割合です。眠りではなく、ただ入眠だけが死と境を接しています」。　ー　「でも一言述べさせてください」とナンティルデが言った。「十分な違いがそこにはあるはずです。だって入眠は延ばせるけど、でも永眠は延ばせません。従って眠りにはもっと多くの生命が私どものために用立てられているに相違ありません。しかし眠りではなく、入眠だけが死と類似していると仰有る。感覚の暗黒化、動作の消滅、短い低温化、片言、いや世迷い言」。　ー　「でもこの死滅の後、すぐに新たな活性化が始まります。眠りそのものは逆に、すでに肉体の側面から見ても、単に上昇して行く、高められた生命であって、脈拍とか、消化、赤い頬、呼吸、それに最もよく眠りの　ー　朝の決算が全体に新たな、最新化された人間を証明しています。いつでも眠りは単に静かな蛹[サナギ]であって、その中で羽化の営繭がなされます。それ故最も強力な発展は最も長い眠りを必要とします。実際眠りこけている新生児は果たしてその眠りを得ていて、フーフェラント[(1)]によると二

十四時間起こしていると死んでしまうそうです。かくて昆虫界の蛹はその羽化に向かって眠ります。花の終わった後の植物は皆眠らずにいて、その小さな果実をもはや微睡みで覆うことはありません。ひょっとしたら微睡みは夜の冷たさに対する防衛であると同時に強壮薬かもしれません。それ故アメリカの植物は私どもの暖かい日中でも眠るのでしょう。冬眠する動物どもは、眠りが生命の単なる疲労と残滓であって、強壮化でないのであれば、冷たさの中まさに眠りで死んでしまうことでしょう」。

「だから」と騎兵大尉が口を挿んだ、「眠りは少なくとも慰めの意味で死の手本であろう」。

「このことは」と私は言った、「私どもの存続の種類について推測する際に将来はるかにもっと展開されることでしょう。私は今のところさし当たりちょっと磁気療法[催眠]の睡眠についても　ー　私どもの砂漠のこの説教師、第二世界の宣教師についても　ー　触れたいと思います。これは健康な体ではなく、壊れた体すら治し、新たに生命を吹き込む眠りです。ゲーテによれば[(2)]、すべての生命は単に表面の下で、皮膚と樹皮の下で、活動しているというのであれば、眠りはより神秘的なより深い生命力の最も美しい皮膚であり樹皮であります。

かくていわば半球の広大な墓地という睡眠者界についての最初の見解は今や静かな牧人の世界という見解に変わります。この世界で牧人は休み、フルートを吹く、つまり夢を見るのですが、その間にその家畜、つまり肉体は草を食み、生長するわけです。かくて影の中に休らう地球の半分はいわば和らげられた苦患、情熱の大きな子供部屋、揺り籠として我々の前に横たわっていて、次々に隣接する寝室が数千人の牧人小屋、修道院としてあります。この者達は微睡む前には荒れ狂ったり、嘆いたり、あるいは罪を犯したりした者達で、彼らと人生はしばらくの間ではあるが一つの休戦を結んだのであります。

さて睡眠が肉体の大いなる強化、発展であるとすれば、睡眠はその強化の間、魂の強化ともならなければなりません。これに対して夢の放恣ということで夢の制御しがたさという反論をする向きがあれば、まさにこの反論を一つの証拠以上のものと見なしましょう。まず機知豊かな明察、哲学に富んだ夢があり、殊に女性の場合、物語的関連に富んだ夢があります。機知に富んだ唯一の夢がありさえすれば、眠りによる放心という千もの無意味な夢からの結論を論駁できます　ー　いや磁気療法[催眠]の眠りでは、機知豊かな夢が例えば夢の中での過半を形成するなんていうものではなく（というのはこの夢の中では無意味な夢なんかないのであり）、目覚めている中での同様の思考の過半を形成するのです。

しかし寝室がベドラムの独房[ロンドンの精神病院]であるとしても、やはり一人の人間が周りの広大な、理性的に整理され住まわれている世界の中で自らの理性を失う方が、自分一人で築き、維持し、住まなければならない孤独な空虚な世界の中で理性を失うよりも不思議なものでありましょう。夢の中では精神は自らの人物の中で全く一人っきりで、一度に台本作家で　ー　俳優一座で　ー　道具方　ー　書き割り画家　ー　オーケストラ、最後に観客一同でなければならないのではないでしょうか。そのためには実際ベッドに持参する以上の分別が必要です。そこで、では、誰が夢を見ている者達の分別について狂っていると判断するのでしょう。目覚めている者達です。しかしまた私どもの正気の分別について、より高い正気が判断するとしたら、あるいは私どもの現世の正気から自らより明るく上方に目覚めるとしたら、まことに、私どもが私どもの錯誤や情熱を下方の夜と比べ

ずに、上方の未知の日中と比べるならば、自分達に対して夢の中での隷属と同じ意志を欠いた隷属を、つまり要領を得ない話し方、行為を咎めることでしょう。

「こうしたことすべてを」　ー　とアレックスは答えた　ー　「まさに大いに喜んで認めましょう。どんなに狂った夢でさえ、何も　ー　夢を見ないことよりも精神の独立性にもっと栄誉を与えます。しかしすべての精神的諸力が例のように毎日、しかもしばしば数時間停止するということ、夢のないかの魂の失神状態は、なお肉体の失神状態に勝っています、肉体の失神状態は決してすべての部分に及ぶことはないのですから」。

「私どもはいつでも夢を見ています」と私は言った、「精神的部分の完全な停止があれば、片方の死ということになって、それに結び付いた肉体的部分も後を追って死ぬことになりましょう。暗い夢の表象を後に忘れても、この存在が消えるわけではありません。実際透視女性達のどんなに明るい生き生きした表象でさえ、眠っている間のその行動までも含めて、思い出としては消えてしまいます」。

「しかし」　ー　とアレクサンダーは答えた　ー　「癲癇患者が、殊に強直症患者が考えや話の文を、その最中に発作で中断して、発作が治まると続けて、最後まで話すとき、これはどうなっているのです。明らかに数時間の発作の間に観念の仕事全体が止まっていたのです、その二つの表明された観念の間に第三の観念は生じなかったのですから」。

「その反論は果敢なものです」と私は言った、しかし大したものではありません。私どもの精神は、確かに夢の中では脳の観察の方で、目覚めては脳の芝居監督の方であり、夢の中では操作される側、目覚めては操作し、支配する側ですが、より昂進した脳と神経の転覆[癲癇]のとき、その不従順の自己支配のときには、単なる受容と傍観へと圧倒され、突然先の自らの、自らが支配者であり観客である内的外的世界から引き離されてしまいます。それ故この精神は強直症の霧の中である思考列を追うことになります。これは目覚めてからは、追われるかのように、健康な昼の明かりの中で、また先の中断された、全く別様に形成された観念列、外的世界に接続する観念列に席を譲るのです。逆に夢遊病者や夢想家、透視家は同様にしばしば或る夜の物語を次の夜にも続けて、昼間の世界の傍らに更に夜の第二世界を自由に妨げられずに展開させたものです。或る予定の時刻に目覚めるという力は、何らかの睡眠中も貫く精神的活動、例えば数える活動を前提としていないでしょうか」。

第四の細分割
肉体と精神の間の関係

「この件を根底の所で把握することにしましょう。と申しますのは夢、高齢、死によってなされた反論は、結局のところ肉体に対する魂の関係に帰着しますので、そこから考察、吟味されなければならないからです。　ー　肉体とは何でしょうか。本来の核となる人間でしょうか、それとも単に仮象の人間でしょうか。肉体は魂の温室、温床でしょうか、それとも植物そのもので、私ども外部の者には単に樹皮しか見えないのでしょうか。　ー　あるいはただ木製の蜜蜂巣箱にすぎず、その中でプシュケ[霊]はその幼虫を養い、蜜を作るのであって、それがなくても同様に良く戸外で飛び生存できるのでしょうか。体は現世

の存在の冬の蛹であって、これをより温かい季節のために死がプシュケ[霊]に対して壊してくれるのでしょうか。

パリの学問のフランス・アカデミーで審議しているのでなければ　ー　我々の精神、つまり我々の表象、意識、感受、意志は我々の肉体部分の天体力学[1]に他ならず、すべてを受け入れ統括するある特別な力を欠いているという古い陳腐な錯誤を有する者は少ないでありましょう。これは太陽を欠いた惑星組織であり、光のない反映でありましょう。非力学のこのような力学が発せられることになると、実のある自我は肉体的運動の一人の子供にされてしまうことになりましょう。しかしさし当たり、もっと深く立っている生命をそこから説明すべきでありましょう。虫や、いや植物の生命は個々の構成部分を支配し、結合し、形成していますが、しかしこれらの部分が不可分の生命を造っているのではありません。肉体外の血液のどんな化学的要素をもってしても、死んだ見せかけの血液の他には模倣できないようなものです。ただ生命だけが失われた肢体の新たな再生という奇蹟を行うのであって、例えば蝸牛では目さえ再生します。これは光学者の計算さえも、更には見えている人間の生命のない模倣をも上回る芸術品であります。　ー　生命は何らかの或る体の部分とかどこかの部分に存在するものではありません。それは粘液、脂身、血液、筋肉、骨の中にあります。滴虫類の粥、軟体動物の粘液、魚の冷たさ、鳥の温かさ、鯨の大きさ、群れる小動物の目に見えない微細な陽光の塵埃、こうしたものすべてが同様に快適に生命によって住まわれていて、また支配され、維持されています。　ー　苗床の大きさの温室にあらゆる種類の花や果樹の一つの庭全体となるよう種をまいてみれば、生命が同じ光素、熱素から、同様の大気、土壌から、肥料、湿気から、つまり同一のものから、香り、色合い、葉、果実の過剰に多様なものが生ずることでしょう。

従って精神的なものの機械工はすでにより低級な生命であれ、精神の個々の部分の子孫にはできず、むしろその生命の息子、召使いである精神全体の子孫にすらできません。機械工はそれでは精神をどのように取り扱って、この精神は少なくとも空高く上昇した生命と見なさなければならないものですが、この精神に、下賤な、つまり肉体的な系統樹を押しつけるつもりでしょうか。

機械工は、十全なる物質主義者として、ただ肉体だけをすべての人間の役割の舞台、俳優として用いることができますので、まさに予定調和のライプニッツ的仮説の肉体的半分を仮定せざるを得ず、私どもの人生全体を一つの　ー　全能の時計工によって巻かれた　ー　七十年から八十年保つ感受仕掛け、表象仕掛け、動力仕掛けの中に置かなければなりません。その仕掛けの内部の歯車が（そもそも人が仕掛けをなしたら）世界時計の大きな歯車とかみ合うことになるのです。表象の運転仕掛け全体は演説の鳴鐘仕掛け同様、勿論、意識と呼ばれる何ものかによって何故かしら随伴されることになります。しかし機械工はこの何ものかを同様に肉体的歯車の下に数え入れなければなりません、ただそれを小歯車としてすべての歯車に随伴させるか、転回させなければならないのです。或る精神的力による何らかの介入、審判、制止、秩序付けを、一回だけの神的力、あるいは何らかの全能的力は例外にして、唯物主義者の機械工は全く拒否しなければならないのです。

このような不器用な、頼りない、一本足の予定調和では、精神の機械工はさして上手くいかず、それ故二本足でもっと上手く立とうとして、この機械工は或る魂に手を出し、この魂を振り子、あるいは動揺として、肉体の歯車仕掛けと結び付けます。このようにして

不均質な諸力間で、快適にあちこち動く王手、あるいは必勝の手を得ます。肉体的力は精神的力を定め、育てて、精神的力は自らの力と肉体の力を自覚して、多くの力を見守り、若干整えます。

例えば運動についての表象は運動そのものとは同一ではあり得ないけれども、この機械工にとっては、物質は単に運動によってのみ活動するので、説明には脳内の運動しか残っていません、あるいはむしろ精神活動の停止です。そのために繊維とか　ー　緊張　ー　脳内印象　ー　脳内像　ー　水滴　ー　電気　ー　神経エーテル、最後には神経精神あるいは神経霊が選ばれ　ー　そしてこうしたすべての物質から（しかし専ら神経霊からで、この名前がすでに精神の中間インク、半陰影を眩惑させています）　ー　まさに正当な魔術的薄明かりが得られていて、その中で、魔術の煙の中で肉体や像を霊として出現させる手品師とは反対に、裏返しの魔術で霊を肉体として出現させるのです。

感受や表象に対してすら　ー　いずれにせよ意識や意志については無論のことで　ー　機械工は脳内に何か随伴するものを作り出せず､いわんや相当するものを作り出せません。というのは所謂印象や痕跡、像、緊張というものは単に比喩的状態として魂の中に存在するのであって、本来の状態として脳や神経の中に有るのではないからです。脳は脊髄が段々に巻き上げた神経の糸だまです。この最も濃い霧はどんな薄い霧もそうであるように、卵白、脂じみた物質、少量の塩、多くの水から成り立っています。そもそも一本の神経は糸から編まれていて、糸は繊維から紡がれ、繊維は髄の小球の並んだものです。さて小球から形成された、あるいは丸められた脳球は、地球とは違い、地球は単に三分の二が海ですが､五分の四の水からできています[*1]｡いやガルは水頭にしばしば四ポンドの水が（従ってほぼ頭の重さです）精神的諸力を弱めることなくたまっているのを見つけました。むしろ精神的諸力が先んじて脳が発展するのです。さてこの水の小球、髄の小球にどうしたら緊張や印象あるいは像を形成させることができましょう。仮にただ感覚世界の外的影響のみが言及されるだけで、いわんや感覚世界の内的影響は言及されないのであれば、どうしてできましょう。この感覚の印象は脳の中で、その神経あるいは神経ペアの末端に圧迫するようにそして平にするように次々と落ちかかる必要があるのではないでしょうか。そもそもどのような湿気あるいは肉体性が見通しがたいほど続く分割された豊かな感覚世界、表象世界を捉え、宿すことができるのでしょう。　ー　両世界に仕えるべき小さな脳と、そのことは行わない脊髄と、小さな脳を思い描く神経節の間に解剖上違いはありません。更にゼメリング[(2)]の観察によって決定しているのは、三歳の人間の脳はすでに大人の脳と同じほどの大きさで、脳での多年にわたる宝の蓄積は全く言うに及ばないということです。普通脳の大きさによって分別の大きさは評価されるからで、もっとも鼠や雀は比例的に我々よりも大きな脳を有し、象は両者よりも小さな脳を有することになるのですが。

ー　全くもって様々に異なる精神的人間の諸脳の中では、未開人や、芸術家、数学者、哲学者、兵士、行為的人間、記憶の達人達の間に見られるような大きな差異をほんの小さな真珠文字でも告げるようなごく些細なことも存在しないし、いわんや浮き彫りの文字で告げるようなものは存在しないのです。　ー　なぜ脳の部分の二重化は感受像と記憶像の二重化として現れず、連弾として単に諸音色の単一さを与えているのでしょう。　ー　一面では二重化がほとんど見られないように、他面では縮小化もほとんど見られません。しかし数ロート何気に縮小すると、脳の重さは少ないけれども、殊に全体の球が一般的に交

錯しかみ合っているために、そして交互の関連が微妙なために、全く致命的なことと分かり、すべての記憶野がやられてしまわざるを得ないことになります。すべての感情や情熱は　ー　すでにプラトンや最良の生理学者達によって知られているように　ー　専ら心の中で働きます。愛や喜びや悲しみ等々です。上の脳自身はそれらを何も感知しないのですが、一方心臓は、脳の中で生ずる思考や感受の際の緊張に対して何らの肉体的関与も明らかにしません。というのは例えばどんな些細な情動も心臓疾患者の害になりますが、どんなに深い精神的緊張も害とはなりません。なぜ頭の中での思考の働きに対するように心臓の中のすべての感情の働きに対して特定の肉体的痕跡を当てはめず､感動やメランコリー、感傷の肉体的性質や印象、刻印を四つの心室の中に前提しないのでしょう。なぜ、もっと素晴らしいことですが、脳を思考の道具としているように、脊髄を脳の父としないのでしょう。

更に、それもまことに柔軟なものですが、精神的プロテウス[変化自在の人]を真似て変わる肉体的プロテウスといったものが残っています。つまり神経液で、これはより繊細に神経精神、神経エーテルに至るまでに蒸留されます。しかし本来はもっと逆転させるのがいいでしょう。より粗く、より濃い湿気の方がより薄いワインの酒精よりも精神への感受性の小舟をより容易に運ぶことでしょう。一度電気的流れや細流に多年の記憶の像の宝を刻印させて、その流れが像を長年保存するようにさせることです。あるいはピアノ演奏家の千もの小さな指の跳ねのためにその流れを導き、砕くことです。あるいはこの水球、ないしエーテル小球を転がしながら継続する精神的動きに合わせて、空想の像や概念等々に合わせて分割することです。　ーー　まことに純然たる肉体そのものとか純然たる精神は私にとって謎を解くために両者を結び付けることよりも更に透明で明るい謎であります｣。

「私も」とアレックスは答えた、「その件では、剃髪して聖なる地に立っているかのように、ほとんど分かりません。しかし次のことはこの件では認めなければなりません。つまり人は神経を結紮できて､かくて実際上方への感受性の流れを断ち切ることができます、ちょうど下方への意志と動きの作用の流れを断ち切ることができるようなものです。ここでは明らかに管、井戸の管、精神の水道が存在します｣。

「私はそれどころか」と私は言った、「この管装置を更に百倍化できます。脳は切り込まれても或る深さまでは痛みを感じず、スプーンで汲み取っても気を失うことがありませんが、脳を強く押すと、無感覚になり眠ります。脳は巻き付いた神経の束に他ならないので、眠り込むことは神経精神管の圧迫と閉鎖ということで説明されましょう。勿論この説明には強い反論が想定されます、つまり神経の小枝化（交互連絡）は血管の類似の小枝化同様に互いに上手く常に脇道を用意していて、例えば血液は数時間横になったり座ったりしていても、従って血管が押しつぶされていても、空いた側面の血管を見いだすというものです。かくて確かに、圧迫や結紮で感受性が中断されるということは、神経内で現象の奇跡を行うという電気的流体の仮説[3]を全く無効にしてしまいます。液体であれば少なくとも単に窮屈なものとする圧迫には耐えて出てくるでしょうから。その際すべての神経は多重に絶えず絡み合い分かれていまして、それで電気的流体であれば、それが常時作用しようと刺激されて作用しようと、稲光に似て直進して一つだけの作用をすることはないでしょう。例えばそれで小指を動かそうと思う意志は、小指の代わりに同様に首や皮膚、肩を動かすに違いないでしょう、これらの部分、それにもっと多くの部分の神経が腕で交錯

しているからです。いや所謂神経精神では電気的火花の通常の力すら有しません、電気的火花はそれがどう作動しようとその力を失うことはないのですが、神経精神は流れ出て尽きてしまいます」。

「それになぜ」　ー　と今やカールゾンが口を挿んだ、「脳内の表象や感受に伴う肉体的痕跡を跡付けできたのか、つまり跡付けようとしてきたのか。なぜまた意志の働き出そうとする世界、徳操や悪徳、美的な喜びや苦しみ、精神を数年間酔わせてきている感情や努力に対して、肉体の岸辺や苗床を見いだそうとしなかったのか。　ー　しかし私は、例えば狂人と賢者の脳の間に、悪漢と善人の脳の間に違いを求め、仮定したという話を聞いたことがない。かくてまさしく半人前の精神とか心そのものの人もその基調音の肉体的解明なしに留まっていることになろう」。　ー

「いやまあそれは」と笑いながらアレックスが言った、「話が大きすぎます。証明されているのは　ー　それも十分に証明されているのは　ー　脳と神経は、いずれにせよ計量できない（比較できない）量として精神的諸活動との方程式はいずれも解けずに、無数のこれらの活動を受け入れ写し出すことができないということです。しかしながら魂と体の間の結び付きはいずれも認識され甘受されています。その結び付きはどこに存在するのでしょう。どのように外界と感覚器官は結び付いて自我に作用しているのでしょう」。

「私の答はこうです。私どもが精神にいつも対置する物質とは本来何でしょう。それは私どもが単に私どもの感覚を通じて知る現象であるが、しかし逆に私どもがお蔭で私どもの感覚を知ることになる現象ではありません。私どもにただ直接知られているのは一つの力で、私どもの精神的力です。物質の場合、それなくしては物質は存在できないし作用できない諸力を前提せざるを得ませんが、しかしその諸力は組成とか現象にその支えを有せず、真の究極の構成要素にその支えを有するはずです。私どもには単に一つの力がそれも直接に知られていますが、考え、欲し、行動する私どもの固有の力です。というのは私どもの感覚は確かに運動や抵抗、引力、重力（重力は一つの変更できない方向に従っています）、不透過性を出現させることができますが、しかし総体としてすべてのこれらの感覚的現象は構成要素の諸力を私どもに語っていませんし、そもそも力を語っていません。さて物質の内部に達しますと、物質の仮象は解体し、一つの諸力団体に解体します。私どもはどうしても絶対的に死んだものを考えることができないし、それに死せる力は（阻害された力と違い）死せる生命のようなもので、私どもは単に精神的力だけを知っており、かくて外見上の物体界は生きた下位魂の世界となり、一つの（ライプニッツ的）モナド組織となります。要するにすべてが精神であり、単に違いのある精神です。ただライプニッツがその予定調和の中で一つの魂あるいはモナドの生来の糸だまから全世界と歴史を巻き戻し合成させ、外部からは最小の糸一本も紡いで使っていないという点にだけにライプニッツの本領があるとはいえません。というのは実際とてつもない魂の海は交互に作用しながらかみ合い押し合っているからです、様々な方向と限定を伴っていますが。

魂の本来の体は神経樹で、その王冠は椰子の王冠のように、脳で、それは植物の最も貴重なものを含んでいて、そして王冠へと下部で分離した脊髄（馬の尾ですが）から脊髄幹としてその神経の枝と共に昇ってきます。残りの体は生命と認識のこの本当の樹の樹皮にすぎず、温床にすぎず、苔にすぎません。魂はこの樹の精ですが、先導精神［spiritus rector］が植物の隅々に住むようにこの樹に住みます。神経は本来の内部の人間を形成して、これ

がさながら縁者、仲介者として自我に間近に立っていて、自我に見知らぬ外部世界を明らかにし、伝え、周知させます。一方の側には神経有機体が更に深くその自我の下にあるように、神経有機体の更に深いところに外部世界と、それに有機体の世界も、それが神経有機体の一部を構成していない限りあります。かくてまた神経有機体は魂の自我に十分に近くて接近していて、外部世界を自我に導きます。

有機体あるいは生命が無機物あるいは死物と最も強く分離する点は、有機物あるいは生命はただ不均質な素材を一つの法則、一つの形式の下に強いて、この法則にまたすべての新たな法則が従わなければならないのですが、一方無機物は均質な部分、例えば空気、大地、水、電気、金属、石が大きな塊となって地球を満たしています。それ故無機物はすべての分離や分割の後、無傷に破壊されずに、一つの小さな全体、それは見せかけであれ全体として残ります。それ故腐敗によって解き放たれた有機物は再び全体的に近いもの、水とか空気、大地等々に素早く戻ります。熱とか光、要するに塊の無形態のものは生命によって形式へと変換され固定化されます。さて感覚器官として外界と対置する有機物は、外界とは単に流体を通じて直接、接します。目は光によって、耳は空気によって、臭いの神経はガスによって、味覚は水と水の中に溶けたものによって、知覚は熱の物質によって接します。ただ触覚は至近の感覚として、一つの、ひょっとしたら説明されるべき例外となります。というのは触覚は味覚同様、すべての時間の間隔なしには感受できないという特殊な点を有すからで、あたかも味覚同様により深い湿気を通じて初めて作用するようなものです。

さて感覚神経のすべての構成は余所なるもの敵対するものとしての外部にただ､舌乳頭、触覚器官に至るまでもが向き合っています。これに対して視神経、聴神経等々はその穴から内部の方へ世界迷宮の目立たない糸として走っていて、色や素材に関して互いに同様に脳内へ入り、多くの神経が目に見えない末端へと散って行きます。それでもこれらの薄い粥状末端や糸が粥状脳内で精神に対してラファエロの絵画やモーツァルトの音楽を、要するに感覚の宇宙、あるいは外的創造物を写し出します。というのは精神は例えば目の網膜に巣くっているといったものではないとか、目よりももっと技巧的に造られた耳の装飾的神経の上にくっついていて、音の世界に耳を傾けているのではないということは、単に目や耳の神経の末端が潰され、傷つけられた場合も、その先端部分がそうされた場合同様に見えなくなり聞こえなくなることから容易に証明されるからです。そもそも単に外部に対してのみ差異が見られます。人間の内部ではすべて一様で簡単です。脳と脊髄と神経は格別の制服なしに魂の許で様々の仕事を行い、魂は空想したり、抽象したり、情熱を抱いたり、筋肉を動かしたりします。かくて肉体の中でほど困ったときの多くの友好的な諸代理はいません。そして体の中のほとんどすべてが分枝化です、単に血管だけがそうではありません。動脈の脈拍は心臓の鼓動の代わりとなり、肺葉は消滅した翼の仕事をし、大静脈は右心室の代理をし、大動脈は左心室の代理をします。そしてまことに分泌管と腺[*2]は病気のとき互いに代理人、代弁人となります。

外部世界が低い魂の世界としてより高い魂の世界としての神経世界を通じて私どもの自我に同化され付与されるとき、運動や印象、肉体の痕跡が自我の内的外的宇宙に合致しなければならないかのような疑問は自ずと消えます。いずれにせよすべての組織の中で少なくとも筋肉に対する魂の作用に随伴する作用の難しさは、同等のものに対する同等のもの

の関係によって少なくとも部分的には減少します。しかしそもそも作用は、自身に対する自我の作用でさえ説明しがたいものではないでしょうか。外部の精神的霊力による感受性の励起は内部の霊力による思考の励起よりも不思議なものでしょうか。一体思考は互いにどのように作用し、ある考えが別の考えをどのように創造し、強化しているのでしょう。催眠術師の他人の魂でさえその思念を結局以前の肉欲的な迂回を経ずに透視女性の魂に侵入させて行きます、長い中間列を経るのではありません。普通の健康な生活では人々[魂]は互いに短絡した出入りは閉め出すのですが。

すでに証明されたように、脳の外的宇宙の中では運動や印象、肉体の痕跡が自我の内的宇宙に合致することがないのであれば、そしてそもそも機械的手段で見ること聞くこと等々が可能となるのでなければ[*3]、有機物の下位魂の世界は上位魂、あるいは支配のモナドに対して単に精神的法則に従って作用し、かくて無機物を媒介します。というのは自我の中ほどにかくも多くの場所が　ー　つまり測りきれないほどの場所が、　ー　かくも多くの多様性が、かくも多くの、矛盾や不可解の容認が見られるところはないからです。肉体的なものそのものとか無機物はその逆と分かります。例えば金粉は永遠に同じ重さ、密度であり、内的状態は変わらず、練習はできません。ただ有機物と精神だけが習慣をやめたり身につけたりでき、練習できます。精神は断続的に作用し、肉体は間断なく作用します。

ヘルバルトとか他の人々は自我に魂の能力の差異を認めていません。しかし単純な生命とか一つの力の場合に諸状態の違いがより多く考えられましょうか。それに至高の生命の単純さの中にはすべての諸力や時代のすべての測りがたいものが存在するのではないでしょうか。これに比すれば宇宙は有限なものに消えてしまいます。

ただ自我の中にのみ対立物が、統一と結合の傍らに住んでいて、他方外界はただ自我の中で初めて統一の外観を呈します。そして第二に多様性と差異を呈しますが、これは自我が外部に観察し、自ら内部に所有しているものです。しかし私どもは自我の諸国の豊かさについて、余りに小さな窮屈な測定をしてしまいますが、これは無意識の巨大な帝国、この真の内的アフリカを除外してしまうからです。記憶の広大な一杯の球体のうち各瞬間に精神の目に飛び込んでくるのはいつも単に若干の照らし出された山頂のみで、残りの世界はその影の中に留まっています。ベッティガー[(5)]のような学者は、自分の積み重ねられた宝物、言語の宝から一秒ごとに一つの外来語や一つの事実、一つの観念を眼前に飛来させなければならないということになったら、ひょっとしたら数年を要することでしょう。

ー　しかしわずかな三日月の形で光って昇る私どもの精神的月は更に天の月同様、私どもの意識に上がってこない半球を有しています。つまり神経による諸筋肉支配の仕事です。

思わず知らずの、従って不断の、それだけに不変の運動を、例えば心臓の動き等々を精神の仕事として見なしたくないのであれば、深いシュタールは仮説の中でそう見なしているのですが、それでもなお人間の場合、いや動物の場合ですら、千もの歩行、跳躍、回転、羽ばたき、指のタッチが残っています。これらは最初、意志、意識、計算と共に習得され遂行されたものですが、後には協力する精神の働きなしに生ずる外観を呈するものです。しかしこれは精神の協同なしには不可能なものです。というのは肉体的なものそのものは何も学習せず、保持しないからです。どのような計算された動きも、跳躍でさえ、個々の場合動物であっても計算を要するということを更に割り引いてもそう言えます。

更に二つの重要な現象が精神世界では生じていて、私どもは精神の宝物とその宝庫を意識の表面に露呈しているものによってではなく、目に見えない深みに安らっているものによって評価すべきであることを示しています。我々の精神的根毛は我々の小枝よりもはるかに広く、幅広く、長く生じています。ただ一つの例を挙げます。人間と世界についての最も繊細な最新の知見は何の証明もなしに表明されます。それでいて読者はその知見を正しいものと、そしてそれ故証明されたものと見なします。かくて証明は読者の中に前もって出来上がっていたに違いないのです。つまり諸経験の一連の暗い列です。かくて私ども自身の知見の場合も同じで、一事例あれば一つの知見に十分で、その知見が知らないうちに千もの先の事例を包含します。かくてしばしば一つの黙した全生涯が一人の詩人の不思議な言葉で表明され、かくてそれ自身語り続けます。　ー　かくて人々は多くの主張が支持できないことを生き生きと感じ、その主張は少しばかり触れさえすれば瓦解するであろうことを確定的なことと知っています。しかし人々はそのままにしておき、かくて論駁するために必ずしも吟味する必要はありません。

さて私は一つの謎について話します。それは大抵の者が大きな謎とは見なさないのですが、解き方がまずく、それに私ども自身に別の謎を解明してくれるものです、つまり本能という謎です。本能の普通の解読では　ー　これは音楽的な通奏低音化ですらないが　ー　或る種の生命の芸術作品のための技巧的四肢構造に本能の眼目を見ており、これが動物の魂にその作品を仕上げるために或る欲求を通じて刺激を与え、励起し、定めるとされます。かくて例えばダーウィンによれば鳥どもは胸の熱さのために、涼しさを求めて卵の上に座ることになります。そして胸に乳が満ちてきて哺乳動物は乳を飲ませます。しかし一体本能にとって肉体の中で仕事素材、仕事道具より他の何が用意されていましょうか、例えば蜘蛛の場合、糸の素材と蜘蛛の足を含む糸の分泌腺の他の何がありましょうか。しかしそれでは同心円や芯を同じくする多角形の幾何学的技法はほんの少しも付与されません。紡績機は精神的に測定する織工なしに、織る場所に応じて円の拡大や変更を行い、時に応じて改善を行う機械となりうるでしょうか。仕事道具だけではまだ職人とは言えず、言語器官ではまだ言語は生じません。

防衛術にかけても保育術にかけても捕獲術にかけても愛する全能の母がかくも合成された本能の営みを発揮するのは孵化を維持するときの小さな母親達の場合の他にありません。まさに最小の最も見栄えのしない動物ども、つまり昆虫は、数の少ない雛を有する高度の大きな動物どもに比べて最大の育て上げる芸術家です。蝶の世界、甲虫の世界の最大の部分は自分達を飛び越えて行き、本能の遺言の一つの奇蹟を行い、それから没落しながら大地に沈みます。ダーウィンや他の学者ならばまた小鳥たちの場合のように卵や孵化の衝動や刺激で両親的なものを動機付けようとするでしょうが、しかしまさに五つの昆虫の民が彼らに攻撃します。つまり蜂や雀蜂、円花蜂、蟻、白蟻で、そして彼らを圧倒します。即ち両親が若い[雛の]子孫を育てるのではなく、単に性を欠いた子供のいない蜂や蟻が育てるのです。さて私に仕事蟻の神経や血管、筋肉の中に性の欠如以外の何らかの違い、彼らの時や所、苦労に応じて合成され交代して行く仕事を説明する違い、彼らの造営、彼らの蛹の日光浴、彼らの莢剥ぎ、あるいは産婆の仕事、新生児への餌やりから飛散遁走に至るまでを説明する違いを挙げて欲しいものです。まさにこのことが性の欠如した蜂、働き蜂の養育術、営巣術に相当するものでして、これらの蜂は単にプラトニックな愛を抱いて

女王蜂に熱く寄り添い、（彼ら自身雌でないときには）報われぬまま怠惰な雄蜂に餌を与え、自分達にはまだ全く未知の孵化という遠くの将来のために、器官の刺激に籠絡されずに、揺り籠や揺り籠の覆い、パンや蜜を用意し、自分達の生命の短い飛行の日々を犠牲にするのです。　ー　ただちょっと更に次の点を触れておきますが、例えば小鳥の場合雄は自由に、孵化の衝動や抱卵の衝動を抱かずに、最も楽しい季節というのに自ら営巣の囚人へと志願して、営巣とベッドメーキングの主婦に対して忠実に手仕事を手伝うのです。更にこう言えます。つまり活発な、力強い、歌う雄が自らの欲求なしに、最も温かい素晴らしい時期に（或る種の民族の男達よりも全く気苦労の多いことですが）雛のベッドを守るのです。最後に燕を観察してください。燕はすでに住まいとして穴居人[氷河期]の穴を得ているのに、揺り籠の前のベッドより先に雛の部屋を作るのです、それも何らかの子孫を予感するよりも前のことで、すべての鳥の流儀から奇妙に外れています。汚れた、もっと渉鳥に見られる自然元素をゆっくりと一緒に一口ずつ引きずってきて　ー　二つの嘴で同時に勝手に半円形を作ります、これは蜂のより簡単な蜜房の場合とは違って隣接のものが設計の助けとなるのではありません　ー　それに狭い、大きすぎない開口部があり、これは評価すべきです。壁造りのこのロッジの仕事は、壁の背後でのフリーメーソンの仕事よりもより高い、しかしより神秘的な仕事です。

しかし私はこうした比較的易しい場合の疑問に対しては留まろうとすら思いません　ー　そもそも他の動物達の巧みな技のすべての広まっている備蓄に関して疑問を呈しようとは思いません。ただ私が問いたいのは、神経や血管や筋肉のどこに、要するに全体の肉体組織のどこに有機的強制装置、技法セットがあるのか、何を通じて個々の鳥はその巣のように区別されるのか、あるいはそれどころか蜂や蟻はその三重の生活様式のように互いに異なるのかということです。本能の最高級はまさに最も小さな、最も移ろいやすい動物に、つまり昆虫に出現します。これは心臓や血液、循環すら有せず、神経の代わりに単に二本の厚い、小結節の付いた糸を有するのみで、脳の代わりに単にこれらの糸が結び付いている二つの結節を有するのみです。しかし一体どこに本能は座して支配しているのでしょう。本能は多数の中では探してもむなしいので、単に単一のものとして残っています。要するに動物の魂で、これはこれまで単に受難の傍観者、駆り立てる機械により共に駆り立てられた機械と見なされてきたものです。勿論いかなる方法で原初の機械工が一つの精神的力の中における未来の歯車装置を設置し、微小な点においてまで不変の展開となるまでに巻き上げたのか、これは単に一つの不可解でありますが、精神の中ではこうした不可解なものはいずれにせよ一度ならず見られるものです。しかしながら一つの行動する未来の長い連なりという不可解さほどに大きなものではなくて、あたかも一つの魂ではそれを把握できないかのように思われます。と申しますのは、いやはや仰天するほどに一つの精神が装置や法則、行動、観念の一切を蔵しているからです。それでも精神はその単純さの中に広大な過去世界を受け入れられるのであれば、同様に自分の中に将来の世界をすでに保っていて、自分が生み出す将来の世界を維持できないはずがありません。　ー　しかしもう一つの不可解な点、あるいは一つの夜が私どもにとって残っています　ー　それはいずれにせよ単に夜や薄明かりの間に交代させているものですが、　ー　どのようにして一つの精神的力あるいは魂に、時、所に応じて発展する不変の表象列を創造して植え込むことができるかという点です。しかし思考を創造する魂はそもそも一つの太陽であって、その太陽

の底は、太陽の上にある光の雲のために、覗き込むことができないのではないでしょうか。私どもは工房そのもので働いているので、工房の中からのみ見ることができて、工房の中を見ることはできないのです。全く間違って私どもは肉体世界の粗野な厚い尺度を、肉体世界では創造ではなく、単に古いものの継続と混入しか生じないのに、本来の意味で創造がなされる魂の世界に当てはめます。魂の世界では新しいものが創造されます。それはたとえどんなに早く意志や思考として飛び来たり飛び去ろうとも、創造されるのです。まだ誰も、ヘルバルトでさえもが、中断できない表象の出現と飛翔、それと表象が生まれる際に合理的な序列を強いている一つの意志への表象の依存との間の不可解な同盟に関して、強引なことをしないでは仲介できなかったのです。というのはこの同盟なしには誰も瞑想し、案出することを企てることはできないであろうからです。しかし最も強烈にこの不思議は芸術家の中で生じ、芸術家の中では作曲家の中で生じます。モーツァルトほどの人であればハーモニーとその拡大、楽器の伴奏は計算できるでしょう。それは一つの同時のものとして測定され比較され得るからです。しかしメロディーは多面的な自由な後続列として新たな見知らぬ形姿で感受性の深みから浮かび上がってきて、また私どもの感受性の深みへ下がり、黙していたものを目覚めさせます。モーツァルトは、偉大な出来事や偉大な詩人達、偉大な情熱の広大な深淵全体を知らずにいて、要するに分別のこの子供は単に自分の内部にのみ耳を傾け、そしてその中に魔笛を聞き取ります。崇高なもの、感動的なもの、情熱的なもの、即ち音色の言葉はすべてまことに千もの魂の中から語られています。かくて作曲家はもっと思慮深く創作する詩人よりもはるかに強力な意味で霊感を感じ取ります。

十分でしょう。私どもには肉体世界の傍らに更に不思議な魂の世界が開かれています。勿論その深みの上に私どもの測鉛はただ漂いながら懸かっていて、固定されていません。ただ不可解なものばかりが、先の整頓者であり、先に整頓された者であるからで、受胎し産み出す充実であり、最終目的に従った創造が（これは極めて長い遅延の後、いつかは生じなければならないもので）精神的単純な力の中で共に生じます。本能に従った行動から人間的な観念の創造に至るものです。　ー　ここで私に対してある重要な反論ができると思われ、こう言われることでしょう。肉体と魂の他に第三のものがある、これがこの二つよりももっと大きな不思議をなすのである。つまり生命力である、と。というのは体系や音色の世界、燕の巣は、切り取られた蝸牛の目よりも簡単にできるからであり、それにむしろ根源的な器そのものよりも、どんな肢体よりも簡単にできよう。だってすべての動物的人間的な不思議な作品は一つの有機的な肉体、互いに戦いつつ互いに助け合う諸力の諸迷宮で一杯の迷宮、動物的動きに満ちた一つの宇宙に比べれば何ほどのものであろう。これに比べれば、天体の天文学的動きは単に簡単な計算の課題にすぎず、この一つの宇宙はごく微小なものに至るまで計算された時打懐中時計、秒針付き時計であり、これは自ら巻き上げ、壊れた歯車を自ら直すものである。この肉体を創造し維持するものは生命の他にあろうか、と反論されましょう。　ー　しかし反論そのものが私の命題の立派な拡大であります。というのはこの生命あるいは活性化は唯一の一般的な不分割の力となろうかということになるからです。つまり引力や温かさのようにすべての生物に行きわたり、得体のしれないやり方で制限し個別化する力、かつてスピノザの神がそう表現されたように、様々な動物の体に分散する力となろうか、ここでは同時にポリープを再生し、あちらでは離

れた蟹の鋏を、あるいは山椒魚の下腿を、あるいは傷ついた肉体を再生する力となろうかという疑問が生ずるのです。しかし何のためにある種の再生なのでしょう。生命はすべての肉体の産出、維持に心を砕いているというのに。同じ分離されない力が同時に飛散する滴虫類では無技巧に、長命の人間の体では技巧豊かに形成するよう出現することが考えられましょうか。

すべての生命を体と魂の間の第三の生物として仮定するならば、[その生物にとって]天国も冥府も、いや考えまでもが見いだせないような[*4]新しい生物の一つの雲塊を得ることになりましょう。　一　しかしそれではこの有機的に形成し維持する生命力、その捉え難い不思議が明瞭に日々私どもの前で、また私どもの中で絶えず展開されている生命力は誰のせいにしたらよくて、誰が体現しているのでしょう。明らかに電気的、ガルヴァーニ的あるいはその他の非有機的力による交錯、渦巻き、かき混ぜのせいではありません。この力は全体的有機的形成を前提しなければ、それを利用し、活性化できないでしょう。同じように体のそれ自体非有機的な部分でもありません、これがまさに生命力を一つの有機的全体へと制御し、調和させ、友好的なものにしているでしょうから。従って、生命力の滞在と王座のために残っているのは魂そのものの中の無意識の大きな領域だけです。誰も、ハラーのように、私どもの意識にとってほとんど捉えがたい例の分別、肉体の技巧的構築、技巧的仕事における分別を魂とは別個のものと考えて欲しくはないからです。ハラーはすべての不思議な作品を有する例の分別を或る未知の盲目の意識のないもの、生命と呼ばれるもののせいにせざるを得ないでいるのです。ハラーが神性へと飛躍して、動物界のすべての瞬間的動きのためのすべての糸を上の神性に固定しようと欲しないのであればの話ですが」。

私は、私どもの精神の現在の疑問に最も接していてそれに答えるものについて取り出すことをやめた。というのは生命そのものについて、地下の暗い植物界への生命の沈下について、滴虫類への生命の飛散について、しかし最も主要には生命が自ら始めるときの不思議について、またそれが倍加するときの不思議について調査するのは別の箇所でもっと長く始めるべきであったからである。しかし多くの者は無意識の世界が私によって開示されるのを興味深く見ていた。騎兵大尉は言った。「自分は確かに多くの人々のすべての見解や知識を追って、その人々の心のすべての小枝や根の微細な部分まで辿っていけても、それから先に何も見いだせないときとても心苦しい厭な思いがしたものだ」と、そして続けた。「或る種の人間の許では開発された魂の全体像を越えて露わになった空虚さや困窮の境目に至るまで見えてしまうものだ。いやしばしば広大な改善の長い眺望の慰めが得られないときには、同じような理由で耐えられない思いがするものだ。しかし貴方の無意識の世界、これは同時にどの人間精神もが所有して、支配している根拠付けられないもの、測りがたいものの世界であって、困窮している者を豊かにし、境目を目に見えない遠くへ保って行きます」。　一一　「私にとって」とアレックスは答えた、「無意識の世界は害とはなりません、[かがんだ]幾多の厭な謙虚さのときに、さながら目に見えぬまま精神的商品棚を全体背負っているけれど、結局はいつか前方の腹に回せることになって真っ直ぐ立てるわけですから」。

「真面目な話、どうしてできないことがありましょう」と私は言った、「ただ思慮そのものであって、何も隠されたもののない[*5]、自分自身ですら隠されたものでない無限な

者に至るまで、意識は無数の段階をすばやく登って行き、それで賢者にとって、未開人には深く隠された内面の根拠や深淵の全体が輝いて横たわっているのです」。

「それって」とゼリーナは言った、「私どもの魂のこの覆われた豊かさというのは慰めの多い考えではないかしら。私どもは無意識のうちに神様をひょっとしたら自覚しているよりももっと心から愛しているかもしれないし、また私どもは意識して外部世界に身をゆだねているけれども、第二世界に対する静かな本能が私どもの中で働くよう期待できないものでしょうか。　ー　ひょっとしたら、それ故に得体のしれない多くの感動や多くの敬虔、多くの内的な迅速な喜びが生じているのかもしれません。すべての隣人に、見栄えのしない隣人であっても、神様のみぞ知り給うものに敬意を払わなければならないというのは何と素敵なことでしょう」。

結局私は私の陳述を中断せざるを得なかった。まさに中断が人間にとって最も難しいとき、つまりその最中のときのことで、誰もが哲学するときや、音楽的空想に耽るときにはその最中に陥るものである。菩提樹のベンチを有する小村ももっと脇に外れて見えるようになって、崇高なヴェッターホルンが間近に見えた。「長い一日よりも長い調査の方がしのぎやすい」とヴィルヘルミ男爵が言った。　ー

金色に光る夕陽の下、熱を帯びた一行とともに上の方に、最初の稲妻に追われた夕方よりも豊かな気持ちで私は着いた。周りの世界は穏やかで、木々は震えることなく天のエーテルを吸い込んでいて、そのエーテルの中には木々に襲いかかるよう待ち構えている雷は見られなかった。小庭園も、塔の梯子段も子供らしく咲きそろって、太陽にそのすべての小さな色彩とともに微笑みかけていた。目は、雲が先の炎の代わりに投げかける涼しい影の中からさわやかに上昇して行き、ただ夕陽を受けて稲光する避雷針の金色の星を見つめ、そして浄福の思いでゆっくりと夕闇の中の遠くの山並みの方を上に、その輝く山頂部を辿って行った。太陽は交代する王冠のように山頂部で沈んで行った。

花と咲く自然と共にその後を追って咲き続けると思う精神は、永遠の骸骨として自然に留まる恐れがある精神、自然がその恐れで一つの骸骨と化している精神とは、何と別様に花と咲く自然を見つめるものであろう。不信仰の者は信仰の者よりもはるかに生気ない世界を眺めるようなものである。騎兵大尉の内面は持続的歓喜であった。人生の大いなる対象が彼の前を過ぎていった、人間の中では崇高な感情は決して、山々同様孤立してはいず、山脈同様に結び付いているのである。カールゾンは立派に、愛するゼリーナのために、魂がその有機的な王笏を下ろすときには、ただ諸力のこれまで支配してきた低い世界が消えるだけであって、魂の曇りない豊かさは残るのであり、支配の魂はその従者達が去るからといって没落することはないとまことに生き生きと述べようとした。より高い真実の多くはそれを認めようとは思わない者達、無意識に秘かにその影響を受ける者達にまで作用するものである。雨が水滴の下、深いところにいる植物にまでさわやかな影響を及ぼすようなものである。

しかし勿論ゼリーナは、この晩そもそも、彼女に惜しみなく与える幾人かの天使と心を許しあったので、すべての討論を最も喜んでいた。彼女の亡き母親も感銘を受け、こだわっていた人生の最大の対象についての会話と聴講　ー　母親の古い二人の友達、つまり私と高貴なカールゾンの傍らでの生活　ー　今晩はヘンリオンの神聖な住まいに泊まること

になろうという許しと見込みがあったのである。「いいえ」と彼女はいつものように感銘を受けて発した、「まさに人間は最良のことに値しません。人間は無垢の自然を純粋に受け入れるに十分善良で無垢でしょうか。自然の美しさと調和するに自らの中で十分に調和しているでしょうか」。この愛らしい言葉のせいで私は是非ともなお最後に磁気睡眠を討論に加える気になった。私に今朝ナンティルデがヘンリオンの傷についてのゼリーナの不安な夢について語ってくれたことのすべてがこの謙虚な娘の痛々しく形成されつつある自己磁気睡眠を指し示していたからである。私は言った、「一言で言って、ここで磁気睡眠を思い出してはどうでしょう。その高貴な現象はより高次な自我の仕事のために魂の同名、モナドの同盟に至るものでして、その現象は、その開示以前は精神のせいにされていたすべての諸力や豊かさを今や生き生きと明らかに示しています」。私は動物磁気は、かくも高貴な本性の女性の翼を、上昇しようと思っている翼を、いつか羽ばたかせるであろうと予見していた。高貴な精神にとっては、ただ上から眺められるような多くの星々が地平線の下に集まっているからである。

さて私どもは皆、ヴェッターホルンと崇高な夜から別れて、女性達はファルケンブルクに戻った。ゼリーナは、自分の想い人の住まいに泊まることの喜びを隠せずにいて、ナンティルデの秘かな愁いにさえ気付かずにいた。それは夕焼けと夕方の星々を通じて、その最中にあってもナンティルデに生じてくる不安で、いずれにせよ今日は想い人のことを十分に感じていた愛するゼリーナの夢が、想い人の過去の多くの昔馴染みの諸精神のそばにいて、慄然とするほど混乱してしまうのではないかという不安であった。

ヴィルヘルミ男爵は、私ども男性に、少しばかりヴィアナへの途次同伴して欲しいと頼んだ。若干重要なことを打ち明けなければならないということだった。ようやく今になって、なぜ男爵は、いつもはどの社交の場でも明るい月であり衛星であるのに、今日は靄の暈がかかっていたのか私は理解した。男爵は一通の手紙を知らせた　ー　これは残念ながら快活なニュースの楽しいコーヒー小屋では披露できなかったもので　ー　マルセイユからの文通相手がこう知らせてきたのであった。ヘンリオンはナポリ・ディ・ロマーニアの制圧の際に致命的なものではないが、胸に傷を受けた、と。父親は早速、マルセイユの息子の許に旅立つと決意を述べて、性急に事をなして自分の苦痛を隠そうとした。しかし男爵は力強くこの旅立ちに反論した。そんなことをすると女性達の希望がひたすら不安な展望に変わってしまうであろうというものだった。更にアレクサンダーは、自分が行った方がはるかに容易に弟を看病しながら連れ戻すことができようと付け加えた。結局人々はすべてを、直により明らかに決定してくれる未来に委ねることにした。しかしこの天の思いがけない彗星の刀で私は一層熱く断たれることになった。胸に傷を負ったヘンリオンが眼前に倒れてしまう夢を見たゼリーナは本当に磁気催眠の透視家であって、夢の中でマルセイユの現在全体の出来事を目撃していることが分かったからである。いや彼女はまだ多く苦しまなければならないことだろう。

章題の火星[軍神]への伸展詩

天の血のように赤い星よ。地上の血のように赤い軍神よ。天文学者達は、我々の惑星ほど生涯と形姿の点で汝に似ている惑星はないと証明している。人民を照らすために、我々が天から持ってくるものは赤い光を措いてない。戦場の薔薇[傷]が汝の光の下、大地で豊

饒に花咲く。いつでも論争するがいい。しかし諸精神の中でただ諸精神によってのみ論争されるべきで、ただ錯誤だけが倒れ、論争者は倒れるべきではない。

*1　Vauqueli, Fourcroy による。
*2　例えば乳糜管
*3　『ムゼーウ ム(4)』誌では透視の際の孔。
*4　Wolfart　一二三 頁(6)。
*5　絶対に隠されたものが存在するならば、これが宇宙の主であろう。

V

ヴェスタ［小惑星］

［面積］

［美しい週、夕方のシャルマイ　ー　まだ悲報はない　ー　神の存在からの結論］

まさに私ども皆にとって穏やかな静かな週となるはずであった。幸運の女神の輪と小輪とが互いにかみ合っていた。ナンティルデは私の助言を　ー　女性は助言を改善せずに守ることは少ないので　ー　よく改善して、自分のベッドを一晩中ゼリーナの手に自分の手を置けるほど十分近くに寄せた。この友情の避雷針が磁気睡眠の炎と波を分散させて欲しいし、あるいは想い人の居間、生活の部屋がそれに穏やかな影響を混入して欲しいものである。いや、ゼリーナは呻くことも泣くこともなくて微睡み、ただ小声でこう歌った。「波たちよ、高く盛り上がらず、風たちよ、引きさらって飛ばず、声高に話さないで欲しい。あの方が穏やかに波に乗って船出し、人生の震撼を感じないですむように」。更に皆が喜んだことに次の情報が加わって、騎兵大尉も以前のドイツ人戦友から、その人はマルセイユで高貴なフランス人女性の夫として家庭に隠棲していたのであるが、占領されたロマーニアの砦の知らせの他に、何人かのドイツ人攻城者達の船出という有望な知らせを、大尉の子息とその到着や運命について至急報告するという約束と共に受け取ったのであった。心配性のナンティルデは早速ゼリーナの船乗りの小唄を磁気睡眠の予言に高めようとした。しかし私は彼女に尋ねた、船以外での帰還を夢見ることはできないのか、と。

我々の共同生活でも会話はさながら遊園地の回廊のときのように交代したがるように、会話は再三人間生活そのもののように死後の生へと戻って行った。しかしどこにもあつらえの議論演習の苦痛とか、不信仰者との宗教戦争の準備とか、制圧、打倒の技法の営みは見られず、まさに心の真正の宗教に関するものすべてについて話された。そして宗教の起源にして帰結の不死の世界に容易に、すべてが、つまり星空、夕焼け、いや晩鐘が、すべての感動が、ひょっとしたら多くの痛 み(1) も含めて我々を導いていった。　ーー

この静かな明るい夕方に、遠くの山々で二つのシャルマイの音が聞こえてきた。それは互いにただ話しかけては黙するもので、人々は私に、二人の敬虔な牧人が離れた頂にいて夕方の歌を一緒に歌おうと互いに合図を送っているのであると教えてくれた。遠方の山の歌は私の心を感動させた。というのは私が静かな大気の中で耳にしたのは、ほんのかすか

な音色でもなく、空間の隔たりそのもので時間の隔たりのように描かれる音色が、その隔たりのせいで一層魅惑的に描かれていたからである。「これらの良き人々は」とようやく騎兵大尉夫人が言った、「きっとあれこれ調べなくても自分達の不死を、ただ自分達が祈る神への信仰を通じて確信しているのでしょう。　ー　これまで私には、私の理解する限り、肉体からの魂の独立についての貴方の証明はすべて快いものでした。しかし結局すべては私どもを不死にしてくれる或る神性にかかっていて、私の心は全面的に私の神を信頼しています」。　ー

私の内面はとても感動して、私は言った。「いや、その通りです。神はその真実と共に、その愛と共に、その神聖さと共に私どもの心に語りかけていて、汝は滅することはないと言います。　ー　勿論神を否定する者でさえ、神を欠いたままの諸根拠による第二の生を仮定できましょう、その根拠によって、神はないままにすでに第一の生があるわけでしょうから。しかし幸いにして私どもは、孤独な、父のない不死の世界の戦慄は免じられています。そんな不死の世界では長い永遠と広大な混沌が広がっているだけで、それらはすべての地獄を多重化し、深化してしまうだけでありましょう。というのは一つの至善の精神がなければ天は例外にすぎないし、不規則な地獄が規則となって、混沌が全能の主として根源の悪魔となるでありましょうから」。

「神がなければすべての精神にとって、ただ孤独だけが残り、それも地上のそれぞれの孤独よりももっと忌まわしいものでしょう」。

「孤独も実際十分にひどくて痛ましい影響を及ぼします」とヴィルヘルミは言った。「社交は、つまり多数の声は、せっかちに揺れる人間に見解の歯止め、節度、内容を与えます。それに人々が調和させ、満足しなければならない諸規則を与えます。というのは個々人は誰でも多数よりも過激にならからです。それ故隠者はいつも頓狂であって、仕舞いには世俗の頓狂人として収容されなければならなくなっていたことでしょう。時々その信者や崇拝者達が彼らのために若干の敬虔な社交の場[協会]を設けてやらなかったときの話で、この協会はいつでも何ほどかのものであったのです。孤独の魂の砂漠は大きな諸砂漠に似ていて、そこでは諸対象が固定せず、泳ぐように沸き立ち、葦が森に、人間が巨人に膨張します」。

「不死の世界は、地球の創造には、人類にはないものと考えようとすれば、無限の者の前にあるのは、永遠の絶えざる精神の塵飛散であり、諸魂の上昇と沈下であって、諸魂の微小な瞬間の刹那の歓喜、徳操、認識はすべてを愛する全能の聖なる者、永遠なる者にとっては何の目的ともならないことでしょう。私ども一日の寿命の蚊にとって、単に一瞬間だけ喜び、信心深く、利口であって、常に次の瞬間には砕けてしまうような六十分の一秒の寿命の蠅は考察の対象にならず、いわんや創造に値すると思われないようなものです。私どもの精神は滅せられないけれども　ー　というのは精神は単純な生命として存続できるからですが　ー　しかし精神のすべての発展は滅せられ、全く無のために生じたのであり、無として生ずるのであれば、そして私どもが皆地上では飛翔する鋼の火花であって、暗い珪石から打ち出され、瞬間だけ燃えて輝き、それから永久に輝きのない灰色の破片として落下するのであれば、全惑星上で支配する神は、ただ夜に数百万の魂の火花を打ち出しては消している神に他ならないはずです。というのは大抵の惑星は地球と似ているせいで、ただ人間と類似した諸精神のみを　ー　多くの惑星はひょっとしたら木星、土星同様に、

永遠の嵐と雲の湧出のために、ただ下等人間だけを　ー　維持できるからで、太陽そのものでも巨大な大地の礫岩塊として人間のタイプはその明るさと暑さにもかかわらず（この二つは太陽の暗い土壌の上に、表面同様大気中にも見られるとすれば）我々の許でも赤道や極地で人が絶えることがないよう、同様に絶えないはずです。そうしたら同じことがすべての恒星について、ただ遠くの太陽として妥当し、その恒星上の住民についても妥当することでしょう。(諸精神の価値の単なる等級といったものは、没落の一般性の中では、我々の許同様にほとんど例外とか差異を形成しないと思われます)。かくて天上の神性は果てしなく上昇し下降する霧の中から一つの孤独な星として立っていることになりましょう。単なる墓地の一つの神　ー　無限の諸精神の靄、永遠に新たな靄に砕け散る靄で囲まれたすべてを愛する父　ー　諸惑星の多数に飛ぶシャボン玉宇宙の上の太陽である神性です。　ー　小暗く冷たい死者の川の滝が、神々しい太陽の目の下で、すべての被造物世界を通じてざわめきます。しかし諸魂の明るい虹は、輝きながら川の上に確固と立っているように見えますが、単に永遠に落下し消えて行く滴にすぎません。　ーー

それでは被造物全体は何を欲しているのでしょう。その目的は、単にその生命を有する部分にのみ求めて、実現されるべきものですので　ー　というのも死んだ大気の海、水の海にとって、諸惑星の塊、諸太陽の塊にとっては、すべてはどうでもよくて、それらには単に手段としてのみ価値が残っているからであります　ー　それで私は再度尋ねます、一体被造物は何を欲し、無限の者は生命がこのように消えては滅して行くのに、どんな目的を有するのか、と」。　ー　「私どもは無限の者に私どもの目的を貸し与えて、無限の者の目的の一つを推測しようと欲しているのではありませんか」とアレックスは言った。「ミケランジェロのような者がその圧倒的な鑿で破片を飛ばしている滑らかに輝く大理石の塊の横に立っている少年は、偉大な芸術家の魂の中にある理想の形姿が自分には描けないので、ミケランジェロに対して無目的な破壊の苦情を訴えようとしているのではありませんか。　ー　しかしまことに古代の民が神性を未加工の四角の石[(2)]とか支柱で物質的に表現していると思ったとすれば、私どもは神性を精神的にそんな具合に模していると思い、私どもの魂がそのための石や支柱に他なりません。そもそも無限の者は目的を有し、私どもはその無限の者をよく知っていましょうか」。

「いや」と私は言った、「私どもはひょっとしたら無限の者を私どものはかなく流れ去る本性そのものよりもよく知っているかもしれません。ただ至聖の者だけが、諸状況の必然性とか偶然の混沌が関与しているのではなくて　ー　私どもの中にかの精神的有機的形成衝動を置けたのであって、その衝動が内部の人間を倫理的美へと発展させているのです。この倫理的美は神々しい諸似姿が出現するための、その聖なる精神により一つの覆いなのですが、その諸似姿は勿論、有限な者は無限な者とはいつでも無限に、有限にではなく、隔たっており、単に諸徳操を有するだけで、徳操そのものは有しません。倫理性[(3)]は内部の人間全体の倫理的美の美しい四肢です。さて人間が次第に発展して一つの倫理的芸術品となると、死が出現して、古典の芸術品を砕きます。かくて神性は数千年から数千年にかけて数百万もの諸精神の中にその似姿を描き、そうしてこれらの似姿がその像と共に数分後には永久に消え去るようにします。倫理的完成は単にその持続性を知っているだけで、時代とは別個で、時代に満たされることはなく、それで永遠さえも必要としています。確かに高貴な者は　ー　多くの古代のギリシア人やローマ人が死を信じている者として証明

したように　ー　自分の至純の存在の浄福の享受をほとんどやめずに、不信仰の世俗の紳士が死ぬ前の別れの宴の[処刑前の食事]一本の葡萄酒や料理の皿を空にしないではいないようなものでした。しかし時がさながら罪のように、仕舞いに内部の人間の心臓を取り出すとき、取り外せない何か高尚なものを掴むには全く膨大な力を要するものです。より高貴な人間は、少なくとも現世を去った将来の時に自分の倫理的継ぎ接ぎ細工を一つの完成品、芸術品へと完成させることに固い信を置いています。というのはまことに美しい魂は人生の荒天の中では自分や他人には単に継ぎ接ぎの砕けたものに見えてしまうからです。それらは雨の中で打ち上げられた花火で、最も美しい構成も四肢がばらばらになって燃え上がり、高貴な名も活字が崩れて、天に全体が輝き出ることもありません。

恐ろしいのは報酬の喪失ではなくて　ー　というのは徳操は至福同様報われることはないからで、徳操が至福そのもので報われることは最も少ない　ー　徳操の持続の喪失であり、これが善良な心には怖くて、心はこの上なく美しい努力と享受の中、破滅の振り上げられた犠牲の斧の下、鼓動し、臆しなければなりません。そして最後に徳操の前ですべてが消えます、すべての至高のものが、単に徳操だけでなく、有限性ばかりでなく、無限の者までが消えます」。

「無限の者までとは　ー　」とこれまで静かにしていたゼリーナがとても動じた声で口を挿み、続けた。「死についての数日前からの私どもの会話以来これほど珍しく頻繁に破滅の日を考えたことはありません。だから恐らく私の奇妙な夢も生じたのであって、夢の苦痛は直に容易に消えるに相違ないものでした。つまり私は私の大事な母親が死の床にあってますます青ざめて行くのを目の当たりにして、最後の別れのために震える両手が私ども皆の方に差し出されるのを見ていました。母と私どもが泣いているとき、固く冷たい声が私どもの背後の隅の方でつぶやきました。病の床は勝利の床ではない、死ぬとすべてが終わりだ、死も無も一切も虚無も終わりだ。『その通り』と思いがけず私の母が言って、両手を私どもの手から引き離し、両手を組み合わせて、上に上げようとしてできなかったけれども、祈ってこう言いました。『さて私はすべての私の愛しい者達との別れの後で、更に最愛の者、我が神よ、汝からとても辛い別れをしなければなりません。汝、すべてを愛する者よ、いかほど私を愛してくれたことでしょう。汝の天からすべての私の美しい日々を私に送ってくれたし、私の涙を静めたり、喜びの涙に変えてくれました。いつだって私の心は汝の許にありました。　ー　さて私は永遠に去らなければならず、もはや汝のことを考えられません。改心して感謝することもできないし、汝に対する過ちを償うこともできません。汝は永遠を通じて輝き続け、永遠は汝を見守るけれども、私は滅せられます。それでは私の最後の感謝をお受けください。私の心は最後まで汝を愛します』」。…ゼリーナの声は詰まった。「これほどあり得ない夢では、約束に反して私が動揺するはずはないのだけれども、夢の残りを話すことはできません」。そして目を濡らして彼女は部屋を去った。

私どもも会話を中断した。宇宙の最大の者に対する思念が、ただ孤独のときにのみ感じ、社交の場とか舌先では感ずることのない思念と共に溢れてきたからである。かくてこの小さな章も締めることにしよう。ここでは至高の者の王冠から、私どもの墓や広大な楽土に、いわば自然世界の全平原からよりも、素敵な明かりが投げかけられているのである。

ヴェスタに寄せる伸展詩

汝は、ヴェスタよ、小さい。すべての惑星の中で最も小さい。しかしすべての惑星の中で最も明るく、太陽に最も類似している。この章のヴェスタも明るく、小さい。そして心に温かい陽光を与えるがいい。

VI

ユーノー

［面積］

［報酬と処罰　ー　過激な悪に対して］

「私にとってまことに好ましかったのは」と公使館参事官は言った、「貴方は説壇の拍車と説教壇の手綱を、つまり天国と地獄、あるいは将来の報酬と処罰を不死の証明の中に混入されなかったという点です。人間は徳操に対しては容易にそれを自らの報酬とさせますが、悪徳に対してはそれを自らの処罰とさせることは余りありません。しかし人間は有徳心からはなはだ処罰欲を有していて、奴隷を鞭打って死に至らしめた希望峰のオランダ人入植者に対しては、同じ鞭打ちを入植者自身に与えることでしょう。かくてトルコ人の残忍性に関して、またトルコ人自身に向けられない残忍性はないことになります。かくてトルコ人の残忍性とキリスト教徒の残忍性の間ではただ前後の差があるだけになります。ただ神学者達は類似のことを類似のことで報復せず、いつも不等のもので報います。徳操には不徳義で　ー　時間には永遠で、与えられた一つの痛みには、受け取る無数の痛みで報います。そこで神学者達は人類の四分の三以上の者達を処罰し、苦しめるために不死を必要とします　ー　思うに、ただ善人だけいたら、神学者達はやむを得ず永続を欠くことになるでしょう。永続は存在しなければなりません　ー　それも永遠の永続がなければなりません。さもないと苦しみは余りに短く弱いものとなってしまい、数千年に短縮された永続は数年の長い罰当たりの生活と釣り合いをとれないことになりましょう。しかし人間を悪魔のように扱い、悪魔が扱うように人間を扱うには、まず人間を悪魔に変えなければなりません。それ故かくて根源的悪、過激な悪が人間の中に設定されなければならないことになります。未開人や全くの無教養人、年少者達といって人間の中等階級があって、これらの深い、互いにほとんど均衡のとれた未発達の倫理性と非倫理性の段階では、報酬の天上的不死も地獄的不死にも値しないし、それらの根拠付けともならないからです。しかし私どもはこれまで悪を悪として求めているでしょうか。欲望の手段として悪を求めるのではないでしょうか。仮定の根源的悪の性質と、誰もが、堕ちた人間までもが、高貴な行為や、それ以上に高貴な人間達の描写や光景の際に享受するかの内的喜びや賛嘆とは折り合いがつくものでしょうか。邪悪な性質は近しい性質に引きつけられ、まさに不似合いの美しい性質には反発を感ずるものではないでしょうか。　ー　詩文の甘美さは、殊に劇場の詩文の甘美さは、私どもの堕落した都市にとって、私どもには到達しがたく思え、私どもの気に入るというよりは私どもの先を行っている倫理的主人公達の、心に染みこみ、心を昂揚される喜びに満ちた光景に基づいているのではないでしょうか。歴史ですら、美的黄金の額縁はないものの、倫理的痘痕者達にとって単なる他人の美しさの鏡であって、自

らの美しさの鏡ではありませんが、しかしこの痘痕者達は歴史の前に賛嘆しながら立っています。悪魔はプルタルコスを私どもよりも全く別様に、気分を害して読むことでしょう。善なるものとしての善への愛を人間は少なくとも時折感じます。しかし悪なるものとしての悪への愛の代わりに人間がそのすべての罪の中で感ずるのは単に享楽への偏愛で　ー　享楽はそれ自体許されるもので　ー　慣習と眩惑とで圧倒されているのであり、邪悪な過去に対する後悔と良き過去への喜びとは人間の愛好するものを最も良く証明しています。まことに人間生活の内部のすべて、時の外部にあるもの、萌芽の目に見えない小木がその作用を及ぼす大地や大気、陽光、雨粒の全歴史を通じて完成しているのを御覧になる無限の者は育てた作物の果実を狭小な神学者とは全く別様に、全くより穏やかに評価することでしょう。神学者には人間のすべての深い内部、広大な歴史的外部のうち、ほんの瞬時に取り出した見本しか目に留まらないことでしょう。すべての人間的視線を錯覚させる汝と自我の間の戦いは、神々しい視線の許でも消えてしまうはずです」。

「良い意見と思います、アレックス」と妹は言った。「Ｊ．Ｐ．さんはこれについてどう思われますか」と彼が尋ねた。私は言った。「全く同意見です。しかし人間の本性についての正統派神学者の最近盛んな戯画に対しては私ならもっと厳しく言うことになりましょう[(1)]」。

「処罰故に不死が必要とはなりません。しかし報酬のためにも必要ともなりません、妹さん。Ｊ．Ｐ．本人としてはこう思います。徳操はそれ自らが報酬であり、この白く輝く神々の像にとって何らかの副次的至福を添加することは神々の像に色彩を塗ることにすぎない、と。しかしまことにそもそも私ども人間に、多く報いる必要はありません。私どものちょっぴりの善行は風まかせであり　ー　平日に対する付録の日曜日で　ー　百もの別な努力や願望の中に紛れて包まれており　ー　程度や選択はくるくる変わり、誰も、その倫理性の数時間の部分的な不日食の故に永遠の天国を要求できるものではありません。いずれにせよ大方の者にとって徳操は単に通過馬車関税権[正義]にすぎません。そもそも人間は、倫理的な光輝のせいで互いの違いを区別できると思っていても、その違いの程度は、近頃の天文学で太陽や惑星、月が互いに似ていて、単に程度が異なるようなものであります」。

「我々の倫理的半端仕事、個別化という貴方の非難に対して反論したい」と騎兵大尉は言った、「そもそも行為の何らかの数は全く問題にならないのです。倫理性というのは時間とか数とかの面で何ら有限なものを知らないのですから。心による唯一の偉大な行為は明るく静かな海同様に私どもの上の空全体を明らかにしてくれて、心の中に空を受け入れています。唯一つの行為が一つの人生に値して、その力を見せています」。

「その通りでしょう」とアレックスは答えた。「しかし若干補足します。誰もが自分の倫理的生活を振り返って見て、自分自身の気に入っているわずかな行為を数えてみるといいのです。すると早期から後期に至るまで同じ種類のものが再三生じていて、全く別種な行為はまれであることに気付くことでしょう。好意的な者は多くの好意や許しを、剛毅な者は大胆な勇気ある行為を、確固たる誠実さを思い出すことでしょう。誰もが別々の倫理的果実を喜び、得意に思うことでしょう。

しかし若干の謙虚さを学ぶ基となる秘密の全体は、個々人の生来の倫理的持参金、支度という点にあり、徳操全体は生まれつきのものであり、決意や犠牲ではありません。　ー

しかしまた地上的脆さという点も大きなもので、徳操が断片的善行という私の非難を避けようと思って、狭い道を通って、脇の人目や人跡のない狭い小門に向かって行こうとするなら、生ずるのは狭小な聖人や、病弱な自己懺悔説教師、臆病な殉教者達で、芸術や人生、学問に愛を有せず、小言好きな良心の持ち主です。私はこいつらは全く好きになれません、カンネ[2]の聖なる傷痍軍人兵舎の一連の中隊です」。

「それでも」と私はようやく答えて、再びもっと詳しく不死の話に戻ろうとした。「私どもの徳操では浄福への要求は何もできないとしても、その、つまり私どもの生存では別でしょう」。

これについては、読者の方、次章となる。次章の題ケレスがもっとふさわしい。現今のユーノーの題は伸展詩にすら合わず、それ故私は試みることさえしない。

Ⅶ
ケレス
［面積］

［幸福であることの権利　ー　現世の苦痛からの結論　ー　痛風女性の棺　ー　憧憬とより高い素因からの結論］

幸福になるための生物の権利についての考察の入口にあるのは、ゼリーナにとってそれ自体悲しい知らせで、つまりゼリーナがいつも両手を祈りのために正しく組み合わせていた痛風患者の牧師夫人が　ー　逝去によって、痛みで火照る苦しい肢体にとってまだどうにか動かし得たわずかの動作を最終的に免れることになって、今や夫人の体は本来の休養のベッドを、もはや何も動くことのないベッドを見いだしたのであった。ゼリーナは長くは泣かず、こう言った。「私の手を借りずにまた一人で祈ることになった」。

「二つの現象が厳しく接しています、いや対峙しています。無限の愛の充実から流れ出る地上の喜びの充実と、現世の時が謎として陰鬱なものとしていて、現世の時自身がその謎解きをしてくれない地上の痛みの充実です。唯一つの春を体験した者なら　ー　どの国々も一つの春を有していて、いや多くの国で春はやむことがなかったりしますが　ー　あるいは幼年時代、青春時代をそのすべての朝焼けや虹と共に飛び過ぎた者なら、嘆きの谷への不幸な神学的眩惑の中であっても、眺望としてテンペの谷を置き換えることができましょう。至聖の者は被造物の全体を通じてすべてを至福のために　ー　それ故、人は至福を称え、願うことが許されましょうが　ー　なしたのであり、それも倫理のため以上に至福のためになしたのです。倫理の高い公転とか摂動の調整とかについては至聖の者はもっと私どもの自由に任せたのです。微小の小動物ですら、至聖の者にとっては喜びのために小さすぎることはなかったのであり、喜びはすべての生物が、至高の生物と最低の生物が共有する唯一のものであり、最低の被造物から創造主その者にすら達する唯一のものです。動物の（従って被造物に最大の部分の）生活は、食卓と休憩地、遊戯場、子供の巣、前もって味わう狩猟欲望の間を永遠に行き来するものです。というのも動物は、人間よりも幸せで、案じられる未来を知らず、単に欲望によって期待された未来を知っているだけだからです。それ故死は動物にとって　ー　少なくとも苦しめる人間達の圏外では　ー　私ど

もにとって深い眠りの中での一つの死よりも　ー　更にどうということもないものです。ただ哲学者のヘーゲル[1]だけは、広い動物の生活に暗い喪の黒枠が引かれているのを目にしています。この黒枠は彼が陰鬱な哲学で動物どもの軽やかな須臾の感受性の中に描いているものです。更にもっと私の気に入らないのは、詩的なシューベルト[2]さえもが陰鬱な神学から自然の沃野の上に広大な月の影が広がっているのを見ていることです。しかしそもそも近世の神学はすべてに、内部の人間から自然の神殿に至るまで、喪のランプを掛けていて、すべての被造物の中で単に陽光の明るい、しかしはるか遠くにある小さな場所、つまり楽園が残されているだけです。これに対して神を愛する心にとって、感覚的現象を潰して考える鋭い思想家のヘルバルトが次のような目的論的考察をしているのは嬉しいことです。つまりより高尚な動物どもはただ表面だけが美のためにその肢体の均整によって構成されているが、一方その覆われた内部では左側と右側とに何の均整の魅力もなく、ただ利便性に奉仕しているだけである。このことは必然性のメカニズムからではなく、美で喜ばせようという無限なら精神の目的からのみ説明され得るものであるというものです[*1]。自然は、自然がその覆われた目的のために要求している生きた生物の永続と活動とを他ならぬ喜びという刺激的魅力で達成し得たと言うことができましょう。こう言ってはなりません、つまり動物的歯車装置が、喜びの何らかの油のないまま、単に苦痛の錘によってのみ動いているような世界が考えられる、というのはきっと存在するであろう苦痛に対する恐れは、不確かな最終的には無くてもすむ快楽誘い同様絶えず刺激を与えるであろうから、と言ってはなりません。[苦痛はまた喜びよりもはるかに高められましょうし、また微細なものに分割もされましょう　ー　不幸な世界に対する至福の神という何という矛盾でしょう]。　ー　しかし無限の愛はまさにより高次の目的、つまり愛という目的を有していました。

そして偉大な精神そのものが、すべてを至福のためになすということによって至福への要請を神聖なものにしてきました。それ故私どもはこう言ってよろしいでしょう。偉大な精神は不道徳な生物を造ってはならないように、不幸な生物を造ってはならない、と。どの被造物も、確かに或る種の喜びの充実の権利は有しなくても、喜びの充実の尺度は定かでなくて、必然性とは調和しがたいでしょうし、しかし苦痛を感じない権利を有します。苦しみというのが以前の喜びの薬とか将来の喜びの滋養物とはならない限りの話です。それ以外の痛みはそれ自体何の価値もないでしょうし、痛みは外部に対しては単に残忍さとか復讐とかになることでしょう。

すべての生物に妥当すること、これはまた最低の生物にも最高の生物同様に妥当します。いや更にそれ以上に妥当しまして、釣り針上の虫は単に釣り針のためにとか、魚を食する者達のために造られたわけではありません。どの生物も自分を永遠に犠牲にして、全宇宙のために完璧な別荘の平に潰された土台となるよう横たわっていることはできないのであり、そんなことになったら残りの宇宙を自分の負債者、盗賊として告訴することでしょう。

ただ全能の者の支配下で、誰が喜びのない存在をきっぱり拒否する権利を私どもに与えてくださっているのか尋ねないことです。全能の方だけが最初に自分の贈り物の星々の苗床を通じてなさっているのであり、その苗床が宇宙を朝の銀色の花畑、秋の黄金の果実園にしているのです。しかし更に全能の方はこの権利に何ものかを付加されました。つまり同情で、これを他人の痛みと共にどの胸にも全能の方は植え込まれて、これによって二度

幸福になるための全能の方の愛を表明されたのです。すべて崇高なものは、例えば真理は、至福を従えています。最も崇高なものさえ、徳操でさえ、至福の友であって、至福から、自らの報酬の他に第二の報酬を得ているのです」。

「この一切から判断すると」とアレックスは言った、「第二の生は現今の生を基に調整して貰うものはほとんどありませんな」　ー　「ひょっとしたら動物の夢に対してはあるかもしれません」と私は言った、「しかし人間に対してはありません、たとえ人間が動物と同じ程度に幸せであるとしても。そもそもここに見られるのは古い錯誤で、あたかも人間は喜びに対して全く苦痛で代償しなければならない、前もってかあるいは後で代償しなければならないかのようなもの、あるいはあたかも多くの陽気な日々の後、遂には暗い日々を体験することが必定であるかのようなものです。というのは雨の後、天気になって欲しい、傷には傷薬が来て欲しいというのは全く別の命題で　ー　これは正しいのであって、次の逆の間違った命題とは異なるからです。つまり人間は不平のない新婚の寝室から拷問部屋に行かなければならないというもので、あたかも苦痛は喜び同様例外ではなくいつも見られるもので、苦痛と喜びは交代して支配するのがふさわしいとするようなものです」。

「いや」と騎兵大尉が言った、「なぜこんなことすべてが必要ですか。無限の憧れというものがありませんか。　ー　何も亡くなったものがないとでもいうのですか。　ー　神は愛に満ちていますが、世界は苦痛に満ちています。神は苦痛が地帯から地帯にかけて、千年から千年にかけて、ずきずき痛むのを御覧になっています。無限の者の前でどの瞬間にも人間の苦悩の何という途方もない地獄が広がっていることか、時折私は思い描いては、しかし長くは耐えられない思いがしたものです。無限の者が一度に地上のすべての戦場をその砕かれた人間ども共々眺めて　ー　呻き声や蒼白さ、絶望の手もみに満ちた病室や臨終の部屋を　ー　脱臼させられる拷問部屋を　ー　爆破させられた都市を　ー　すべての自殺者を次々に、その死へと追いやられる基となる言いがたい苦悩と共に御覧になると思い描いたときのことです。　ーー　いや人間の目は一緒になって覗くことはできません。人間の目は地球の彼方の方を見上げて、運命のすべての鋭い打撃の後でも永久に砕いてしまう一撃が最後の一撃ではないと了解して、また自分の傷が癒えるようもっていかなければなりません。魂は、供犠の斧が無垢の生命の血管を次々に切り開いた後、最後の瞬間にその鈍く広い面を返して永遠の死の一撃をくだすという考えに耐えられるものでしょうか」。

たまたま騎兵大尉がこう述べているとき、下の村の中で全く不格好の、広い、四角の多彩に塗られた箱が運ばれてきた。不格好のため何のために使用されているのか分からなかった。ようやく分かったのは、それは今や身罷った痛風病みの牧師夫人の棺であって、夫人の肢体は痛みのために混乱したもつれた塊となってしまい、その塊にとってはただ墓の形式しか残っていないということだった。ゼリーナは長いこと見つめていて、両手を高く組み合わせて、黙っていたが、しかし泣きながら友の女性の首に抱きつかざるをえなかった。あたかもすでに魂のない体の第二の体[棺]についての、仮象の仮象についての大きな痛みを恥じている風であった。　ーー

ー　「自分の前に」と私は言った、「数百万の楽園が無数の諸惑星を通じて横たわっているというのに、無限の方は、罪もなく共同の楽園から追われて楽園の外の入口の所で憧れ、干涸らびなければならなかった長年苦しんだ者に楽園の一つも開けてはならないので

しょうか」。

「しかし」とアレックスは言った、「なぜ私どもは意図的にわざわざ地球をかくも暗いものにして、そうやってただ天から地球を一層明るく照らし出し、もっともらしく希望するために、もっともらしく苦しんでいるように見せかけようとするのでしょう。未開人の大きな群れ、山の民、狩りの民、ほとんど祭壇では死ねない砂漠のアラブの民、タヒチの牧歌の島人、暇な美食家のオリエント人、これらの人々は皆人生からまた人生そのものの他を、絶えざる繰り返しの他を求めているでしょうか。それ故彼らは、此岸の人生を永遠にまで延長するために、此岸の人生の模刻、影絵を供給し続ける将来の人生を仮定しているのではないでしょうか。いや国境を越えて旅する必要すらありません。周りに満足した同郷人、千もの陽気な凡人がいて、彼らにとっては現実の平板な国が唯一の約束の地であって、心から自分達の胃を楽しみ、光沢ある聖餐式の服、晴れ着を喜び、自分達の冬の薪やそれぞれの月を、特に祭日を喜んでいます。だからこうした人々は自分達の幸福が格別の報酬で報われたいとは、つまり永遠に永続する幸福とかそれどころか高められた幸福で報われたいとは欲しなかったと思います」。

「いや」と私は言った、「話題になっているのは私どもとすべてのより良き者達における何かより良きものについてです。結局人間の中に不思議な内部世界が生じてきますが、感覚世界の副惑星としてというよりは、感覚世界のヴェール、消音器として生じ、ぎらぎらした感覚世界に陽光よりは月光を投げかけます。私どもは深海を行くときのように、下の天蓋に船の中から高くなる浄福の島を見つけ　ー　私どもの憧れは無限になって　ー　私どもは大陸を目の前ではなく、下に見つけ、私どもの憧れは、この下界に、無限に下って行きます。私どもの現世の船の混乱した木製の暗いがらくたは、下の明るい陸地とすると圧迫感を与えます。この深い、しかし静めがたい憧憬は　ー　古く、去ってしまった国ではなく未踏の国に対するこのほとんど苦しげな奇妙な郷愁は　ー　予想に反して、まさに苦しみのときではなく喜びのときに、それも単に或る種の喜びのときに私どもの心を捉えます。飲食の享受や温かさやさわやかさの感情の享受、動きや休みの享受はその最高度以上には何も要求せず、更に昂揚することはなく、逆に狭小さに縮んでしまいます。しかし月光や陽光、夕焼けの享受から山々や芸術の崇高さに至り、更に無限の愛により身を捧げ死ぬことになると、感動の余り喜びの涙を流すことになると、より高貴なものへの憧憬が支配し、心は流れて行きますが、満たされることはありません。かくて享受の際に心は渡り鳥に似ることになります。これは温かい部屋に飼われていても、しかし他の鳥達が美しいより温かい国々に飛んで行くときになると、この鳥達に憧れて飛び去ろうとするのです。

より高貴な人間性のこの内面は特にある芸術を前にして目覚め、声高になり始めますが、この芸術の他のどの芸術とも比べた独自性、憂愁さはまだよく認識されていません。私は詩文や絵画のことを言っているのではなく、音楽のことを言っているのです。音楽は喜びの感受性や悲しみの感受性を倍加すること、いやそれどころか自ら生み出すこと　ー　魂はその音構成の魅力の中で神殿にいるときのように茫然とすること　ー　音楽は他のどの芸術よりも圧倒的に強力に、喜びから痛みに移行することなく瞬時に私どもをその中に振り回すこと、こうしたことをなぜ人々は忘れてしまうのでしょう　ー　つまりなぜ音楽のより高次な独自性を忘れてしまうのでしょう。郷愁の音楽の力のことで、古く去ってしま

った国ではなく、未踏の国へのかの郷愁で、過去ではなく未来への郷愁です。

この郷愁は、音楽が優しい者達のために喜びや悲しみのすべての他の作用の中に混ぜ入れていて、そしてこの郷愁がまさに音楽からすべての非倫理的作用を不協和音、すべての不純なものとして排除しているのですが、この郷愁は幸福な者と不幸な者が、過去を顧慮せずに、しかし言いがたい未来に満ちて調べの許で吐き出す溜め息を通じて明らかになります。旋律とかメロディーになってようやくというのではなく、個々の音色が　ー　長く伸ばされたり、特に三和音として高められると　ー　深く私どもの内面の夜の中に侵入してきて、一つの嘆きを目覚めさせます。それ故、アレグロのびっくりさせる俄雨の代わりに、ゆっくりと滴るアダージョの涙を誘う力が生じます、陽気なプレストでさえ痛みを隠し持つのでありますが。それ故大抵の民族の許で（例えばギリシア人やナポリ人、ロシア人）、民衆は短調で歓呼の声を上げたり、嘆きの声を上げたりします。しかしなぜまさに音楽がすべての芸術の中で私どもの内部の手本となって響くのか、あるいはむしろ内部を模して響くのか、これについては音楽の動きを数え上げることによっては全面的に説明できません。十分奇妙なことに音楽の物体的動きは或る種の法則的音型を構成します。この構成を音楽は全く何らかの方法で繊細な神経に伝えるに違いありません。しかしここから精神の深みにまではまだ遠いものがあります。

しかし何のために人間の中では二重の方向があるのでしょう。さながら一方には幼根の方向があって、これは下の方へ進み、大地の中で満足し、もう一方には茎芽の方向があって、これは上の天上的青空、明かりを求めるという按配です。明らかに二つの理由から、人間の地上的快適さのためではありません。天は　ー　天がすでに私どもに禁じていることですが　ー　自ら高貴なものを低級なものの奉仕に使い、花を球根植物の肥やしのために摘み取ることがありましょうか。より高い世界への、より高い愛への衝動や溜め息が、神性や倫理性の観念が、単にただの錯覚として植え付けられていることがありましょうか。地上的生活の喜ばしい感情を高め、熱帯の薬味として、感覚や地上的衝動の喜びにもっと内実や味わいを付与することになる錯覚として植え付けられているのでしょうか。

しかし第二にまさに逆のことなのです　ー　話題になっていた幸福な中等[凡庸]人間は、自分達のクラスから高められると悩み始めます。最も長い最も鋭い痛みは単により高貴な魂の中にのみ住んでいて、これらは人生を単にヴェールや弱音器の背後でのみ味わい、逆に苦しみはヴェールや弱音器を通さずに味わいます。或る種の心の持ち主に尋ねてみるといいのです。彼らは未来の楽しみの他には楽しみを知らず、更に血を流すのです。かくて精神的高みでは物体的高みと同じ具合で、物体的高みの山上では、あるいは気球船上でも、血が思わず知らず顔の一部から染み出てくるのです。いやすでにそもそも精神と心の昂揚は痛みを準備するもので、これに対し感覚の昂揚はむしろ喜びを準備します。より高度の愛の痛み、逝った者達へのより細やかなより長い悲しみは、現世の単なる天分とか欲求とは関係しません。

ここでもより温暖な気候の熱帯植物としての若干の例外的人間について話しているわけではありません。人類の例外は、それが人類の単なる発展であって、脱臼でない限り、遂には規則となるものです。学問が最初は単に何人かの野蛮人を征服、その後すべての民族を征服し、結局その進歩して行く条光が最初に地球の全表面を覆うように、数世紀を通じてより気高い感情はもはや例外的人間に宿らず、多数に宿らなければならず、内部の人間

はますます華奢な皮膚から脱皮しなければなりません。かくて憧憬の痛みと感情の高揚はますます広がって行かなければならなくなります。

無限の者はしかし、すべての予感を通じて、痛みより何かましなものを我々に与えなければなりません。痛みは予感に欺かれたときここでは何の役にも立たないのです。数百万の様々な動物のどの本能が、それぞれの無意識の、何も予期していない動物に様々の約束を守ってこなかったでしょうか。　ー　しかし動物の単なる本能と人間の未来世界のかの設計との間には何という違いがあることでしょう。動物の本能はその予言的約束と要求を暗闇の漠然さの中で告げ、見えざる手でもって闇の中を目的まで押したり引いたりしています。かくて例えば昆虫の幼虫のための営巣や餌収集の衝動が黙って、未知の生まれていない子孫のために力を行使しています[3]。これに対して人間の中では永遠性の本能がその実現をすでに現世で始めています。それは本能が約束するものを希望や憧憬に対して述べることによって始めているのです。我々の至聖の善は、我々が憧れる浄福の端緒であります。私どもの心の帝国は単に多彩の彩りの雲塊として低く大地の地平線上にあって、現世の日々に快晴を告げていないけれども[*2]、それでもこれは虹の端緒であって、汚れて暗い地上の上に多彩な色で永遠の平和の門として天に懸かり、未来にただ太陽だけを約束しているのであります。

蝶とプシュケ[霊魂]の発展についての太古の比較には、人が求めているものよりも多くの真理が含まれています。というのは青虫の中で本能がすでに未来の設計を有していて、本能は、人間の中で聖なる本能がするように、その設計を仕上げる手筈になっています。スウァメルダムによれば、すでに青虫の中で蛹が準備されていて、蛹はまた蝶をその折りたたまれた羽根や触角と共に内包しています。さてこの青白い、閉じ込められた形象は脱皮を経、新たな鎖の中への不安げな営繭や硬い蛹の牢獄への監禁を経、最後にはこの牢獄を破って自由の中へ押し出て、厚い青物の葉から離れて、大気の中、ただ花の上をたゆたい、青虫の胃を有せず　ー　這う足を有せず、蜜と愛とを求めています　ーー　いやはや、この類似性は何と私どものプシュケの願望を語っていることでしょう　ー　蝶のように羽化のときプシュケは数滴の血を流したいのです。羽化して、一気にたるんだ羽根を大きくしっかりと広げるためです。というのも蝶のようにプシュケは幾千も苦労してその展開のために働いてきていて、空腹や苦痛に耐えてきたからです。こうしたすべての痛々しい脱皮の後、窮屈な営繭やほとんど動かない蛹への白髪の硬直の後、結局何も生じなかったり、あるいは垂れた蛹の棺の中に腐敗した蝶の他には何も本来残るものはないとしたら、余りにも過酷で、矛盾したものではないでしょうか。

しかし人間は神々しさに反対するものの方をすべて、神々しさに賛同するものよりも容易に信ずるものです。神々しい陽光に満ちた生涯全体が一日の曇りの日で消えてしまい、そんなわけでもっと容易に短く暗い死で、長い光明の未来が消えてしまいます。私どもは勿論存在の不思議な夜の中に暮らしています。そして予感が私どもの月光です。しかし月光は陽光を前提としていないでしょうか」。

「しかしながら」とアレクサンダーが言った、「人間が砂漠で蜃気楼を信じてしまい、遠くから喉の渇きを癒やすと約束しているものを砂漠と見なしてしまうとしても、若干許せることでしょう」。

「真理がなければ錯覚もあり得ないでしょう。人間は間違う以前に、前もって一度水を

飲んだことがあったはずです」と私は言った。かくて小惑星ケレスの名の章は終わる。

章の惑星上で

いやケレスよ、小惑星として、いや地球に収穫をもたらす女神として、さわやかではあるが、永遠にすべてを与える神性の像としては余りに小さすぎる。神性にとって与えるためには時間は窮屈すぎて、ただ永遠だけが無数の死者の国と共に十分に広くて、神性の贈り物は約束に他ならず、神性の約束は贈り物に他ならない。天国に満ちた一つの思念で、浄福者の海がますます広大に育ち、ますます高く膨張し、神々しい愛の視線の許で至るところ輝くようなものである。

*1　ヘルバルト『哲学入門のための教科書』、２２１頁。
*2　周知のように地平線上の多彩な雲塊は、所謂部分虹であるが、雨天を意味する。これに対して、長い湿気の後に現れる全く輝かしい虹は晴れた日々を告げる。

Ⅷ
パラス
［面積］

［母親の死についてのゼリーナの寡黙な痛み　ー　興奮し、自己磁気睡眠療法　ー　胸の傷の夢　ー　その傷についての公の情報　ー　磁気睡眠療法の決意と準備］

私の内面は充実しており、そこで短い

章の惑星パラス上での伸展詩［を］

いつもは末尾に持って来るのであるが、代わりに早速冒頭に置くことにする。

ミネルヴァよ、女神達の中で戦争で最も厳しい汝は血を流し　ー　汝の胸には死へと石化させる蛇の頭部が住んでおり、汝の兜には茶番好きなフクロウが、夜に殺害するフクロウが覗いている。なぜ汝は、ただ愛と希望とがその祝典を静かに行う家に、悲嘆をうるさく告げる死のフクロウを送るのか　ー　汝はまた石化させるメドゥーサの蛇をも後から送るつもりか。戦時に若者の心を石化させ、そしてこの亡き者を悼むすべての愛する者達の心を石化させる蛇を送るつもりか。

我々はこれまで我々の未来と希望の星々が懸かっている天の箇所を探す間に、ゼリーナと彼女の友ヘンリオンのことを長いことかなり失念していた。今やそれだけに一層詳しく二人に共通の話を追って、運命が二人を屈するよう強いるとき、この高貴な魂で鼓舞することにしよう。　ー　ゼリーナは彼女の母の死をまさに人生の四季で言えば五月に入るとき、つまり十四歳のとき甘受しなければならなかった。内部と外部の春が心を蕾みのように膨らませて、同時に柔らかにするときである。甘い憧れと痛々しい憧れとが互いに根付いた。しかし彼女の子供らしい痛みはもっと下の方で生長し、育った。彼女は父親の前で

は痛みを表面上押さえて隠さなければならなかったからである。父親は不可欠の痛みの他には自分の周りにも自分の内部にも目にすることを好まなかった。彼は自分の世界を巡る旅の最後のマイルは船出のとき上機嫌で笑って、あたかも最初の乗船であるかのように済ませたかったからである。彼女が心を開くのは時折、自分の母親の誠実な友カールゾンを前にするときでしかなかった。しかし彼女がしたことはせいぜい、憂鬱な星の光の下、彼を濡れた目でじっと見つめ、それから星々を見上げて、黙っていることであった。しかし彼は彼女のことをすべて了解した。良き人ならば次のこともきっと大目に受け入れてくださることだろう。つまり彼女はこっそりと、自分の母親がカンパンの谷での結婚式と旅の日に身に着けていた旧式な旅の服を大きな旅行帽と共に、時に数時間、いやもっと長く、自分の口の難い心の姉妹の目前でだけ着用して、それを目にしたら苦痛に感じたであろう人が誰もいないとき、父も、それどころか騎兵大尉もいないときに、あちこち動いてみたのであった。大尉はかの魔法の谷とかの旅の日を相変わらず憂愁の念を抱いて思い起こしていた。故人の服というものは豊かに飾られているが、しかし別の水[純度]の真珠を伴っていて、着色は過去の色合いの変化によるものである。　ー　ゼリーナは古くなった母親の服を泣かずには長く見ておれなかった。

外部の目のこれらの抑制された涙は結局彼女の神経にとって溶かすような王水となって、砕ける間に彼女の本性に一つの激情をもたらし、これはこの上ない活動を通じて発散することになった。つまりは手当たり次第に選んで、ただ仕事を遂行していったのであり、彼女自身吟味せずに、料理とか部屋の飾り付け、いや（父親の目にとって）彼女自身の化粧、冗談、踊り等である。生来の穏やかさのためにしばしば自分で他人に対する性急さを責めることがあったが、しかしこの性急さを他人はしばしば少しも感じていなかった。

今やまことに不死についての会話のために彼女は絶えず第二世界へと引き上げられ、彼女は　ー　女性達はすべての事案を人間に関係付けるので　ー　早速自分の母親のことを考え、更に一層熱く母を愛し、母の後を追って死のうと願った。かくて彼女の美しい顔は次第に色あせ、むしろ後退し、両頬の薔薇は二つの淡紅色の蕾に縮み、百合の色合いが広がっていった。ただ目だけは次第に輝きと神々しさを募らせた。星々に似ていて、これは冬、花のない青ざめた世界の上にまさに最も生き生きと輝くのである。

外部の力によって物体的外堡が、いや城塞全体が占領されても、だからといってまだ精神は征服されない。精神は至聖所に引っ込むように脳の城へ隠れる。つまりより高度の神経体の中へ隠れるが、これの外的体は単に壁にすぎず、堡塁にすぎない。狂人であっても魂には占領されない聖なる神経の箇所を残さなければならず、これは狂人達の分別ある夢や分別ある死去の瞬間が証している通りである。かくてゼリーナの中ではすべての神経の明かりが彼女の本性の内奥部に集まって、彼女の自我の最後のドレスをタボルの山にあるかのように輝かしいものにした。そしてこれは今や、暗がりの中で明かりを吸うダイヤモンドのように、夢の暗闇の中でほの白く輝いた。

その後一昼夜経ったとき、これまでまだ不確かであった自己磁気睡眠療法の存在が明らかになった。これは他人による磁気睡眠療法によって、その薬剤を告げる声高な療法へと昂進されなければならないものであった。彼女はヘンリオンの絵から離れていないベッドで、彼がマルセイユで胸に傷を受けて危険な状態で寝ているのを夢に見たのであった　ー　弾が心臓の近くで大事な胸を射貫いていた。この肺は単に自由の空気のみ吸い、ただ高

貴なことのみ声に出して、二心ない言葉を発していたのだった。ゼリーナは、自分の声が痛みの余りつかえない限り、ナンティルデに負傷したヘンリオンを取り巻くすべての人々の様子を描いた。お世話になっている家の騎兵大尉の友人から外科医に至るまで　ー　彼女にとって恐ろしい者達、長い胸の包帯をした多くの人々さえも描き　ー　更に彼が一通の手紙を彼女に宛てて書き始めることまで目撃した。彼は先に送った手紙のことを述べながら自分達の誕生日に到着すると知らせていたが、しかしこの手紙を、衰弱と流血のせいで外科医の咎めるような視線の下、書き続けることが許されずにいた。彼女は瀕死の者のように痛みから目覚めたが、いつものように快活になった。ナンティルデは彼女から聞いたことを話さないようにした。

その翌朝三通の手紙がマルセイユから来た。一通はヴィルヘルミ男爵宛の彼の銀行家からのもので、もう一通は騎兵大尉宛のヘンリオンが傷を負って休んでいる家の昔の戦友からのもの、そしてもう一通はヘンリオン自身からゼリーナ宛のものであった。夜の神託は文字通り証明され実現されていた。銀行家の手紙は多くの希望を語っており、花嫁に対して想い人の直の治癒と帰還の幸運を願っていた。この手紙は喜んでゼリーナに渡すことができた。しかしドイツ人将校から騎兵大尉宛の手紙は良いものではなかった。この手紙では危険が余り遠慮のない筆致で描かれており、外科医の証言までもが記されていた。つまり愛や喜びのどのような興奮も必ずや致命的な流血を引き起こすであろう、愛する者が突然現れると射貫かれた肺にとっては第二の殺人的鉛弾の飛来となろうというものであった。この証言は時宜を得たものであった。というのは兄と更にまさに騎兵大尉は、抱擁すると負傷した若者の弱い生命の火花を押しつぶしてしまうという確信を得たために、マルセイユへの旅をやっと思いとどまることができたからである。騎兵大尉夫人も冷淡な外科医の側に立っていた。

しかし高貴に悲しんでいる者達の間に一人喜んでいる女性がいた。つまりヘンリオンの手紙を胸に抱いたゼリーナであった。そこには次のわずかな事しか記されていなかった。

「ゼリーナよ、いかばかり多く私について語り、そして貴女について知らせて貰わなければならないことだろう。しかし間もなく私どもの誕生日がやって来る。誕生日を私はただ貴女の許で祝いたいし、神様が私の力をすべて奪うことをしないとしたら、きっと誕生日には貴女の許にいることだろう、深更に月の上にかかる[*1]地球の影と共に到着することになろうとも。というのは今まではどうでもよかった誕生日が喜ばしい祭日となるからだ、その日は同時に貴女の誕生日でもあるのだから。　ー　外科医は残念ながら私が書きすぎていると思い、私から無慈悲にインクを取り上げてしまった。...しかし八月二日にはきっと帰る、たとえその後身罷ろうとも。今や私の血をインクにしたいところだ、ゼリーナ。　貴女の

貴女を...」

ー　しかしペンのインクの滴りは書き誤っていて、医師は新たなインクを与えていなかった。

ゼリーナは負傷者が自分を語る際の力強さを喜んでいて、手紙の熱意から彼の回復しつつある若さの炎を推測していた。しかし彼女の友人達は彼の先の手紙の羽ばたきの代わりに、この手紙には単に出血し続ける、なお更に沈んだ生命の疲れた鼓動を見いだしていた。彼女が彼の言葉に読み込んだ自分の心の炎が彼の言葉に見せかけの力を与えていた。

いやはや、何と我々の平静な、とらわれない、ただ事柄のみをあげつらう調査に突然現在の困窮が押し寄せてくることか。今や重たい涙で一杯の心がさながら頭脳に先駆けて考えた。　ー　そして奇妙なことにそして慄然とすることに、ゼリーナの夢には見知らぬ予言的世界が浮かび上がってきたが、それが夢の中で先行されていた現在に対し珍しい反映を投げかけていた。

マルセイユからの諸手紙はヘンリオンの状況をすべて明らかにしていたので、ナンティルデは、夙にすべての情報に先んじていたゼリーナの予言的夢のことをもはや予言者のゼリーナ本人に対しても、私ども皆に対しても隠さなかった。今や、いつもより美しい意味で茫然自失する乙女に対して、彼女の体の後見人となり、いつも他人を病院へ連れて行くが、自分は新しい病人を連れに病院から身を返す彼女に対し、助言し、援助することが義務となった。墓地というのは、力強い精神が飛行を伝えた肉体を、ますます急に湾曲した状態で引き寄せたので、肉体は間もなく倒れざるを得なかった。自己磁気睡眠療法はただ技術的磁気睡眠療法で育てられ、言語とより明るい自由へと高められる必要があった。新しい状態が同時に薬となり、そして薬を告げるようにするためである。

しかし彼女はなかなか磁気睡眠療法の手の下に応じようとしなかった。彼女はなぜ我々皆がそうしたいのかさっぱり分からなかった。彼女は何ともなかったし、そのような有り難い治療は彼女にとって過分のことであったからである。彼女は大いに真面目であった。というのは磁気睡眠療法に尊敬の念の信仰を抱いていたし、磁気睡眠療法の魂への全権に若干臆していたからである。はなはだ愛想と愛情に満ちた人間の場合、ちょっとした抵抗はただより強い抵抗を隠していることがある。ただ彼女の抵抗は最後にはこう彼女が聞いて折れることになった。つまり彼女は　ー　これは彼女にヘンリオンの慰めの手紙が着く前は隠されていたことであるが　ー　彼女の磁気睡眠療法の目でマルセイユの想い人とその苦しみに立ち会っていた事の次第を聞いたのであった。「あら」と彼女は言った、「だったら多分より強い磁気睡眠療法の中では毎日一層明らかにあの方の苦しみを知りながら一緒にあの方と暮らせるわけですね。私が目覚めて、すべてを忘れなければならないということになっても、きっと周りの方が私が体験したであろうことをすべてまた私に話してくださることでしょう」。　ー　負傷した若者の善良な父親に溜め息や濡れた目が生じても許せるのではないだろうか。父親は遠方であることと医師の言のために、容赦なく隔てられていた大事な息子について、毎晩この上なく敬虔な鳩の郵便を通じて飛んでくる言葉を聞くことができたのである。

最終的に二つのことを考えて善良な娘は賛同した。第一に考えたのは、より健康な花盛りの枝の磁気睡眠療法を通じて、自分の想い人を受け止めることができるという点であり、第二はこの夢の生活はさながら心の再生となるはずで、自分もその生活の中でより敬虔に、より良いものになるであろうという点であった。

今や彼女は自分の素早い迅速な仕事ぶりの性質のために、私が私の磁気睡眠療法の手を彼女の頭と彼女の心窩に置くときが待ちきれず、ましてやその日は待ちきれない思いでいた　ー　頭と心窩に置く点に外的処置はあったのであるが、それ故早速翌日の晩がそのために選ばれた。

*1　八月二日（一八二二年）には夜十一時三十二分に大きな月食が始まった。

IX
木星
［面積］

［最初の磁気睡眠療法　ー　ヘンリオンの精神の語り　ー　肉体の［死の］悲しみに反論するカールゾン　ー　死体への関与の説明　ー　再会に反論する悪魔の弁護士　ー　知識、幸福、価値の突然の完成への反論　ー　他の民族の夢　ー　再会のための記憶の欠如　ー　記憶の証明］

第一の細分割

［最初の磁気睡眠療法　ー　ヘンリオンの精神の語り　ー　肉体の［死の］悲しみに反論するカールゾン　ー　死体への関与の説明］

ゼリーナは技術的微睡みのために避雷小屋を願った。そこは西側、フランスに対し最も綺麗な最も広大な眺望があって、その西側からヘンリオンの帰りをいち早く見ることができるからであった　ー　ひょっとしたら彼の誕生日以前かもしれなかった。有機体は形象豊かなプロテウスであるように　ー　その不具や治療の点でさえそうであるように　ー　磁気睡眠療法でもそうである。透視の女性の誰一人として他の女性と同じように治ったり、夢想したりしない。私が数分私の手を頭と心窩の上に置くと、大きな明るい目は生気を失って、死者のように自ら閉ざした　ー　そして突然顔全体がより高次の世界へ去った者の顔のように神々しくなった。彼女は何度か何事かを願うかのように西の空を向いて、最後にはっきりと太陽の方を向いた。あたかもソファーに座りながらまさに太陽に向かって進みたいかのようであった。

突然何か珍しいことが彼女の精神の中で生じたに違いなかった。神々しい顔は崇高な顔になって、青白さと閉ざされた両目のせいでさながら女神の大理石像となった。「あなただ」　ー　と彼女は嬉しげに叫んだ　ー　「あなたに傷はない　ー　傷とは遠ざかって　ー　生きている者達や死んだ者達のようには現世の衣をまとっていない。精霊は言葉の中に住んでいるが、しかし言葉と一緒には消えて行かない」　ー　「誰を見ている、ゼリーナ」と私は言った。

「私を遮らないで」と彼女は言った、「精霊が語る。陽が沈まないうちに、あなたにお答えしましょう。続けて語って、愛しい精霊。汝の言葉は私の翼。それらの言葉が私を諸肉体から霊達の間へ運んでくれる。どこの墓にも人間はいずに、墓の裂け目から空の開口部が大地の間に通じていて、数百万の墓を通じて下の方で第二の星空の恒星がほのかに輝いている。墓には私どもの人間はいない」。

今や彼女は募る歓喜と共に再び精霊の言葉に耳を傾けているように見えた。とうとう彼女は言った。「精霊は消えてしまった。陽が沈んだら私は目覚めるのだから。　ー　それではヘンリオンが私に語ったことをヨハネスお聞きください。ヘンリオンの周りはどこも光が流れていて、でもすべて周りの生命のないものは光によって色あせて、隠されてしま

った。ただ彼の形姿だけが明るく光線の中を輝いていた。『愛しい方、あなたはもう肉体を離れたの』　ー　『いや』と彼は言った、『しかしゼリーナ、このことが君に何の関係があろう。君はいつか私の上着のことで、私とは関係なかった何ものかのことで、私の服のことで、私の空洞の蠟像のことで、それが先には陽光で溶けてしまい、後には土塊で押し潰されるからといって悲しむつもりかい。いや恋する女性は恋する男性の似姿を失うことはない、その似姿は心の中に住んでいて、棺の中にはないのだから』。　ーー　そしてここでヘンリオンは私の精神がかつて考えたときよりも、そして私の心がかつて感じたときよりも崇高に、人生について話し始めた　ー　此岸では互いに、北方の信仰では身罷った諸精霊がそうであるように、やがて足許で滴り落ち、飛散する軽やかな雲の上に暮らしている恋人達について、互いに一緒に飛ぶときにのみ一緒に留まる恋人達について　ー　散って行く集雲について　ー　人間生活の高貴さについて話し始めた　ー　この高貴さはただ墓からのみ見ることのできるもので、ちょうど日中に数百万の空の星々を眺められるのは、私どもが天文台を上に登るときではなく、下の深みに降りて行くときに限られるようなものです。　ーー　いや歓喜よ、苦悩を離れた胸よ　ー　ヨハネス、私が目覚めた後、すべてをまた私に語ってください。太陽はすでに半円の形で沈んだ。ヨハネス、いつもこの時刻に私をここに連れてきてください、太陽が沈むとき私が目覚めるようにするために」。　ーー

最後の陽光と共に彼女は目を開けた。不安げに両目で、夢の中で自分と私どもに漏らしたことの印を私どもの目に探っていた。しかし彼女はただ、愛する者の骸を悼むことに超然としていて、負傷した若者は見えなかったということを耳にすると、夢の中でかくも高揚した魂は打ちのめされて、こう尋ねた。「私は本当に泣かなかったのですか」。そしてそう泣かなかったと聞くと、今や泣き始めた。彼女はかくてまた女性らしさを見せていた。これは月のように、オーロラなしに、朝の歌声の呼び声なしに昇って、静かに暗闇の中穏やかな光線を放って、病人や、さすらいの者達、愛する者達の許にいるのである。しかし眠りの覚醒の中では月が太陽のようなものであった。磁気睡眠療法の錬金術は卑俗な内実の魂さえも高貴な金属に変えて、それらに標準ドイツ語、高尚な感情、詩人の飛翔、敬虔な心を与えるのであれば、早速自分の人生のタボルの山から輝く衣装をまとって魔術的エーテルの船に乗り込んだゼリーナのような女性は上の全く新たな高みではまずどんなに神々しくなるに違いないことか。

彼女が不安げにヘンリオンの生命について残した彼女の諸現象から私はまさに慰めとなるものを導き出した。ヘンリオンのエーテル的な似姿、鏡像は、と私は言った、単に彼女の高められた自我の代理人とその自我の観念にすぎず、ちょうど他の透視の女性達が自分達の内面の采邑保有者、代理人としてあるときは一人の子供を　ー　あるいは一人の老人を、あるいは親類の者や全く未知の者を眼前に有して、この者達が自分達に、本来は自分達自身がこれらの代理人に吹き込んだことをすべて告知し、助言するようなものだ、[と]。ー　かくてゼリーナはむしろ自分のヘンリオンを二重化して、尊敬の念からそれを彼自身の代理人としたのである、と私は述べた。「あなたは良い方です」と私は言った、「あなたにとっては守護神すら、あなたの愛のエコーのためには愛する若者の代わりに十分ではなく、愛する若者本人でなければならなかったのです」。　ー

ーー　「そしてエーテル的似姿が我々皆の慰めとなることに、私の息子は存命であると

請け合った」と騎兵大尉は言った。彼の熱い精神は磁気睡眠療法の不思議を渇望し信心して受け入れ、自らの力の中に変えていた。その後彼はエーテル的形姿の言葉、あるいは本来は透視女性の言葉を全面的に受け入れて、失われ飛び去った人間精神を残された肉体という土台に再び見いだし哀悼する人間の錯覚に反論の言を加えた。「人は」と騎兵大尉は言った、「およそ清澄さ分別の力に関し有するもののすべてを発揮して、無意味で根拠のない作用を転ずるというか作用を弱めるべきでしょう。つまり私どもに骨や、髄液や繊維や皮膚の冷たい死んだ集合が及ぼす作用のことで、あたかもそれは生きた魂であるかのようなものです。　ー　それに愚かな経帷子や　ー　まことにつまらない多彩な腐敗の槽、最後の地上の鳥籠、つまり棺と呼ばれるもの　ー　そして最後に、鳥籠の上で塚[墓]という名で平にされる掘り出されたモグラの盛り土といったものが及ぼす作用のことです。手品師めいた空想にこう命ずるといいのです。身罷る精神を肉体と峻別すること、精神の去った部屋と峻別する如くであれということです。精神は目や耳がお陀仏になったとき、私どもに精神が別れを告げるのは臨終のベッドの上なのに、民衆はベッドでよりも墓のところでもっと激しく悼むものですが、空想にはもっと強く制限をかけるべきです。いや、男性にとっては無意味な墓地での光景、魂のないものに対する嘆き、人間の土台と沈降についての悲しみは遠ざけられて然るべきです。　ー　そうすると喪中の者達の悼みは一層和らぎます。というのはまさに死者のかの感覚的なものが強引に心を砕いてしまうからです。ちょうど敵の襲来を見るとその肉体的外面のために想像上の敵のどんな行動よりもはるかに激しく私どもを動揺させるようなものです」。

ー　このように騎兵大尉は肉体の残余に関する哀悼を熱心に撃退していった。あたかも何らかの未来の待ち伏せに対して前もって武装し、訓練しようとしている按配であった。しかし公使館参事官は、彼は生来すべての迷妄、幽霊、お化け、神学的政治的迷誤、心の迷誤に憤然と戦う者で、死体に関する哀悼の迷信により厳しく攻撃をかけた。「人々は」と彼は始めた、「精神の不死に対する人々のどんな自負にもかかわらず、本当は肉体が自分達の要点であって、人間の真の団結心であると秘かに信じていることを露呈しています。それ故肉体は、腐臭と腐敗のために遠ざからざるを得なくなるまで、人々にとって愛しい者の謂でなければならないのです。一体外部人間にあって存続し続けるものは何でしょうか。外部人間はライルによれば四年ごとに新しい肉体となって、肉体は蒸発し、腐敗していく構成要素に囲まれているそうですが、一体存続し続けるものは（ただ棺の中でのみのことで、生命の中では不変ではありませんが）骨格の他にありましょうか。カディス人が骨格の絵で死を崇拝していたとすれば、私どもは骨格の下で生命を思い浮かべます。　ー　親戚の者が片足や片腕を戦争で失い、それを埋葬させるとき、なぜこの片足や片腕の墓の前に立って、哀悼の思いにかられないのでしょう」。

「ここでは私の以前の」と私は割り込んだ、「楽しい論考が似合いましょう。その論考の中で私は射落とされた手の墓の前に立って弔辞を読み上げて、以前私どもの指を抑圧していた手が永久に冷たくなったと述べたものです」。

「また類似のこれに近い迷誤に与してもなりません。つまり死者達やその骸骨、肉体の安静について語るものです。私にはどうでもいい。数百の民族がこの迷誤を墓石に彫り込み、確かなものとするとき、この諸民族の了解は単に源泉の、間違いであるにせよ真実であるにせよ、源泉の共通性のみを証明しています。人はこう言うべきでしょう。『何と穏

やかにこの骨格は憩うことか。穏やかにこれらの骨は時の嵐の下、眠っている』。まさに腐敗と共に個々の部分の動揺、運動がようやく始まるのです。個々の部分はそれ以前は有機体の支配下で束縛を受けて働いていたのです。そもそも肉体は休むことがありません。ランベールの不動の中心的太陽でさえ、万有の重心、諸太陽の弾み車として絶えず引力を働かせていなければならないことでしょう。それでは説教師の方々、誰が一体他に休んだり眠ったりするのでしょう。不死のものとなるのであれば、多分魂でしょうか。しかしそれでは何のために長い不死を魂は得るのでしょう。　ー　それに何から永遠の間休むつもりなのでしょう。十年働いた代わりに無限の学校休暇というのでしょうか。むしろ私は思います。私どもの現世の子供部屋での児戯の仕事の後、まさにより高く成熟して活動がいよいよ始まるに違いないだろう、と。

一体人間の墓はどこにあるのでしょう。ペロポネソス半島で奪われたギリシア人の頭部がそこにあるというのでコンスタンチノープルでしょうか。　ー　それとも心臓はグレトリのような人に属していて、裁判によってやっと戦い取られてというのでグルノーブルでしょうか。　ー　それとも以前オーストリアの大公をそうしていたように、心臓と舌はアウグスチノ修道会士の宮廷教会のロレット礼拝堂に、内臓と目は聖シュテファン教会に、胴体はカプチン修道会士の廟に埋葬されたというので、三つの異なる教会にあるのでしょうか。

本来の外部人間は骨格でしょう。しかし誰もこの遺物を哀悼の対象の聖なる体にしようとは思いません。詳しく言うと、第一にこれは愛する者の前では存命中隠されていたからであり、第二にどの骨格も他人の骨格と似ていて、何ら特徴的差異がないからであり、第三に最大の哀悼の痛みが静まった後に遅れてようやく出現するからです。　ー　いや外部人間と内部人間のこの取り違え、外部人間から内部人間への哀悼の転移はもはや完全にそのままの死者達の場合見られません。これらの死者達が半ばミイラ化するほどに十分に古びていて、ブレーメンの大聖堂のブライケラー[1]［鉛地下室］の干涸らびた形姿達のような場合とか、サン・ベルナール峠の収容所での互いに寄りかかり合っている凍死者達のような場合です。

ちなみにそもそも十分に珍しいことと言えるのは、人間が肉体を、この肉体を生存中は神学的にも哲学的にも魂の下部にどんなに低く貶めても十分でないという風なのに、この同じ肉体を気高い魂が去って、突然温かさを失い冷たい塊となると、肉体の完全なら似姿として敬い悼むということです。　ー　しかしそれ以前に温かい肉体を十字架にかけ殺害することを命じていながら、冷たい肉体をすでに前もって少々神聖視するという神学的再生の教義は、多分こうしたすべての哀悼の欺瞞に一役買っているのかもしれません」。こんな風に公使館参事官は述べた。しかし彼の言はすべての女性達の心に逆らった。「あら」とゼリーナは言った、「愛する人が去ってしまったら、私どもがまだ涙を浮かべて見つめ、情愛を込めて抱きしめるものは何も残らないのかしら」。

「さて」とアレックスは答えた、「すべての心の関係は人生では『天にます我らの父よ』のように十字架あるいは聖遺物で終わるのであれば、少なくとも思い出のためにより良いことを知っています。ちょうどローマの海賊がその捕縛者を死者と結び付けたように、死者と結び付け、より低い程度で、より短い間であるけれども何人かの風変わりな哀悼者達のように亡くなった恋人の肉体を棺に入れたまま自らの許に住まわせ、一緒に持ち

運ぶのです。つまり誰かが聖遺物を欲するならば、申し上げますが、故人の日常の服、仕事着を受け継ぎ、取り入れるといいのです。そしてその服を着て、ちょっとした詩的光学と共に更に人生の苦労を共にし、数年間働き疲れ、楽しく別様に運動するように計らえばいいのです。平服の他に余計なこととしては更に晴れ着を加えることもできます。故人はそれを着て通常かつてまことに喜んだはずで、喜びの酩酊の中で幾多の希望を抱き、いやそれどころか少々気位高くなり、見下していたはずです。　ー　更にせいぜい埋葬の前に頭部から一房、指まで感ずるようにと切り取ることも考えられます」。

「アレックスさん」　ー　と私は最後に言った　ー　「全くあなたのおっしゃる通りです。しかし情感の言い分も正しいのです。勿論高貴な魂はすべてあなたと一緒に肉体の中の死の姿に抗し、大事な亡骸の痛ましい攻撃に抗し、見知らぬどうでもいい容器の容器としての棺や墓に抗して、中の住人は夙に去ったものとして、力強く、冷酷に武装してまさに自らにこう言うべきでしょう。現世の素材での焼き菓子を哀悼して崇拝するに及ばない。動ずることなく墓地を行くがいい。別の世界は万霊の墓地であり、宇宙は諸霊の教会であるが、ただ生きた霊だけの教会なのだ、と」。

「その通り、その通り」と騎兵大尉は言った、「我々が目を男らしく空ろな驚愕の像から転じたら、もっとより美しく、もっと抑制して愛しい者達の逝去を悼むことになろう」。

「しかし情感の言い分も」と私は言った、「正しいのです。顔は本来私どもにとって人間で、目と声は内部人間です。あるいは隠された精神の唯一の人間化です。私どもは本来目に見えない友[恋人]の間をさまよっています　ー　私どもは精霊を愛しているからで　ー　しかし神々しい定めと強制によって声が精霊間の精神的伝声管[メガホン]となっており、視線は空中での優しい幽霊の出現となっています。顔の容色と動きは単に拡大された目の姿に他なりません。このように私どもは他人の心を単に反映や反響の中で愛し、享受するだけです[*1]。私どもの愛する人間の目がだめになり、声がだめになると、愛する魂全体はまだ死んだわけではなく、単に盲いて唖になっただけで、顔[容貌]は青ざめたものの、過去のすべての愛しい反射と共になお生き続けます。それ故哀悼する人間は、自己錯覚のために腐敗の間まだ恵まれるしばらくの時間、愛する者の亡骸を、あたかも亡骸にまだ魂があるかのように、愛し続け、所有し続けようとするのです。　ー　しかし公使館参事官殿、あなたのおっしゃることはいつまでも正しいことでしょう。つまり愛する者との別れはいずれにせよ切ないのに、更に逝ってしまう覆いに対する正体の知れない傷みを加えることはないということです。逝去した心のみが悼まれるべきで、胸の中に残された心臓は悼まなくていいのです」。

*1　民衆は体と魂を一つにこねて、その際魂を単に酵母や混入された酒精とみて、これらを通じて焼き菓子は発酵し、膨らむと考えるか、あるいは魂を単に内部の第二の体と見なす。つまり透明な空気的な形姿と見なし、さながらなお育ちのいい、親しい幽霊の精神であるかのように見なす。

[第二の]細分割

[再会に反論する悪魔の弁護士　ー　知識、幸福、価値の突然の完成への反論　ー　他の

民族の夢　ー　再会のための記憶の欠如]

女性達には、肉体と肉体の哀悼への男性的攻撃は、まことに喜ばしきもの、十分な勝利とは思えないように見えた。「男性達は」とナンティルデは言った、「私どもの体を青虫の皮のようにはぎ取って、裸の覆いのない小さな魂として私どもを飛び回らせています。私は天国でも自分の体を保持していたいし、ゼリーナの鼻は今よりも四分の一リーニエ[一インチの十分の一]ほど長くなって欲しくない。私は再生が好きだし、そのときはまた同じ鼻を、それも神々しくなった鼻を得たい、アレックス」　ー　「一千年か数千年同じ鼻を見ること、これにはまだ耐えよう」と彼は答えた、「しかしナンティルデ、永遠の間は実際ごめんだ」。

二人の兄妹は互いに愛すること、自分達の愛しているものを愛することの他にはほとんど一致点がなかった。

女性達は、主に将来の再会について若干のことを　ー　自分達の心の基本条項を　ー　私から聴講し、そもそも人間の持続の諸関係について聞くことに憧れていた。公使館参事官は彼女達の願いに彼の側から賛同した。この点については解決して欲しい、まことに多くの疑念や質問を有するだけに一層賛同すると彼は言った。力強い進行や温かい包括的熱狂は、敵対する反論の冷たい干渉によって困憊し、混乱し、仕舞いには箍の緩んだ全体としてかろうじて残ってしまうことを私は承知していたので、私は彼に、むしろ彼の反論をすべて一山に続々とまとめてしまい、それをまさに時宜にかなった悪魔の弁護士として教義全体に抗して述べるよう頼んだ。彼は出来るだけのことをすると約束した。

一行はまた夕方、ゼリーナが磁気睡眠療法の微睡みに陥った美しい避雷の丘へ向かった。ナンティルデとそれにゼリーナさえもヘンリオンの出現を楽しみにし、また悪魔の弁護士に対する反論の若干の言葉すら期待した。しかし期待に反してゼリーナの神経はすべての催眠に逆らった。ひょっとしたら彼女の憧憬と理念の炎が余りに強く燃えたからかもしれない。あるいは主に愛しい太陽が、いつもその日没時に彼女は目覚めたのであるが、今回は雲の背後に留まっていたからであろう。　ー　それだけに一層快適にアレックスは自分の主張、反論を我々に述べることができた。従って彼はこう始めた。

「混乱した話しぶりをお許しください。混乱した話の赦免状を有するのは説教家ばかりでなく、即興で話す人々もそうです。思うにあなた方御自身どこかで気付かれたと思いますが、不死への大方の懐疑家は漠然とした暗さで形成されていて、不死に近寄ってみると不死はこの暗さに消えて行きます。しかし最初大地からまだ輝いている白い霧は、その中を長く行くほどにますます濃く、暗くなって、最後には何ももはや、その中では自分自身すら見えなくなります。終わりのない、最期のない人生、これはどのようにして実現され、耐えられるものになりましょうか。人々は時の果てしのなさの代わりに、すべての時の止揚として永遠を置くことによって、時の果てしのなさを回避しようとします。しかしどのようにして私ども有限な者、制限された者が、単に無限な者に属する束縛のなさの所有に至るのでしょうか。私どもは、無限の者のみが永遠の者であるというのに、永遠の者と呼ばれるのでしょうか。　ー　永遠から時への移行以上に、時から永遠への移行は考えられるものでしょうか。　ー　勿論私どもはほとんど時とは関与しなかったほどの短い期間の時の後、永遠の者となってしまうのかもしれません。更に永遠性のためには一つの神性、

すべての面での完成、不変性が必要です。空虚な私どもがどうして永遠性に適合できましょう。

それでもとても鋭い神学者達がこの永遠の精霊達に永遠の肉体すら準備しますが、この肉体はその上現世の、上品に篩いにかけた土壌から焼き上げるもので、同様に内部に住まう霊魂達に、最も卑俗な地上的な木製の霊魂から始めて、同様の永遠性を贈ります。かくて聖職者達の平民、僧侶達が最初の世界ではどんなにひもじい想いにさせ、鞭打ち、割礼させても十分ではないこの同じ肉体、[蛆の餌食の]肉体が、別の世界では永遠性と神々しさの報酬を受けます。もっとも敬虔な肉体も不埒な肉体よりももっと倫理的であることはなくなっています。ただ私が知りたいのは、博識というよりは鋭敏な神学者達が、彼岸の一人の人間に衣装箪笥全体から探し出して掛けてやる肉体を選び出すときどのように決定するかということです。人間は通常の生理学者によれば、十一年ごとに、ライルによればそれどころか四年ごとに、少しずつ部分的に新しい肉体を加えて、古い蟹の殻から忍び出るのだそうです。

そもそもどのような再生した肉体が第二世界では動き回っているのでしょう。ただ単一の形姿の諸肉体です。老神学者ゲルハルドゥスは彼の『神学的典拠精解』四つ折り判第八巻の中でこの件に関するすべての自他の意見を伝えています。彼自身は誰もが死んだとき有する形姿を考えています。他の者は最初の両親の形姿で　ー　更に他の者は、三十二歳と三ヵ月（その年にまで達していたら）のときの形姿を考えています　ー　猫背の者や不具者は全く優美に健常に動き回り、切断された殉教者達は聖アウグスティヌスによると自然科学者の言う虫どものように、切断された肢体をすべて再生しますが、しかし傷跡が名誉の印に残されます。　ー　同じくアウグスティヌスによれば子供達は（すでに地上ですみやかに成長しますが）両親同様の背丈と頑丈さで、胎児についても、此岸では酒精の中の留め針に刺さっていますが、教父は同じことを主張せざるを得ないことでしょう。もっともこれらの肉体の小少女服からはどうしようもなくて、全く新しい肉体が創造されなければなりません。　ー　半分人間で、半分動物の奇形児さえも教父は再生させておりますが、しかし人間と動物を区別して、人間を人間的に取り出します。

あの世の浄福者は胃や腸を有しない　ー　幾匹かの蝶が蛹から出た後、有しないようなもので、それにまた乳糜管や爪、髪の毛等を有しないという点に関しては皆が一致しています。しかし血管も有しないと私は言いたい。乳糜管がないのであれば血管も用がないわけで、同じ理由で肺も、また同じ理由で心臓もなくて良く、かくて再生する人間全体からは内臓を抜いて空ろな蠟人形とかエジプトのミイラにできます。ミイラは再生以前にすでに内臓が抜かれるのですが。かくて神学者達はすべての肉体的な第二世界を単に神々しい皮膚と骨とで一杯にできましょう。というのは神学的妄想の本来の密会は死後の彼岸の高みにあるからです。ちょうどコウモリにとってピラミッドは葬儀の塔としてあるようなもの、私どもの教会の塔は教会の墓地にあるようなものです。というのも神学者は墓地からすべての宮廷を、侯爵の宮廷から農園に至るまで、支配しているからで、墓地は彼らの[古代フランク人の]三月議会であり、領土です。そして地球を動かすためにアルキメデスの要求した地球外の点は、まさに墓丘の大地がそうです。

一度肉体を脇に置いて、彼岸と此岸はどんな具合か、あるいは彼岸での精神はどんな具合か見てみましょう。はるかに素晴らしいと彼らは言います。ラーヴァーターが故人の体

を貴族の地位に高め、あらゆる騎士団所属の騎士としているように　ー　というのは故人は肉体を随意に無限に縮小したり無限に拡大したりできるし、太陽から太陽へと歩いて行けるし、音楽的音色でそれも幾種類もの音色で話して、どの語りもまことに一つのコンサートという風であるからで　ー　同様に故人の魂も此岸とは類のない徳操で仕上げられて、同前の知識、同前の浄福さを有することになります。しかし一体魂が単に肉体から離れて、切れたからといって、真珠虫から貝殻が突然離れたからといって　ー　というのはそれ以上のことは人間には何も生じていないのだから　ー　永続的に高貴化された魂が、至純の連合の真珠が生ずるでしょうか。どうして一瞬のうちに倫理的努力をしないまま普通の人間が倫理的人間に、倫理的英雄や勝利者に変身するのでしょう。此岸では十年徳操を求めてもなかなか上手く行かず鍛錬、強化できなかったというのに。

同じ完成の奇蹟が故人の神々しい頭脳に見られます。単に現世の頭脳を失ったからという理由です。永遠全体にわたるこのような学問と知識が突然一気に精神の中で発展します。さてこのような煌びやかさと充実をもって認識の木はアロエのように半世紀抑えていた開花を一晩でなし、はじけます。例えば賢人達が生涯にわたって恥じ入らせたような職人が臨終の晩に開花します　ー　思慮の錯誤は、此岸で真理がまれであるほどには彼岸でまれであるということでもなく、すべて錯誤はもはや彼岸では人間的なことではなくなって、どの物故者も永遠を通じて、人民の声あるいは教皇の系統として思いがけず常に正しいものです。　ーー　かくてこうしたことをすべて主張する神学者達に人々はまさしく死と天国を願って、是非彼ら自身とこの主張そのものに対して最良の証明がなされるのを見たいものだと思います。

天上的敬虔さと天上的洞察への二つの不死の跳躍あるいは飛翔の後、天上的浄福への第三の跳躍がなされます。それもまた古い肉体のエリアの外套を投げ捨てることと、神々しい肉体のファウストの外套を広げることによってです。かくて互いに民衆の哀れな悪魔が皆、誰もが彼岸では喜びの日射しがまれにしか射さなかった曇りの人生の後、もはや二，三の日射し、というのではなく、早速一杯の日射しの極地の太陽の日［日曜日］が、歓喜の至高のもの最長のものが恵まれると思います。さて人間は下界では単に上界の反復や二重化を思い、前提とするので、ちょうど下の解明された海底は山々や、谷、草の大地、それに陸地の泉さえも反復しているようなもので、それで勿論ラプランド人の許では天国はトナカイで構成され、グリーンランド人の許ではアザラシで、タヒチ人の許ではパンの木で構成されます。パンの木では果実はすでに焼き上がっていて、食べられるのです。　ー　これに対してまさに祝日には断食日のキリスト教徒のように豊かなユダヤ人はまことに何と変わった天国界を有することでしょう。つまり楽園の生命の木を得ていまして、そこから五十万もの美味しい果実をもぎ取れますし、またすべての賢人にとって二つの特別な天国を得ています。そこでは三百十の諸世界の喜びのエキスを享受できるのです。　ー　スヴェーデンボルクは故人の霊にははるかに少ない喜びしか仮定していません、つまり四百七十八種類だけです。ユダヤ人女性は誰でも夫に毎日一人の子供を産みます[*1]。これは日数を重ねると永遠ではかなりの子孫、ユダヤ民族を生み出します。神々しいユダヤ女性の日々の反対はトルコ人の Houri で、つまり母親とはならず、処女となります。ただキリスト教の民族は、無色の透明な、大地を反映しない天国を有していて、これは普通のキリスト教民族にとって、単に歌と祈りと退屈に満ちた最後のメシアーデの歌に相違ありませ

んし、あるいは別世界は諸民族に満ちたただの祈りを捧げる仮装舞踏会です。それ故普通の男は天国の悦びに刺激されるというよりは地獄の怖さに追い払われます。天国の悦びというのは此岸での敬虔さが彼岸での絶えざる敬虔さで報われるというもので、この悦びはせいぜいその混乱した信仰の中で永遠の休養という希望で我慢できるものになります。
ー　しかしどのような可能性をもって（どのような権利でもって）不断は鋭い神学者達は将来の至高のその上絶えざる喜びを仮定しているのでしょう。［人間の噴水では上がらないとなると、曲がって下がるものです］。人間の性質ではより大きな喜びを感ずるのは大きな喜びの後ではなく、大きな痛みの後なのですから。現世は此岸での喜びによって必ずしも喜びの耐性を準備していません。しかし幸いなことに思慮深い葬儀の説教者は浄福をとても定かならず、漠然と見も知らぬものに表現しており、かくてその無限定性のために人間の心の中に落ち着くことができます。そしてただ一つ永遠の喜びを現世の生活から模していますが、それは再会と愛し続けることです」。
「この愛と神への愛で永遠には十分だわ」と小さな声でゼリーナは言って、遮らないようにした。
公使館参事官はそれを聞いていた、しかし構わず続けて言った。「特に再会と再び愛することが女性の信仰の教理問答の質問集では第一条となります。女性の心から生ずる問いだからです。再認知あるいは再会のためには再び思い出すことが必要であり、この為には記憶が必要で、記憶のためには若干の脳が必要です。しかしすでに此岸で脳が圧迫されたり、詰め込みすぎたり、眠り込んだり、縮んだりすると、現世の人生が忘れられるとするならば、すべての四つの脳室が倒壊し、塵と化したとき、我々は別世界のどこから何らかの記憶の柱を用意することになるのでしょう。新しい状態への大きな転換はいずれも新しい状態で先の状態が、下層部を上層部が覆うように覆います。例えば馴化された未開人の子供の中では、いやすでにヨーロッパ人に育てられた未開人の中では彼らの過去全体の思い出が消えます。さて現世の人生の思い出が、現世の人生そのものの若干の波で砂に埋もれてしまうのであれば、どうして思い出は埋もれることなく死の海を通り抜けられましょう。そして新しい拘束された諸状態に満ちた類のない全く未知の世界で存続することになりましょう。それができるなら、熱い若者も胎児としての自分史を思い出すことができ、一緒に双生児として過ごした楽しい日々､辛い日々を思い出すことができることでしょう。
ー　しかし再会が生ずるとします。すると私は大抵の哀れな地上の心の持ち主、地上の顔の持ち主を永遠の間どうして我慢すべきか分かりません。いつも人々は第二世界へ、過ぎて行く地上の諸関係を移植する際に、移植によってこの蜻蛉どもに強いる永遠の持続ということを忘れてしまいます。同様に自分達の狭い生活圏や履歴を移転し、永遠化する際に、百万もの精霊、百万もの諸世間、それに自身の高められた自己というものを忘れてしまいます。
劫罰を受ける故人のことはこれまで私の悪魔の弁護士職では全く触れませんでした。浄福の故人がないのであれば、劫罰を受ける者もどっちみち消えます。　ー　いずれにせよ明らかなことは、第二世界に近づくほど、それだけ一層第二世界はその色彩と形象を失います。物理的天も、山々で天に近づくほどに、さわやかな青色を失って、遂には黒い経帷子として世の上に広がるようなものです。
以上です」、とアレックスは言った。　ー　この言葉のときに突然雲の空から太陽が現

れて、私どもに温かい別れの日射しを送りながら沈んで行った。

*1　フリュッゲ『不死の信仰の歴史』第一巻　ー　かくてまた、私が彼らの国民的神の記述の際に注釈したように、彼らの貧しい空想は、単なる数字の乱舞となって現れている。あたかも詩的生活が商人的生活であるかのようである。

［第三の］細分割
［記憶の証明］

私は公使館参事官の、すべての手本の祈祷、模倣の祈祷に反対する役目上の大胆な決然さと彼の反抗を称えた。女性陣が黙っていて、彼の弁護料は報いが少ないと思われたので、少しばかり埋め合わせする必要があった。「彼がちょうどやめたとき」とナンティルデは言った、「外は明るくなって、太陽が少しばかり覗いた」。　ー　次第に曇りの空全体が退いて、東側に段々と重なって、我々の頭上には半月が明るく懸かって、自らの側の間近に星々を近寄らせていたが、その明かりを奪うことはなかった。ゼリーナは半月を喜ばしげに見つめて、言った。「早く帰って来て、愛しい　ー　半月」。彼女はヘンリオンと言おうと思った。ヘンリオンは彼の誕生日に、次の満月のときに戻って来るつもりだったからである。

「我らの友のアレッキスは」とヴィルヘルミが口を挿んだ、「闇の侯爵としての悪魔の役を曇りのときにまことに正直に引き受けられた。今度はＪ．Ｐ．殿、貴方が少しばかり闇の彼の仕事を追い散らしてください。少なくとも半月の明かりがありますから」。　ー

私は答えた、「半月の明かりも太陽から来ています。ただちょっと迂回して来ているわけです。しかしまず終わりの部分を話の端緒にしますと、参事官殿、弁護士殿は、記憶に関して、記憶と同時に再会を私どもから取り上げていますが、正しいとは全く言えません。一体絶えず生長する経験の世界全体を得て、担っているのは誰でしょう。明らかにその世界は地球儀の都市名のようには脳球の表面や中に担われているのではありません。柔らかい小球の塊がある学者の語彙集を含んでいるのでしょうか、その痕跡はどこにありましょうか。学者の脳もそうでない者の脳も外見は同じようなものです。どのようにして有機的粥を通じて精神的秩序や結合は生ずるのでしょう。　ー　視神経はすべてのその映像を、例えば活字の像を脳の同じ箇所に組んで、いわば整えていますので、何らかの分別ある力が映像の層を陳列室に陳列し、きちんと並べて広げるに違いありません。しかし自ら思い出しつつある脳という不合理全体は夙に打破されています。

しかし脳の作品は、記憶は脳の傷や病気、高齢で沈み、消えて行くという自然の現象を考えると生き生きしたものです。しかしこの現象はもっと卑近にもっと日常的に視られるものです。夢は眠りこけているとき目覚めに対するレテの川を用意しています。目覚めはまた夢に対するレテの川を注ぎます。かくて我々は日々二回忘れます。一度は昼のことを忘れ、一度は夜のことを忘れます。しかしだからこそ精神にとって内容が同じようにしょっちゅう消え、また同じようにしょっちゅう戻って来るのでしょうか。従って例えば全く

無意識になって私の魂全体が消去されて、そしてまた目を開けるたびに略奪された魂がどのようにしてかは分からないけれども再び充填されたのでしょうか。精神自体は無で何も有しないのでしょうか。

しかし精神はまさに一人ですべてを有します。ただ精神は自分が住んでいる観念の地球を、他のどの球体に対してもそうであるように見通せず、ただ周航できるだけです。博識家にとって何百万ものすべての彼の観念のうち、瞬間ごとには単に二，三の観念が視野に浮かぶだけで、他のすべての観念は目に見えず、それが上昇してくるまで地平線の下にあります。あるいはもっと適切に言うと、我々の精神のさながら星座でできた天からは瞬間ごとには一つの星あるいは考えしか私どもの内的望遠鏡の視野には入って来ず、他は夜に覆われています。さて、幾多の語彙や名前がしばしば何年間も、あるいはもはや思い出されないとき、あるいは時折死の直前にまた思い出されるとき、だからといってこれらは休息している表象の全帝国として精神の中に根付くことが少ないといえましょうか。

ただ脳器官は、これで魂は備蓄の考えを思い出すようにしますが、物忘れのせいで萎えたり、傷ついたりします。というのは魂と体の間のかの不可解な身分差結婚においては、ここでは一切が関連しているか何も関連していないかであり、また最も崇高な考えが肉体の小部分を動かすと同時に最も低級な考えも動かすのであり、かくて記憶と脳とが情熱と血のように連動して働くからです。しかし道具はだからといって職人の親方ではありません。ちょうど脳が諸印象の聖遺物収集ではないこと、すべての情感に模して鼓動する心が喜びや悲しみの諸印象の聖遺物収集ではないようなものです。しかし筋肉の動きは意志ではない、私どもが筋肉を動かすときの手段たる意志ではないけれども、それでも私どもは精神的緊張を、それを強めるときに感じます。同様に私どもは思い出そうとするとき、特に思い出そうとして無駄なときに、同様に脳器官への作用を感じます。

例の説教師が、三十年間忘れていた、かつて暗記していたヴェルギリウスを突然また思い出したとき、あるいはまた例の乙女が、不自然な眠りの後すべてを忘れて、すべての馴染みのものを文字から友人に至るまでまた覚えなければならなくなったとき、そして数ヵ月後に二度目の新たな長い眠りで再び忘れたとき、しかしこのたびは最初の眠りの後覚えたものだけを忘れて、逆にその前に知っていたことすべてをまた思い出したというとき、そしてまたこの記憶の交替が何年も続いたというのであれば、こうしたことすべてが明らかにしているのは、まさに魂が記憶の内実を保持していて、しかし内実を器官の交替に従ってあるときは働かすことができたり、あるときは働かないよう放置せざるを得なかったということです。特にこの乙女は、右手と左手が交替に萎えて、あるときは低音弦のみを、あるときは高音弦のみを弾くことのできたピアノ演奏家に似ていたのです。

記憶の中の子供時代の花々は、冷たい高齢時に至るまでもなお枯れずに生き生きとしていて、一方老人は周りの晩年の苗床が干涸らびているのを目にするとすれば、この常磐木は脳の柔らかい土台を通じて保たれているのではなく、これ[柔らかい土台]は高齢の硬化した土台とは共存できないからで、そうではなくアダムの土で一杯の子供らしい、空腹の、受容に富む、塞がっていない精神の中ではすべての情感は根をもっと深く、広く張るのであります。晩年には根源的な関心は欠けます。しかし興味を抱けるのは精神だけで、肉体ではありません。

ようやく透視の女性がその不思議な記憶と共に登場する番となって、私どもに尋ねます。

自分の想起と忘却はどこから生ずるのか、想起と、これは、自分の人生の僻地、諸々の夜に及び、最も深い子供時代と最も深い失神にまで及び、忘却はどこから生ずるのか、眠りの後で目が開くこと芝居の落とし戸の如く、地滑りの如くであり、目は人生のすべての新しい世界を飲み込みます、と。しかし忘却の海底からの沈降した時代の想起、思い出しは、さながら更に第二のエーテル的脳が存在することの一つの証明ではないでしょうか。この脳は単に日中の重たい圧迫的な脳から解放されさえすれば、精神のより繊細なエーテル的な刺激に従順に従うことでしょう。

そして最後にかの、これと近しい現象のことです。つまり死ぬ直前には狂人に理性が戻るように、病人に数年間沈降していた記憶の領国が再び戻って来て再び花咲くのです。瀕死の肉体はその厚い、強張った樹皮と共にあるエーテル的肉体から分離するのではないでしょうか。そのエーテル的肉体はより軽快に精神の努力に従って動くのです」。

訳注

Ⅰ　水星

第一の細分割

(1) 三十年前、　『カンパンの谷』の時代設定は一七九六年で、『ゼリーナ』の設定は一八二二年。

(2) カンパンの谷、　ピレネー山地の北側にある観光地の谷。

(3) ジャン・パウルのメモに次のように記されているそうである。「カンパンの谷では十五歳の若者が最も高い山々で家畜番をした。更に下ると、年少で体格も幼くなる。　一十五歳を過ぎると、家畜番は農夫となり、平地にいて、以前活動した山々を見上げる。若者達は彼らに上方から食事を運ぶ」。

(4) ハンザー版、第四巻、616 頁以下参照。また拙訳『ジャン・パウル注短編集Ⅰ』九州大学出版会、261 頁以下参照。

(5) スペイン、　谷はスペイン国境近くにあるが、しかしフランス領内にある。

(6) テンペの谷、　ギリシアのテッサリアにあるオリンパス山とオッサ山との間の牧歌的な谷。

(7) アルバーノ、イドイーネ、　ジャン・パウルの長編小説『巨人』の登場人物。

(8) フランスの戦争と国王、　フランス革命戦争とルイ十六世の処刑を暗示している。この話のかなり前に起きたことである。

(9) 火災、　一八二三年九月四日ホーフは火災でほとんど破壊された。

(10) 脆い親友、　一八一九年ミュンヘンで亡くなった親友ハインリヒ・ヤコービのことをジャン・パウルは考えている。

(11) ヨシュア、　ヨシュアは祈りで太陽を停止させた。「ヨシュア記」十章参照。

(12) ライプツィヒから、　一七九八年ジャン・パウルはライプツィヒから老グライムを訪ね、更にヴァイマルへ二度目の旅をした。

第二の細分割

(1) ギリシア人達、　一八二一年三月始まったギリシア人の解放戦争はヨーロッパ人の心の賛同を得て、トルコ人支配に対する志願兵が沢山参加した。

(2) ペロポネソス半島の再救出、　解放戦争では当時旗色が悪かった。

(3) ノルマン将軍、　この将軍は志願兵の指揮官ではあったが、ナフプリオの攻城には加わっていず、この時期メソロンギの町に閉じ込められていた。

(4) 現今の普通の否認、　ジャン・パウルはゲーテの一八二〇年に刊行された論文『新しい哲学の影響』等を考慮している。

第三の細分割

(1) アンティパロスの洞窟、　エーゲ海のアンティパロス島の洞窟は古来有名。

第四の細分割

(1) タボルの山、　ガリラヤのタボルの山はキリスト変容の地と見なされる。

(2) ウィルソン式避雷球、　スコットランド人の画家 Benjamin　Wilson（1721-88）は、丸い

避雷柱を造って、今日見られる先端の鋭い避雷針を造ったフランクリンと一七五七年論争した。
(3)空白の注は、『カッツェンベルガー博士の湯治旅行』ハンザー版、第六巻、162 頁注参照。また『ジャン・パウル中短編集Ⅱ』九州大学出版会、95 頁以下参照。
(4)自由のための戦争、　フランスとドイツの間の解放戦争の他に、一八〇八年以降のナポレオン支配に対するスペインの独立戦争、一八二〇年のスペイン内戦、一八二〇年のイタリアのカルボナリ蜂起、一八一二年から一四年の合衆国とイギリスの戦争、南アメリカの独立戦争等を考えている。
(5)ヒルトブルクハウゼン、　ジャン・パウルは一七九九年ヒルトブルクハウゼンの公使館参事官の肩書きを得た。
(6)モンテスキュー、　『法の精神』Ⅳ、２.

Ⅱ　ヴィーナス
第一の細分割
(1)変容、　ラファエロの最後の未完成の絵。今日ヴァチカン美術館にある。

第二の細分割
(1)ロイドのコーヒー店、　あらゆる情報や噂が集まったとされる有名なロンドンのコーヒー店。
(2)数百万の恒星等、　ここの部分はヨーハン、ハンリヒ・ランベルト（1728-77）やリヒテンベルク（1742-99）の記述の影響が考えられる。
(3)注、　ベーレントによればレースラーの『実用的天文学の手引き』から採られている。
(4)ゲーテ、　「どの葉もどの芽もそれ自体一本の木となる権利を有する。そうならないのは葉や幹の支配的な健康が制御しているのである」。『自然科学、特に形態学に寄せて』第一巻、第二分冊（1820）。
(5)ギリシア人に降伏、　当時流布していたこの情報は確認されていない。城塞はこの年の終わりに落ちた。

Ⅲ　地球
第一の細分割
(1)シャクンタラー、　戯曲『シャクンタラーあるいは決定的な指輪』はインドの戯曲家カーリダーサ（紀元四五〇年頃）が発表したもので、一七九一年フォルスターが翻訳した。
(2)ヘルダー、　「魂の輪廻について二回目の会話」、『乱れ草紙』第一集（1785）、246 頁以降参照。

Ⅳ　火星
第二の細分割
(1)フラクセンフィンゲンの侯爵、　ジャン・パウルの長編小説『ヘスペルス』の侯爵ヤヌアールのことと思われる。
(2)アレクサンダー大王のように、　すでに古代においてアレクサンダー大王は「欲望や

便通や睡眠から分かるように、私も一人の人間にすぎない」と発言したと伝えられている。ラブレー『ガルガンチュアとパンタグリュエル』第四巻、六〇章を参照。しかしそこではこの発言はより正確にマケドニアのアンティゴヌスのものとされている。
(3)パラゴニーアの皇子、　ジャン・パウルの抜粋に「怪物への王子の興味ははなはだ大きいので、王子は妃がいつかそのような子を産んだら大いに喜ぶだろう」とあるそうである。このパラゴニーアの王子についてのメモはフレーゲルの『喜劇的文学の歴史』(1784)第一巻 66 頁から採られている。

第三の細分割
(1)Christoph Wilh. Hufeland(1762-1836)、イエナとベルリンの医師、教授。医学的基礎知識の普及に努めた。
(2)ゲーテによれば、　『自然科学、特に形態学に寄せて』第一巻、第一分冊(1817)XⅣ頁。

第四の細分割
(1)天体力学、Pierre Simon Laplace(1749-1827)の主要作品のタイトル。五巻本で 1799-1825 年に出版された。
(2)Samuel Thomas Sömmering(1755-1830)、重要な解剖学者、生理学者。
(3) 草稿では、[Heinroth 等からの借用の]仮説という文のうち[　] の部分が消されているとのこと。ベーレントはハインロートの『人類学の教科書』(1822)第四十二節以下を典拠に挙げている。
(4)注３，　ジャン・パウルは多分『ムゼーウム誌上』に 1814 年発表した論文「動物的磁気睡眠療法の若干の不思議についての推測」のことを考えている。
(5)Karl August Böttiger(1760-1835)、　ヴァイマルの古代研究者、ギムナジウムの校長。
(6)注４、　ベーレントは K. Chr. Wolfahrt の『生命の磁気睡眠療法のための年報』第四巻第一分冊（1821）から次の箇所を引用している。「死は、この有機的生命を三重の有機物として維持している絆を解消する。肉体は原素材、自分の出発点の大地に戻る。魂も同様に出発点に戻る。...肉体と魂の間に漂う生命そのものは、肉体や魂と類似して沈んで行くが、独自の方向を示さずに跡形もなく消滅することは少ない。どうしてか。生命はまた様々な生命の中で有機体として、天使的に、幽霊的に、あるいは魔神的に出現し、輪廻し、漏れ出て来ないだろうか」。

Ⅴ　ヴェスタ
(1)多くの痛み、　ジャン・パウルは自分の息子の死を考えている。
(2)未加工の四角の石、　ジャン・パウルの 1808 年の抜粋に次のように記されている。「古代アラブ人の許では四角の石が神性であった。...　アテネのパラス[女神]やケレスは未加工の支柱であった」。
(3)倫理性、　草稿では消されている。ジャン・パウルは別な語を当てようとしたと思われる。

Ⅵ　ユーノー
(1)言うことになりましょう、　『超キリスト教について』の作品で言及する予定であった。
(2)カンネ、　草稿には更に Tersteegen の名前がある。カンネの場合、Joh. Arnold Kanne（1773-1824）の『顕著な目覚めたキリスト教徒の生涯』（1816-17）、後者の場合、Gerhard Tersteegen（1697-1769）『聖なる魂の精選伝記』（三巻本、1733-53）が考えられる。

Ⅶ　ケレス
(1)ヘーゲル、　『エンチクロペディー』（1817）292 節、「動物の生活はそれ故そもそも病気の生活と考えられる。同様にその感情は不確かで、不安に満ち、不幸な感情である」。
(2)Gotthilf Heinr. Schubert（1780-1860）、　自然哲学者。『自然科学の夜の面についての見解』（1808）。
(3)行使しています、　草稿には余白に注が記されている。「動物的本能はむしろ触糸を有し、人間的本能は触覚を有する」。

Ⅸ　木星
第一の細分割
(1)ブライケラー、　大聖堂の地下室はブレーメンの町の最も著名な名所の一つ。地下墓室。

解説

恒吉法海

ジャン・パウルは比喩の作家であるが、死後の世界について対話の形式で議論を深めようとしたのが『ゼリーナ』(1827 年死後出版）であるといえる。

しかし結局比喩的に説明するしかなく、死後の世界はジャン・パウルでは１）盲人が目明きになった状態、２）青虫が蛹となって更に蝶となる状態である。３）この論証が正しいかどうかも「砂漠の蜃気楼」の比喩で終わる。

１）盲人が目明きになった状態

ジャン・パウルの処女作の『見えないロッジ』では主人公グスタフは地下で育てられ、「再生して」後、地上で生活することになる。「空の移り変わりの一つ一つが、日没の一つ一つが、一分一分が、彼の心を物珍しさでいっぱいにした」(Hanser Bd.1.S.65)

「私どもの至高の見解に対して暗く立ちはだかる睡眠、高齢、死のこの三つの難点は、肉体に対する魂の関係について調査するよう迫り、導くものです。これらは本来月による太陽の三つの食のように分類されます。眠りは部分日食、あるいは魂の食です。殊に夢によってまだ明るい部分を残すからそう言えます。高齢は金環日食で、その時月は中央にありながらただ円環の微光のみを残します。死あるいはしばらくの皆既日食は太陽全体を覆います」(Bd.6.S.1168)。

２）蛹の比喩

「蝶とプシュケ[霊魂]の発展についての太古の比較には、人が求めているものよりも多くの真理が含まれています。というのは青虫の中で本能がすでに未来の設計を有していて、本能は、人間の中で聖なる本能がするように、その設計を仕上げる手筈になっています。スウァメルダムによれば、すでに青虫の中で蛹が準備されていて、蛹はまた蝶をその折りたたまれた羽根や触角と共に内包しています。さてこの青白い、閉じ込められた形象は脱皮を経、新たな鎖の中への不安げな営繭や硬い蛹の牢獄への監禁を経、最後にはこの牢獄を破って自由の中へ押し出て、厚い青物の葉から離れて、大気の中、ただ花の上をたゆたい、青虫の胃を有せず　ー　這う足を有せず、蜜と愛とを求めています　ーー　いやはや、この類似性は何と私どものプシュケの願望を語っていることでしょう　ー　蝶のように羽化のときプシュケは数滴の血を流したいのです。羽化して、一気にたるんだ羽根を大きくしっかりと広げるためです。というのも蝶のようにプシュケは幾千も苦労してその展開のために働いてきていて、空腹や苦痛に耐えてきたからです。こうしたすべての痛々しい脱皮の後、窮屈な営繭やほとんど動かない蛹への白髪の硬直の後、結局何も生じなかったり、あるいは垂れた蛹の棺の中に腐敗した蝶の他には何も本来残るものはないとしたら、余りにも過酷で、矛盾したものではないでしょうか」(Bd.6.S.1211)。

シューマンの「パピヨン」にはジャン・パウルの『生意気盛り』の影響がよく言及されるが、以上の文脈で考えるのも一興であろう。プシュケを「サイコ」と捉え、ヒッチコックの『サイコ』をリメイクするときには、音楽にシューマンの「パピヨン」を使う手も考えられよう。

３）砂漠の蜃気楼

作中人物カールゾンの結論。「かつての私とは違って、つまりかつて私はまだ遠くの精

霊界を蜃気楼の逆しまの見せかけの中に見ていて、生き生きとしたさわやかな水の世界を砂漠と見なしていたのであるが、　ー　現在の私のように自分の世界を第二世界と有機的につなげて、浸透させている人は幸せである」(Bd.6.S.1120)。

作中人物としてのジャン・パウルの結論。作中人物のアレクサンダーの茶々が入る。

＜「しかし人間は神々しさに反対するものの方をすべて、神々しさに賛同するものよりも容易に信ずるものです。神々しい陽光に満ちた生涯全体が一日の曇りの日で消えてしまい、そんなわけでもっと容易に短く暗い死で、長い光明の未来が消えてしまいます。私どもは勿論存在の不思議な夜の中に暮らしています。そして予感が私どもの月光です。しかし月光は陽光を前提としていないでしょうか」。

「しかしながら」とアレクサンダーが言った、「人間が砂漠で蜃気楼を信じてしまい、遠くから喉の渇きを癒やすと約束しているものを砂漠と見なしてしまうとしても、若干許せることでしょう」。

「真理がなければ錯覚もあり得ないでしょう。人間は間違う以前に、前もって一度水を飲んだことがあったはずです」と私は言った＞（Bd.6.S.1212)。

日本語の世界には「山川草木悉有仏性」とか「和光同塵」とあって、創造主と被造物の間に明確な差別を設けていない。ところがヨーロッパでは伝統的に、創造主、その似姿の人間とあって、人間は特別視され、「真善美」を目指すとされる。その点日本人は「真善美」を一応認めるものの、それは浮き世の原理であって、それが究極の原理とは思わないのではないだろうか。原理を特定せずに「善悪は時なり」、「結果自然成」と生きているのではないだろうか。しかしジャン・パウルは「真善美」、特に倫理性を死生の問題になると強調している。

「それに肉体化なしに認識や倫理的行為が死後可能ならば、一体なぜそもそも人は最初のここにある肉体を身にまとったのか」(「死後の死について、あるいは誕生日」(Bd.6.S.162)。

「そこへはただ無限なる腕のみが人類を連れて行けるのである。というのは一つの神性がなければ人間にとって目的もなく、目標もなく、希望もなくなるからで、単に震える未来、すべての暗黒に対する永遠の不安のみが、そして至る所に偶然のすべての人工庭園の下での敵意ある混乱のみが生ずることになるからである。しかし神性があれば、すべては好意的に秩序付けられ、至る所に、そしてすべての深淵に英知が見られることになる。かくて神性は、最初の人体化[具体化]、居住化を単なる偶然にまかせて全地上の諸魂に分配させたわけではなかったように、同様に第二の人体化、それに続く人体化も偶然に任せたのではなかったであろう。かくて遂に第三に数千年続く人類のすべての塊は、第二の天体、宇宙の新しい講義室、自然の第二の神殿を見いだす可能性がはなはだ高いだろう。このように我々を輪廻させて、希望を抱かせて欲しい」(Bd.6.S.1155)。

「ただ至聖の者だけが、諸状況の必然性とか偶然の混沌が関与しているのではなくて　ー　私どもの中にかの精神的有機的形成衝動を置けたのであって、その衝動が内部の人間を倫理的美へと発展させているのです」(Bd.6.S.1197)。

従ってフランス人の唯物的見解には反対している。

「そこで悪魔の弁護士にとって、すべてに鑑みて、結論を出す、つまり比喩で語ること

は結構なことに思われます。君達がヴェルサイユの王宮に行って、周知のモランの仕掛け時計を覗き込み、協同してかみ合う歯車すべてを観察して、一つの歯でもそこから取り出したら全体の時計の進行が壊れる按配であり、そしてこれらの重力によって動かされている歯車がまた、進行全体の成果として棒で時刻を告げ、鳴らす一人の人形を突き出す様を御覧になり、　ー　更に若干の人工的副次的歯車が組鐘[カリヨン]まで奏し、この背後で飛び出てくるルイ十四世を、ちょうどヴィクトール広場に見られる具合に供するのであれば、君達はきっと、かの人形あるいはこのルイ王が進行仕掛け、指針仕掛け、打鐘仕掛けを支配しているとか、それどころか生き残るであろうとは思わないことでしょう。その人形とか国王は歯車が一つ止まってしまえば即刻停止してしまうのです。　ー　さて我々の工芸豊かな肉体はまさにモランの時計仕掛けであり、我々の現前している精神は飛び出てくるルイ大王で、ちょうどヴィクトール広場に見られる具合であります。そして不死への信仰というのはルイ大王が時計の歯車が止まった後も生き残ることを信ずることであります。これは我々すべての比喩時計に妥当して、そのうち何人かの者は詩人達のように真の玩具の時計であり、他の者は神学者達のようにカッコー時計、あるいはうるさい目覚まし時計であります」(Bd.6.S.1167)。

高橋憲一氏は「なぜ私は君ではないのか」という疑問には科学的に答えることはできないと明確に述べておられる。「『ある特定の原子集団やタンパク質の塊』がなぜ『貴方』ではなく、『私』なのか、その理由を科学は語らないのである」(『ガリレオの迷宮』共立出版、482 頁)。「なぜ私として生まれてきたのか」、「死後はどうなるのか」、こうした死生の問題は「科学的」には解明できないのであり、それ故「とんでもない」言説のはびこりがちな問題である。従って古来の知恵、「我未だ生を知らず、いずくんぞ死を知らん」と説くことや、また自我に執着するなかれ、「無我」と考えよという仏教の教えは賢明な教えであろう。しかし死後について考えてみることは自然な欲求でもあり、ジャン・パウルの『ゼリーナ』を読むと、古来の様々な考えも紹介されており、200 年前の西洋人の死生観を知る上で参考になろう。

まず輪廻についてのジャン・パウルの巧妙な論説を紹介する。

人間間の輪廻については、最初の人の魂の問題とか、新規の魂と再生の魂の割合とか、どのぐらいの時期を経過するのか、現在の魂は過去の魂か未来の魂かといったことが言及されており、おかしいのであるが、すでに今の生にうんざりしていて、それを繰り返すのもあほらしいと述べている。

「最後に幾多の民族が人間の魂を再生者とか幽霊としてではなく、新生児として再生させている。ヘルダーは（魂の輪廻についての彼の会話の中で）現世の人間の営み、子供となり、背が伸び、年を取る奮闘努力にうんざりして鬱々と語っている。実際私自身二度と、いわんや十回もは、またアルファベットの読み方や注、ラテン語の例外、ヘブライ語の動詞を学びたくない。こんな目に遭いたくない　ー　と私は今六十歳であるが申し上げる。

ー　しかしこの年齢に再生の幼年時代からは達しないかもしれず、すべては初めから最初のときと同様に新鮮に進行するかもしれない。むしろこのような再来の彗星として人間

はその人生を同時に二重化し、多彩に仮装することだろう　ー　人間はその素敵な青春時代をそのすべての最初の歓喜と共にまた手にできることだろう　ー　他の公開された人生の地位を専有し、管理する多様性は大きいのであるけれども、結局必ずしも先の肉体や役割を引き受けることにはならないかもしれない。例えば勤勉な百姓は痛みもなく休みの多い宮廷人として、詩人は皇子として、兵士は快適な学者として、その他等々で再来することだろう。いやそれどころか歴史の教授は二度目も歴史の教授として登場を願うかもしれない、それが三度目、四度目、五度目となって、第一幕のときは退席しなければならなかった世界史、民族史の芝居を二幕、三幕、四幕、五幕まで耳を傾けることになって、結局中国、アフリカ、ドイツが時代と共にどうなったか知ることになろう」（Bd.6.S.1151f.）。

この輪廻の説で巧妙なのは、先の魂にせよ、後の魂にせよ、その魂のことをすっかり忘れて今の自分があるとしている点である。「どうして現世において、全く様々な肉体や更には様々な状況からの記憶が物体的に可能ということが有り得ようか」（Bd.6.S.1152）。ここではまた「百万回生きた猫」のことを思い出すのも一興であろう。仮に学歴詐称で教授になった人がいるとしたら、その人は「宿業で」百万回詐称することになるのだろうか。山本玄峰老師は宿業と輪廻を説いている。「ポカッと人間に生まれてきたわけではない。釈迦如来も娑婆に往来すること八千たびと前世経というのをちゃんと残しておる」（『毒語心経提唱』51 頁）。

ゼリーナの名は月から来ており、憧れの源泉としての意味を象徴していると思われる。また彼女の想い人ヘンリオンはギリシア解放戦争に参加し、負傷しており、行動する男性原理を体現している。「しかし瀕死の者達のいる陣営でほど死について考えることがまれな所はない」（Bd.6.S.1138）。ジャン・パウルは世間知も議論に組み入れているのである。かくて一般的な死後の議論ばかりではなく、愛する者の死を目前にした会話へと文学的効果を高めた設定にしている。ジャン・パウルはその頃の先端的科学的知識であった磁気睡眠療法や、動物特に昆虫の蜘蛛や蜂の本能的営みに重ね合わせて、本能的憧れとして死後の世界への人間の憧れを何とか立証しようとしている。その結論は最後のエーテル的肉体とエーテル的魂ということになるが、しかし結論としては、ジャン・パウルの気持ちは理解できる、慰謝としての文学かもしれないが、科学的とは言えないということになろう。なお最近のヨーロッパでの主に経済的ギリシア問題を考えれば、すでに 200 年前からギリシアは問題を抱えていることがヘルダーリンの『ヒュペーリオン』（「ヘンリオン」と響きは近い）同様に『ゼリーナ』でもよく理解できる。論証は結局比喩に頼っている。先に見たように喉の渇きと水の比喩である。

その代わり死後の世界を否定する悪魔の弁護士､アレクサンダーの言説は明瞭であり、説得的である。ジャン・パウルでアレクサンダーといえば、訳注に記したように人間の代表としての謂であろう。注を再度記す。＜すでに古代においてアレクサンダー大王は「欲望や便通や睡眠から分かるように、私も一人の人間にすぎない」と発言したと伝えられている。ラブレー『ガルガンチュアとパンタグリュエル』第四巻、六〇章を参照。しかしそこではこの発言はより正確にマケドニアのアンティゴヌスのものとされている＞（Vgl.Bd.6.S.238）。それ故作中人物のアレクサンダーの言説は人間的で飛躍がない。三箇所引用する。故人となった者は知識、幸福、価値が突然完成すると一般に考えられている

ことへの皮肉である。筆者の父は若干認知症を有しながら亡くなったが、死後父の認知症は治ったのか、時に自問することがあり、すでに同様のことが問われていたと知り、おかしい。

「そもそもどのような再生した肉体が第二世界では動き回っているのでしょう。ただ単一の形姿の諸肉体です。老神学者ゲルハルドゥスは彼の『神学的典拠精解』四つ折り判第八巻の中でこの件に関するすべての自他の意見を伝えています。彼自身は誰もが死んだとき有する形姿を考えています。他の者は最初の両親の形姿で　ー　更に他の者は、三十二歳と三ヵ月（その年にまで達していたら）のときの形姿を考えています　ー　猫背の者や不具者は全く優美に健常に動き回り、切断された殉教者達は聖アウグスティヌスによると自然科学者の言う虫どものように、切断された肢体をすべて再生しますが、しかし傷跡が名誉の印に残されます。　ー　同じくアウグスティヌスによれば子供達は（すでに地上ですみやかに成長しますが）両親同様の背丈と頑丈さで、胎児についても、此岸では酒精の中の留め針に刺さっていますが、教父は同じことを主張せざるを得ないことでしょう。もっともこれらの肉体の小少女服からはどうしようもなくて、全く新しい肉体が創造されなければなりません。　ー　半分人間で、半分動物の奇形児さえも教父は再生させておりますが、しかし人間と動物を区別して、人間を人間的に取り出します」（Bd.6.S.1228）。

「同じ完成の奇蹟が故人の神々しい頭脳に見られます。単に現世の頭脳を失ったからという理由です。永遠全体にわたるこのような学問と知識が突然一気に精神の中で発展します。さてこのような煌びやかさと充実をもって認識の木はアロエのように半世紀抑えていた開花を一晩でなし、はじけます。例えば賢人達が生涯にわたって恥じ入らせたような職人が臨終の晩に開花します　ー　思慮の錯誤は、此岸で真理がまれであるほどには彼岸でまれであるということでもなく、すべて錯誤はもはや彼岸では人間的なことではなくなって、どの物故者も永遠を通じて、人民の声あるいは教皇の系統として思いがけず常に正しいものです。　ーー　かくてこうしたことをすべて主張する神学者達に人々はまさしく死と天国を願って、是非彼ら自身とこの主張そのものに対して最良の証明がなされるのを見たいものだと思います」（Bd.6.S.1229f.）。

「それで勿論ラプランド人の許では天国はトナカイで構成され、グリーンランド人の許ではアザラシで、タヒチ人の許ではパンの木で構成されます。パンの木では果実はすでに焼き上がっていて、食べられるのです。　ー　これに対してまさに祝日には断食日のキリスト教徒のように豊かなユダヤ人はまことに何と変わった天国界を有することでしょう。つまり楽園の生命の木を得ていまして、そこから五十万もの美味しい果実をもぎ取れますし、またすべての賢人にとって二つの特別な天国を得ています。そこでは三百十の諸世界の喜びのエキスを享受できるのです。　ー　スヴェーデンボルクは故人の霊にははるかに少ない喜びしか仮定していません、つまり四百七十八種類だけです。ユダヤ人女性は誰でも夫に毎日一人の子供を産みます。これは日数を重ねると永遠ではかなりの子孫、ユダヤ民族を生み出します。神々しいユダヤ女性の日々の反対はトルコ人の Houri で、つまり母親とはならず、処女となります。ただキリスト教の民族は、無色の透明な、大地を反映しない天国を有していて、これは普通のキリスト教民族にとって、単に歌と祈りと退屈に満ちた最後のメシアーデの歌に相違ありませんし、あるいは別世界は諸民族に満ちたただの祈りを捧げる仮装舞踏会です。それ故普通の男は天国の悦びに刺激されるというより

は地獄の怖さに追い払われます」（Bd.6.S.1230f.）。

ジャン・パウルは生きた人間も以下のように「霊の出現」と観じていた人である。亡骸に対して冷淡な言説が見られることも頷けよう。

「顔は本来私どもにとって人間で、目と声は内部人間です。あるいは隠された精神の唯一の人間化です。私どもは本来目に見えない友[恋人]の間をさまよっています　ー　私どもは精霊を愛しているからで　ー　しかし神々しい定めと強制によって声が精霊間の精神的伝声管[メガホン]となっており、視線は空中での優しい幽霊の出現となっています。顔の容色と動きは単に拡大された目の姿に他なりません。このように私どもは他人の心を単に反映や反響の中で愛し、享受するだけです」（Bd.6.S.1225）。

あとがき

今回はジャン・パウルの遺作の翻訳である。死後の世界を論じたものである。訳だけで十分であろうが、感想めいた解説を付した。2013 年 3 月 21 日はジャン・パウル生誕 250 年である。リポジトリでの発表であるが、現在の筆者にできるささやかな日本での祝意表明である。発表の場を得られたことに感謝申し上げる。

2012 年 8 月 30 日　　恒吉法海